

アズレンズリ劇場

おっぱいサムライ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アズールレーンのキャラに色々なシチュでズツでもらう短編集です。

今までのをまとめ直して、また追加していきます。

1話完結式で指揮官は全部別人なので好きな話を摘まんね。

*本作の本番行為はパイズリです。ご了承下さい。

単回集

目次

秘書艦大鳳のズリ奉仕	1
ホノルル乳港	6
レベル1パイズリ専用艦船シリアス	16
鈴谷の愛欲に満ちた耳舐めとパイズリに墮ちる話	25
ボルチモア バトルスーツの蒸れたズリ穴にたつぷり射精／汗だくの制服ズリでびゆるびゆる射精	35
ケツコン艦フォーミダブルの可憐な乳行為情事／ドレス篇	50
ザラのおっぱい観閲／シャワー室でのパイズリ	64
プリンツ・オイゲンの搾精は濃密なベーゼで始まり、とろけるような耳舐めを経て、最後はえぐいパイズリでめられる	77
ベルファストとお出かけ後の楽しいポツキーゲームがエロい方向に傾いていく件について	93
ホーネットとえつちなスキンシップをした後、ちんちんを挟まれる話	110
ドスケベレースクイーン・翔鶴と瑞鶴に挟まれ、車の中でたつぷりズリ抜きしてもらう話	126
丑乳檜野との新婚旅行／水着選びに悶々とした後日、混浴露天風呂でUカップズリ抜きされる話／（前）	155
丑乳檜野との新婚旅行／水着選びに悶々とした後日、混浴露天風呂でUカップズリ抜きされる話／（後）	167
アズレン春節ズリ祭	184
誰を尋ねる？（導入）	184

シリアスを尋ねる



189

イラストリアスを尋ねる



199

オマケの続き

酔いどれプリンツに絡まれて……



213

単回集

秘書艦大鳳のズリ奉仕

先日、大鳳が秘書艦に就任したことにより、指揮官の生活は一変した。彼女は大変な世話好きであったのだ。

「はあい指揮官様、あーん」

大鳳、指揮官が起床する時を見計らい朝食を用意し、甲斐甲斐しく食べさせてくれる。玉子焼きの甘さが程良く、大変指揮官好みの味である。

「指揮官様、袖口の具合はいかがですか？ はあい、大鳳が縫い合わせしておきましたの。今日もとってもお似合いですわ」

昨日指揮官が気付いた制服の袖口のほつれを、翌日には直してしまいう大鳳。ドレスを自作する程の腕前を持つ彼女にとっては朝飯前だ。「指揮官様、本日のメールの仕分けです。毒味は大鳳がしっかり済ませましたから、安心して業務を進めて下さいませ」

指揮官が仕事を円滑にこなす為の準備を大鳳は怠らない。その甲斐もあって、本日も流れるように業務をこなす指揮官。周囲からの評価も上々である。

「いやー大鳳のおかげで今日の仕事も捗ったよ。何から何まで面倒かけて悪いな」

「当然です。指揮官様のお役に立つことが大鳳の全てですから♡」

労いの言葉をかけられ、恍惚の表情を浮かべる大鳳。2人の関係は良好そのものであった。

しかし指揮官、一つ大きな悩みを抱えていた。

「ところで大鳳、ちよっと聞いていいかな？」

「はあいなんですか改まって」

「ここはどんな場所だっけ？」

「お風呂場ですわ」

「うんそうだね。貴女先回りしてたもんね」

「もちろんです♡指揮官様のお身体を隅々までお清めするのが大鳳

の務めですから」

「そっかー」

指揮官、遠い目をして答える。大鳳は行く先に必ず現れるのだ。

「この前さ、部屋の鍵が壊れて新調したんだけど」

「大鳳と指揮官様の愛が部屋の鍵一つで阻まれてはいけませんもの。合鍵を用意するのは当然ですわ」

「そっか合鍵持ってたかー」

指揮官、虚空を見つめてうなづく。無論作ってあげた覚えは無い。

「そんなことより指揮官様、お背中 of 洗い心地はいかがでしょう。か。何せ大鳳も初めてのことですから、力加減が間違っていたら仰って下さいませ」

「ん、あーきもちええわー、スポンジの柔らかさが染み渡るよ。いつもと違う感じがする、何でだろうね」

「ふふふ、光栄です♡指揮官様のだあいすきな大鳳自慢のおっばいですもの。たっぷりとご堪能下さい」

「そっかおっばいかー」

指揮官、遂に天井の水滴を数え出す。大鳳からは逃げられない。

ずりゆん、ずりゆん、と背中を擦る音が風呂場に響き渡る。胸にはボディソープがたっぷり塗られている。

ずっしりとして、柔らかい。縦横無尽に背中を踊り続ける爆乳。指揮官、未知の感覚に堪らず身体がヒクつく。

「も、もう十分洗えたんじゃないかな？ これ以上は大鳳も疲れるでしよ」

「いえいえ、大鳳に気を遣って頂かなくてもよいのですよ指揮官様。言ったじゃありませんか隅々までお清めしますと。お次は前を洗いますね〜勿論、指揮官様のそそり立つ剛直も……♡」

大鳳、言うや否や前へと移り、指揮官の胸板にぴたりと自分の乳房を押し付ける。抵抗出来ない指揮官を尻目に、上下運動が始まった。ずりゆん、ずりゆん、乳首同士の刺激に悶える指揮官。大鳳は妖しく微笑んでいる。

「た、大鳳」

「はあい」

「もう、十分だから。綺麗になったから。湯船に浸かって終わりに」

「では下に移動させて頂きます♡我慢なさらなくて結構ですわ」

「話聞いている?」

ゆつくりと下がっていく大鳳。乳房が指揮官の腹部をなぞりながら、徐々にそそり立つ陰茎へと近づく。

「ふふふっ♡立派です。さあ、じっくり♡覧下さい指揮官様。大鳳のおっぱいが、このおちんちんを食べて差し上げます」

ずずずつ、どたぶん。

呑み込まれていく陰茎。

亀頭が捕食され、カリ首が見えなくなり、竿部分もまた吸い込まれるように乳房の中へと消えた。

「あっははっ、ゼーンぶ大鳳のおっぱいに入っちゃいました♡指揮官様のおちんちん、とつても熱いです」

大鳳、2つの乳房を同時に持ち上げ、上下に扱き始める。

ぱちゅん、ぱちゅん。

陰茎全体を包み込みながら、みっちり乳房が吸い着く。

「こういう動きはどうでしょう」

今度は交互に乳房を動かし擦り合わせる。

ずりゅずりゅ、ずりゅずりゅ。

規則的な左右別々の扱きが、睾丸から竿へと精液を汲み上げていく。

「はっ、はっ、ふふっ、おちんちんの熱で、大鳳のおっぱいも溶けちゃいそうです♡このまま、一緒に蕩けてしまいましょ指揮官様」

乳圧が高まり、より強く陰茎が咀嚼される。

指揮官、既に思考はボヤけ、ドロドロに溶かされるような快感に抗えずにいる。天井を見上げていたはずが、今や大鳳のパイズリに釘付けである。

大鳳、その様子に大変ご満悦。止めを刺すべく最後のひと押しに入る。

「さあ、指揮官様。少しの遠慮も要りませんわ。熱くて、ドロドロのお、子種♡ぜんぶぜーんぶ、一滴残らず、大鳳のおっぱいに吐き出してくださいまし♡ほら、ほらほら♡」

にちゆにちゆ、にゆこにゆこ。どたぶん。

耳へ響き渡る淫靡な音。

舐め回すような大鳳の視線。

激しく扱かれ蕩ける陰茎。

ああ、このまま全てぶちまけてしまいたい。

指揮官はとうとう決壊した。

「あん♡すごい勢い……射精、なさってますね指揮官様。そのまま大鳳のおっぱいの中を、真っ白に、ぐちゃぐちゃに、溶かしてくださいませ♡」

びゆるびゆる。びゆくびゆく。

止め処なく吐き出される精液が、全て大鳳の柔乳に吸われる。ただの一滴も溢れることはない。数秒続く射精の間、乳圧は緩むことなく、汲み上がる精液を柔乳が飲み干していく。

指揮官、全身が大鳳の乳房へ溶かされていくような多幸感を覚え、言葉も出ない様子。

「指揮官様にたっぷり頂いた精子が、大鳳の胸に溜まっています。ご覧になりますか？ はい、お見せ致します♡」

指揮官、ようやく乳房から解放されることに安堵したのも束の間、目を奪われる。

大鳳が開帳した爆乳の間には、先程まで散々吐き出した精液が見事なブリッジを建てている。大鳳、おもむろにそれを掬い上げ、口へと持っていく。精液の付着した指ごと舐め上げ、扇情的な光景を見せていく。

「ん……くちゅ、美味しいですわ。指揮官様が大鳳のためにたっぷり下さった精液、少しも無駄に出来ませんもの。さあ指揮官様、また汚れてしまいましたし、引き続きおっぱいでお洗います？ それとも、指揮官様が大鳳のおっぱいを好きに使って洗います？ 指揮官様のしたい事なら、大鳳は何でも致しますわ♡ふふ、ふひ、ひひっ、あはははははっ♡♡」

時刻、ヒトフタマルマルのことである。

ホノルル乳港

残暑も過ぎ去り、秋の気配が強まる季節となった。しかし指揮官、夏の嵐が遅れてやって来た、と呟くや否や、とある衣装を注文する。

明石が経営するショップ、そこには季節の概念なぞ知らぬと言わんばかりに、たくさんの水着が常設してある。この度、その陳列に新しい仲間が加わり、多くの指揮官達を滾らせているのだ。

「ああ、この日が来るのを待っていた。待っていたとも」
にんまり。

執務室に戻った指揮官を見たホノルル、そのにやけ顔に一抹の不安を感じる。先日、突如として秘書艦に任命された時から、このエロ指揮官は碌でもないことを企んでるに違いないとは思っていた。今まさに、その予感的中したのだ。

「ホノルル」

「何よ指揮官」

「明日は海水浴だ。私と二人きりだが、心の準備はよろしいか？」

「脈絡がなさ過ぎて意味わからないんだけど」

ホノルル、指揮官との関係は長くそれなりに親密であるが、突拍子も無い発言と行動には未だ振り回されてばかりである。それ故、げんなりとした表情を浮かべつつも、頭の中には警鐘が鳴り響いていた。

普段、指揮官が厭らしい笑みを浮かべるときは、必ずと言っていいくらい、ホノルルの零れそうな爆乳を眺めている。

それも一切悪びれる事もなく、ガン見である。

この潔い開き直り具合には、ホノルルもお手上げであった。しかもこの指揮官、ホノルルが自らの乳房に対しコンプレックスを抱いていると知るや、血相を変えて迫り、

「それを蔑むなんて、とんでもない」

と、いかにホノルルの乳が得難いものであるか、男性にとって魅力的であるかを一方的に語り出した。

ホノルル、当初は男の戯言と思い聞き流していたが、次第に無視出来なくなる。というのも指揮官、どれだけ足蹴にされても一切めげ

ず、ホノルルの容姿、主に乳を褒め讃えるのだ。

ホノルルにとつて、それは非常に効果的だった。彼女は自己評価が低く、所謂ダウンナー系に属する艦船である。華々しい活躍が出来なかった経緯が原因なのか、とにかく自分に自信のない態度が目立っていた。それだけに、下心満載とはいえ、これほどまで執拗な称賛を受けるのは満更でもなかったのだ。

結果として、ホノルルの態度は徐々に軟化した。それは同時に、指揮官に褒められるたびに何かと押し切られてしまうという事態を招くようになっていた。

海水浴で二人きりと来れば、どんなことをされるか分かったものではない。今回ばかりは、どんな言葉を掛けられようと流される訳にはいかない。

ホノルルの闘いが始まった。

「大体なんであなたと2人きりなのよ」

「無論、君の水着姿を独占する為」

「なんでそんなに堂々と言えるのよ……」

ホノルル、早くも押され始める。

「いいかねホノルル。この水着は君のために用意された、君専用のもなんだ。ただでさえ素晴らしいプロポーションを持つ君だ、水着により解放された姿は間違いなく私の心を掴んで離さないことだろう。秋に入りつつあるこの頃だが、君の水着姿を拝まなければ、私は永遠に夏に取り残される予感がする。悔恨の日々を過ごし、冬の寒さを前にして力尽きるに違いない。後生だ、ホノルル。その余りある大きさを私を救ってくれ！」 「は、はあ……そ、そんなに見たいの？」

「見たい」

「あくまで見るだけ、よね？」

「応とも」

「変な事はしない、わよね？」

「イエス、イエス、イエス」

「なら、まあ、うん、いい……わよ。特別よ、特別。あなたがあんまりに熱心に頼むから、かわいそうになっただけだから、ね？」

紅く染まった頬を隠すため、帽子を深く被り直すホノルル。指揮官の勢いを制止出来ず、あえなく折れてしまうのであった。

「お望み通り着替えたわよ。わざわざ艦装を弄って、こんな恥ずかしい格好……はあ」

翌日、海水浴へと赴き、人気の無いビーチでのこと。ホノルル、用意された水着へと艦装を変更し、あまりの露出度の高さに軽々しく受けたことを後悔する。

上下共にシンプルな黒地だが、問題はその布地面積にある。豊満な乳のおよそ半分も隠せてないどころか、下に至っては秘部が一部露わになっている。まさに限界一步手前を極めたかのような造形だ。

ホノルル、指揮官に対し非難の視線を向けるも、悦に入った様子で全く効いていない。

「大丈夫だホノルル。非の打ち所がないとはまさにこのこと、サンダラスと帽子も相まって実にハワイアンだ。可愛い水着姿をいの一歩に拝めた私こそ幸せ者だ」

「またそうやっておだてるんだから……」

褒め言葉しか返さない指揮官の前に成すすべもないホノルル。

「ところで指揮官は何で水着じゃないのよ」

「それはだな、今日の俺の仕事がこれだからだ」

指揮官、おもむろにカメラを取り出す。

「あなた、まさか撮るつもりなの？」

「うむ。明石に頼まれたのさ、宣材写真に使える一枚をよろしくにや、とね。カメラマンに依頼するのが一番だが、それでは私がホノルルを独り占め出来ないからな。故に私が撮る」

「見るだけって話で来たのに……もう好きにすれば？　ただしベタベタ触らないでよね」

「任せてくれ。小道具の類も艦装に登録してある、至高の一枚を仕上げてみせよう」

指揮官、小躍りでも始めそうなくらい上機嫌。こうして始まった撮影会だが、指揮官が余りに熱を入れるため、思いの外長引く。

「むむむ、浮き輪、ホース、パフエ、一通り試したがインパクトに欠けるな」

「そもそも小道具のチョイスがどうなのよ」

「ホース、ホース、ホース……」

「ホースがどうしたの」

「勢いよく水を流せば生き物のようにうねる」

「そう見えなくてもないけど」

「ホノルルよ」

「何よ」

「ホースに襲われてみようか」

むにゅん。

指揮官、唐突にホースの先端をホノルルの胸の谷間へと突っ込む。突然の出来事に言葉を失うホノルル。

「うむ、さすがホノルルのたわわだ。ホールド抜群ときた。ではこの中腹部分を持ってくれ、もう片方の手は浮き輪を頼む」

「待って」

「何だ」

「これは何」

「胸を最大限に活かす方法だ」

「挟む意味は何なのよ」

「今に分かるとも」

仕込みを終えた指揮官、三脚で固定したカメラを待機状態に設定し、握っていたもう一方のホースの先端を蛇口へと繋げる。谷間に挟まったホースはホノルルの顔に向いている。

これから起こることを察したホノルルだが、既に時遅し。蛇口が捻られ、水流が勢いよくホースを駆け上がっていく。やがて爆乳の間を昇ると、乳圧による強烈なブースト。半泣き、かつ真っ赤になったホノルルの眼前で、見事な噴射を披露した。

「はっはっは、連写、連写、連写ア！」

慌てふためくホノルルとは反対に、自動撮影の連写音に酔いしれる指揮官。その胸中は格別の達成感に満ちていた。

「という訳で、世界遺産にも負けない見事な噴水が撮れた。男性指揮官諸君も、この芸術的発想にきつと賛同してくれるだろう。ホノルル、任務完了だ。頑張ったな」

「……ダメ」

「駄目？ 何か物足りない点が？」

「違うわよ」

ホノルル、完熟したトマトのように真っ赤な顔で、指揮官の足を踏みつける。ゲシゲシと何度も踏みつける。

「このままじゃ不公平よ。私だけこんなに恥ずかしい思いをして、指揮官は何もしないなんて不公平」

「ホノルル、痛いぞ」

「黙って」

「はい」

ホノルル、唐突に指揮官の腰へと手を掛ける。ズボンを強く掴み、今にもずり下ろしそうな雰囲気である。

「私も撮る」

「な、何を」

「指揮官の恥ずかしい姿をよ。同じぐらい恥ずかしい思いをさせなきゃ気が済まないの。そうすればおあいこよね、ええおあいこよ。だから脱がすわ」

「待て」

「何よ」

「それはさすがにまずい」

「指揮官が部下の水着姿を撮るのはまずくないって言うの」

「うーむ、それを仮に一ホノルルとすると私の露出は十ホノルルくらいまずい。誰も幸せにならない」

「訳の分からない基準作らないでよ!?! とにかく覚悟しなさい、よっ」
「待て、せめて脱がすなら上からでも」

ホノルル、聞く耳を持たない。改めて手に入力指揮官のズボンを下げようとする。腕を寄せたため、豊満な胸がさらに強調される。そこに視線を落とす指揮官、思いがけないものが目に入る。力を入れ

た際に位置がずれたのか、ひよつこりと顔を出していたのだ。

淡い桜色に、見事な大きさ。それはホノルルの乳輪であった。

「でかつ」

思わず声を出した指揮官、抵抗の手が緩む。いきなり抵抗がなくなったため、勢いのままにズボンを脱がし、そのまま屈んでしまうホノルル。

眼前に見えるのは、パンツを突き破りそうなほど猛々しくそびえ立つテント。それは指揮官の陰茎であった。

「でっか」

そう言ったのを最後にホノルルは固まった。

二人はそのまま膠着状態へと陥り、ただ波打つ音だけが辺りに響いていた。

「ねえ、指揮官」

沈黙を破ったのは、意外にもホノルルの方からであった。

「カ、カメラはどこにあったっけ？」

「混乱してるのは分かるが落ち着いてくれ。この状況を打開するにはだな、まず私がズボンを履けば」

遮るように突如シャッター音が響く。ぎよつとした指揮官、音の方へ振り返ると、先程設置したカメラが妖しくレンズを光らせている。

「自動撮影、数分置きの方を切り忘れてたというのか……」

今しがた撮られたその写真には、乳首チラ見えて屈むホノルルとパンツ丸出しの指揮官がはつきり写っていることだろう。

「……撮れたわね。恥ずかしい姿」

「……そうだな。公開されたらまずいやつが」

「私の水着だつて十分グレーよ」

「いいや、最高だとも」

「そうじゃなくて。はあ」

ホノルル、改めて指揮官のテントを直視する。このドタバタ騒ぎの間も一切萎えず、激しく自己主張をしている。

「ここまできたらいつそ、よね」

「何がいつそ、なんだ」

「普段のセクハラの仕返しよ」

そう言ったホノルルの表情、真つ赤なのは相変わらずだが、何処か開き直った様子。その表情のまま指揮官のパンツをがちり掴むと、有無を言わず脱がす。

正体を表した逸物、突然広がった世界に驚くかのように大きく跳ねる。その躍動ぶりを目の当たりにし、ホノルルは顔から火が出そうである。指揮官もとっても思わぬ反撃であるため、何も抵抗出来ない。「さ、散々人の胸をどうこう言ってたけど、何よ。指揮官のだって、こんなに大きいくせに」

「ホ、ホノルル?」

あのホノルルがここまで攻勢に出るのが想定外だったのか、完全に尻込みする指揮官。

ホノルル、抵抗がないのを了承と受け取ったのか、右手でそつと陰茎へと触れ、左手は自身のビキニへと手を掛ける。

ビクン、ビクン。

右手より伝わる血脈の鼓動は、指揮官がどれだけ興奮しているのかを如実に表している。連動するかのようには、ホノルルの心拍もさらに上がっていく。

左手によりビキニから溢れたのは、比類無き大きさの爆乳。ホノルルのコンプレックスの象徴が、惜しみ無く開帳される。乳首は陥没しており、乳輪の大きさと合わせて見ると、まるで大胆さと恥ずかしさがせめぎ合ってるかのようだ。

ホノルル、恐る恐るといった様子で片乳を持ち上げ、そのまま亀頭へと寄せて行く。正確には、その陥没部分にずっぷりハマるように寄せて行く。

「んっ……」

接触。電流が走るような刺激に、思わず声が零れるホノルル。弾力のある柔乳に掛かれれば、片乳だけでも亀頭を飲み込むのは容易い。

それは、さながら蛇の捕食。陰茎そのものを丸呑みにするかのようには、どつぷりと沈ませていく。

どつぶん、どつぶん。往復がとてもゆつくりであるが故に、陥没乳首に吞まれる様がまざまざと見せつけられる。見方を変えれば、剛直を柔乳へと突き刺しているようでもあり、更なる興奮を煽る。

ねちやり、ねちやり。先走り汗による粘着音が程無くして聞こえ始める。指揮官が徐々に発射へと追い込まれている証だ。ホノルルの中に渦巻くのが加虐心なのか、刺激による快樂なのかは分からないが、その行為は徐々に激しさを増して行く。

ねちやり、ねちやり。今や陥没乳首は、お口そのもの。飲み込んで吸い付き、決して逃さない。先走り汗が唾液のように亀頭に絡みつき、乳首との摩擦をより円滑にする。

「我慢、出来ないなら、このまま射精して、いいから。んっ、わたしの、乳首でっ、全部飲むから。ほら、負けて、わたしの乳首に負けて、はやく、んんっ」

こんなことを言うホノルルを、指揮官は一度も想像したことがない。理性の範疇を超える快樂と、理解したつもりでいたホノルルが見せた異なる一面。射精の閾値を超えるには十分すぎる刺激だ。

「ん、熱い……こんなにたくさん射精るなんて。乳首、染められちゃう、わね」

どびゅ、どびゅどびゅ。止めどなく放たれる白濁液が、飛び出た接着剤のように柔乳へこびり付く。射精中でも乳首への擦り付けが止められないホノルルは、その陥没部分に精液が溜まっていくのを感じた。

「ホノルル……何処でこんな技を」

「私だって知ってることはあるのよ。だって……」

「だって？」

「……あなたがあんまりにも私のおっぱいのことばかり言うから。頭に残って気になって仕方ないのよ。だから、その……責任とってよね」

ホノルル、もう片方の乳もビキニから取り出す。こちらもやはり、見事な乳輪と陥没乳首である。

「どうせ好きなんですしよ、その……ここで挟むやつ。さっきは私から

しちやったし、後は指揮官の好きにすれば」

下乳を持ち上げるように腕を組み、おずおずと胸を差し出すホノルル。片方の陥没乳首からは、先程溜まった精液が母乳のように垂れている。これほど扇情的な姿を前にしては、即座に陰茎が硬さを取り戻したとしても不思議ではない。

指揮官、言葉を発することなく、ホノルルの両肩に手を乗せる。陥没地帯の次に進むのは、深く包み込むような谷間。乳輪が合わさる入口を掻き分けるように、陰茎が突き進む。いわゆる縦パイズリに属する行為だが、二の腕によるホールドがより乳圧を高めている。

ぱちゅん、ぱちゅん。大きく突き出すたびに響く淫靡な音。しかし最奥までは届かない。ホノルルの谷の深さは、指揮官の立派な逸物でさえ底が見えないほどだ。

「滑り、もつと良くしたいんでしょ」

れろり。流し込まれたのは、唾液。ホノルルによる献身の潤滑剤。指揮官にとっては、更なる快樂への起爆剤。

にゅぷつ、にゅぷつ、にゅぷつ。

腰の動きは一層速度を増し、ひたすらに谷間を掻き分けていく。どれだけ激しく動いても、ホノルルおっぱいは貪るように陰茎を離さない。

「はあ、はあ、指揮官ちよつと、激し過ぎよ。跡が、残っちゃうじゃない」

ホノルルの小言も耳に入らない。ただ乳を犯すことだけに思考が囚われる。陰茎そのものが乳に溶け込んでいる、そう錯覚するほど蕩ける快樂に支配される。

「ほんと仕方ない、わね。こ、このままで、いいから。汚していいから。全部、全部射精し尽くして。空っぽになるまで、胸に、おっぱいに注いで、んっ」

既に一度汚してる以上、指揮官には何の躊躇もない。催促されるまま、湧き上がる精液を谷間へと爆発させた。

「あつ、また熱いのが暴れて、こんな、二回目なのに、止まらないなんて」

びゆくびゆくびゆく、と機関銃のように唸る射精は、深い谷底に至るほどの白濁液をもたらす。下乳から溢れ、腹部へと流れ出した精液はやがて黒パンツにまで至り、滲んでは消えていった。

ホノルル、射精が収まったのを察し、ゆっくりと陰茎を引き抜く。精液まみれの乳房と陰茎の間には、名残惜しそうに白糸が繋がっている。

「勢いでとんでもないことしちゃった……」

撮影の仕返しのもりだが、結局指揮官を悦ばせてしまった。しかし終始ホノルルのペースで事を済ませたことから、指揮官の自尊心ぐらいは砕けたはずだ。

そう思った矢先である。余韻に浸るように静止していたはずの指揮官、突如動き出すと流れるようにホノルルを押し倒す。そしてやはりと言うべきか、二度の発射を経ても全く萎えることなく、剛直は健在だった。

「な、なんでそんな元気なの……」

怖気付くホノルルを尻目に、跨ったままの姿勢で再び爆乳へと挿入する。そこからの行為は、一言でいうなら蹂躪である。正気を失った乳狂いによるおっぱいピストンは日が暮れるまで続き、その痴態を知るのはシャツターを切ることを義務付けられたカメラのみであった。

レベル1パイズリ専用艦船シリアス

夜更けの執務室。闇に包まれた部屋の中、机に灯る明かりだけがチカチカと点滅している。

映る人影がふたつ。一つは椅子に腰をかけたまま、何やら忙しなく上下に動いており、もう一つはその前で屈み込んだまま静止しているように見える。ハア、ハアと荒い息遣いがかすかに聞こえ、時折唸るような野太い声が混じっている。

さらに際立って目立つのが、まるで水面に石を落としかのような、どたぶん♡という水音。あるいは、にちゃにちゃ♡と纏わりつくような、粘っこさのある音だ。

「くツ……お……このハリのあるロイヤル爆乳ツ、もつと強く揺らして……気持ち良くするんだツ」

座っていたのは、執務室の主人である指揮官。更なる快楽を求め、命令を下す。承りました、と抑揚の無い声が返ってきたかと思うと、巨乳を交互に揺らして刺激に変化を付けながら、にゅこにゅこ淫靡な音を響かせる。ロイヤル式のメイド服に収まりきらないほど、豊かな曲線の乳房による愛撫。指揮官、悦びの余り背筋の震えが止まらない様子。

彼女の名はシリアス。ロイヤル所属、ダイドー級軽巡洋艦。

銀髪のボブ・ヘアーをレースのカチューシャで纏め、感情の読み取れない赤い瞳と、半球形のドテカイ胸部装甲が特徴的である。メイド隊一の忠誠心と献身の姿勢を持つシリアスは、アルビノの肌をほんのりと赤らめながら、懸命なパイズリ奉仕を行っている。

彼女に与えられた役割は、得意とする戦闘全般に関するものでも、ましてや苦手とするメイド業務でもない。指揮官の円滑な業務進行のため、その自慢のおっぱいを用いて、日々溜まっていく性的欲求の捌け口となる。

パイズリ専用艦船・シリアス。それが彼女が果たす、唯一無二の役

割である。

ある日の事。指揮官、とある悩みに頭を抱え、執務室の中をぐるぐる徘徊する。就任以来着々と実績を積み上げ、誰もがその実力を認める指揮官であったが、舞い込む仕事量は増える一方であり、また女性の目が多いこともあって全く性欲処理が出来ない状態にあった。

通常、あまりに多忙であると性欲そのものが減衰するのだが、何せ艦船たちの格好には際どいものが多い。上乳だの、脇乳だの、太腿だの、まるで見せびらかすような衣装の数々、両手では足りないほどある。加えて、一部の艦船は異常なまでに押しが強い。それは胸を押し付ける、なんてささやかなものではなく、気づいたら夜這いされていた、という次元である。これで性的欲求を感じない訳がない。

ケツコンという制度がある以上、指揮官と艦船が懇ろな関係になること自体は珍しくもなく、指輪を渡す相手が1人だけでも決められないため、複数人と関係を持つのも実質黙認されているようなものだが、問題化すれば即クビを切られるのは言うまでもない事だ。

加えて、指揮官は大変な乳狂いで、かつパイズリに対する執着が凄まじいほどであった。パイズリは本番、出すならこつち許すまじ。こだわりの強さは随一で、EやF程度でのカップ数では巨乳認定すらしないほどのキチっぷりだ。一方で、そんな偏屈な性的趣向に付き合ってくれるような奴はそうそういない、という現実打ちのめされていた。

そんなパイズリストにとって、あの建造による出会いはまさに青天の霹靂というべき出来事だったと言えるだろう。

「ご機嫌麗しゅうございます、誇らしきご主人様。本日より御身にお仕えさせて頂くシリアスと申します。如何なる戦闘においても、ご希望に添える働きをさせて頂きます」

ベルファストを筆頭としたメイド隊の1人として参入したシリアスは、指揮官の我儘な性癖を十二分に満たすほどの乳袋をふるん、と

揺らしながら丁寧に一礼する。釣り鐘型で、軟乳寄りのイメージがあるベルファストと比較すると、パンパンに張ったシリアスのおっぱいは瑞々しい果実のようだ。

一目で心を奪われた指揮官、早速シリアスを秘書艦に任命する。彼女は謂わば、忠誠心の塊のような艦船であり、出会ったばかりの指揮官に対しても最上の敬意を払う献身ぶりであった。

一点、問題があるとすれば――

「お食事の用意が出来ました、誇らしきご主人様。どうぞお召し上がりください」

差し出された料理を一瞥する。バランスの取れた食事は健康の要、と言うだけはあって、主食、主菜、副菜、汁物等がきっちり組み合わせられてあり、よく考えられた献立だと分かる。

主菜は恐らく、鱈のムニエルだろう。

何故そんな曖昧に言うのかというと、ムニエルにしては少々……いや多分に黒い部分が目立っていたからだ。

「シリアス、これは」

「はい、誇らしきご主人様。鱈のムニエルで御座います」

やはり鱈のムニエルで間違いないらしい。指揮官、試しに口に運んでみる。確かに鱈だ。焦げ付いた味が強過ぎてバター風味が消されているが、鱈だ。

「……なるほど」

なるほど、と言う言葉は便利だ。返答に困ったとき、如何にも分かっているような感じを演出しつつ、相手に同意するかのような態度を示せる。実際は何も解決していない訳だが。

これ以降、シリアスのみで料理担当をする事は無かった。

またある時のことだ。指揮官、シリアスに自室を清掃するよう依頼する。料理の件から一抹の不安があった指揮官だが、さすがにただのお掃除でそこまで酷いことにはならないだろう、と希望的観測を抱いていた。

しかし、耳を劈く砲撃音が部屋から響いた瞬間、無情にもそれは打ち碎かれる。

「誇らしきご主人様、ゴキブリなる害虫が確認されましたので、一匹残らず消して差し上げました。如何でございませうか」

文字通り、きれいさっぱりとなった指揮官のマイルーム。火薬の匂いが鼻に付く。彼女の中で清掃というのは、戦場で敵を始末する事と同義らしい。あまりに脳筋すぎる理論を前に、開いた口が塞がらない指揮官。

如何なる観点から見ても、この仕事の出来映えは「無し」だろう。如何でございませうかじゃない。

当然、これ以降シリアスが清掃をすることは無かった。

赤点ギリギリのメイド能力、という触れ込みを身を以て味わった指揮官だが、では戦場にするかというところとそう簡単な話でもない。まず、シリアスのレベルは入りたての頃の1のまま。最新の海域には到底太刀打ち出来ない。

ではレベリングから、と行きたいところだが、生憎他のメイド隊のメンバーが鉄血の精鋭艦隊とセイレーンの連合軍に掛かり切りになっており、いかに落第寸前とは言え、シリアスまで出撃してしまうと待機するメイド隊が居なくなってしまうのだ。結果として、秘書艦のポジションから動かさずにいた。

「お呼びでしょうか、誇らしきご主人様」

指揮官が椅子に戻ったところで、執務室へと入るシリアス。改めて見ると、思わず後退りしそうになるほど迫力のあるおっぱいだ。眺めているだけで心が満たされる、と男たちは口を揃えて言うだろう。

「ご主人様、一つお尋ねしたい事が御座います」

ずいつ、とシリアスが迫る。動作に合わせるように爆乳がぼるんと弾む。

「いきなり改まってどうした？」

「ご主人様は、シリアスとの御夜伽をご所望なのでしょうか」

指揮官はひっくり返った。

「も、申し訳ございません！ 早まった発言をしてしまつて……」

「い、いや……突然の事でびっくりしただけさ」

ひとまず、シリアスに理由を問いただす指揮官。曰く、メイド業務がダメダメの自分を秘書艦として側に置いておくのは、何か他に望んでいる事があるからではないかと考え、指揮官の視線がよく胸元に注がれていることから、求められているのは男女のまぐわいだと推測したらしい。

秘めていたつもりでいた欲求をあつさり見抜かれたことに悶える指揮官だが、見方を変えるとこれは絶好のチャンスだ。シリアスは感情の波こそ少ないが、主人である指揮官への忠節は本物である。加えて、自ら進んで性行為を行う意思がある（意味を理解してるかは甚だ謎だが）。

かねてよりの宿願、果たすときは今。

「実は、それに関してシリアスに頼みたいことがあるんだ」

「はい、何なりと申し付けて下さい」

「パイズリって知ってる？」

「ぱいずり」

無表情のまま、首をかしげるシリアス。指揮官、ここぞとばかりに独断と偏見に基づいたパイズリ知識を植え付ける。

「……ふむ。女性の乳房を使って男性器から精液を搾り取る行為、で御座いますか。射精の際には乳房を締め上げて、男性器が見えなくなるくらいぎゅつとするのが基本、と」

おもむろに自分の胸をゆっさゆっさと持ち上げるシリアス。サイズ感を確認すると頷き、

「シリアスの乳房……いえ、おっぱいであれば、ご主人様にパイズリを行うことは可能で御座います。性的欲求の解消により、誇らしきご主人様が一層の輝きを放つのであれば、シリアスに躊躇う理由はございません。どうか、この卑しきメイドめのおっぱいを御自由にお使い下さいませ」

こうして指揮官の思惑通り、シリアスのパイズリオナホとしての任

務が始まったのだった。

「誇らしきご主人様、おちんちんからカウパーが溢れております。お射精の時間が近づいている証、で御座いますね」

仄かな明かりの下、こねくり回すような乳房の動きで指揮官の陰莖をくちゆくちゆと乱していくシリアス。

あれからすつかり指揮官好みに仕込まれたズリテクは、暗闇の執務室に卑猥な水音を響かせるほどに上達し、ズリキチ指揮官を唸らせる領域にまで至っていた。

たぶん、たぶんと重量のある上下の動きが肉棒を扱くたびに、ビクビクと震えて限界に近いことをアピールする。シリアス、手に込める力を強くすることで、よりきつく乳を締め上げ搾り取る段階へと向かう。

「うっ……シリアス……そのまま、そのままぎゅっとして、あっ、射精る、射精るぞ、乳内^{なか}射精^だするぞッ」

そう宣言して間もなく、決壊の時は訪れた。まるで噴火の様な勢いで子種汁がペニスより放たれる。

「あっ……はっ……とても、元気の良い射精ですね……ええ、ご主人様が仰る通り、おちんちんが逃げないように谷間でしつかり確保しております。ご遠慮なさらず、射精を続けて下さい……」

一発目の特濃ザーメン、おっぱいの中をどびゅどびゅと暴れ回る。シリアス、がつちりと両手で抑え、射精の勢いが続く限り乳圧のホールドを緩めない。一滴も飛び散る事なく、きめ細やかな肌の谷間へと呑み込まれる。

おちんちんが脈動するたびに、腰を浮かせて打ち付ける指揮官。足が床から離れ、宙に浮いてしまっている。白濁液が谷間にびゆるるるっ♡と放たれるのに合わせて、ガタガタと椅子がうるさく鳴いている。

「ゆっくり、ゆっくり射精して下さいませ……」

ある程度収まってきたのを見計らい、ゆつたりと上下に動かすことで、精子を全て出し切るようおちんちんに促す。乳圧の掛け方を絶妙に緩め、赤ん坊をあやすような優しい扱き方に、尿道で燻っていた残り汁もぶるっ♡と放出される。

長い、長い吐精だった。シリアスの胸は練乳をぶちまけたかのような白いドロドロで染められている。

「たっぷりお出しになりましたね……この卑しきメイドのおっぱいがご主人様のお慰めに役立つのなら、喜ばしい事で御座います」

少しも嫌がるそぶりを見せず、先程の成果を見せつけるかのようにくぱあ♡と胸を開くシリアス。濃厚で新鮮なザーメンブリッジが更なる興奮を煽り、指揮官の肉棒は再び硬さを取り戻していく。

「シリアス、手を後ろに」

指揮官、シリアスに頭の後ろで両手を組むよう指示すると、何処からともなく取り出した縄を使って腕を縛り付ける。続いてシリアスの球体おっぱいを縛ることで、手を添えなくても常に乳圧が掛かる状態を作り出した。脇汗で薄っすらと透けたメイド服から、甘い女の子の香りが漂っている気がして、何ともそえられる光景である。

「今度はご自身で動かれるのですね。どうぞ、誇らしきご主人様。はしたないメイドのだからしない乳で、御身の猛りをお鎮め下さいませ」

膝立ちの体勢で差し出された乳壺の誘惑に負けて、ずずいつと腰を突き出す指揮官。左手で縛った手を掴み、右手をシリアスの肩に置いて、熱々の乳マンコを肉棒で掻き分けていく。

先程ぶっつけた精液のおかげで、抵抗も無くヌププツと挿入が完了する。射精すればするほど滑りが良くなるセルフフローション。きつきつの乳圧の中、砂山に腕を通すように滑らかなピストン運動を繰り返す。

ぱちゅん♡ぱちゅん♡と弾みの良い音が、おちんちんとおっぱいの

結合部からリズムカルに響く。重厚な胸部兵装は荒々しい腰振りにも動じることなく、爛れた欲望を一心に受け入れてくれる。

「はあ……はあ……シリアス、今お前は、どういう状況にあるか、くっ、聞かせてくれ」

「はい、誇らしきご主人様。シリアスは今、両手を頭の後ろで拘束されたまま、縛り上げられた胸……いえ、おっぱいマンコを使われております。これまでご主人様に働いた数々の粗相を乳マンコで償わせて頂き、感謝致します。ご主人様のおちんちんが往復する度に、グポグポと淫猥な音を立てて、摩擦が大きくなっていくのが分かります」

シリアスが実況するにつれて、おっぱいへの挿入が徐々に速さを増していく。縦パイズリによる一方的な快楽行為への没入が深くなる。

「ご主人様が射精なされたザーメンにより、おちんちんへの谷間の吸い付きが増しているようです。逞しく熱いモノに犯されて、シリアスの谷間も些か汗ばんでおります。それが更なる潤滑油となって、円滑なパイズリの助けとなるなら行幸で御座います。この上、何かを足すというのなら……」

くちゆくちゆ、れるおと垂らされたのは、シリアスの唾液。谷間の中で混ざり合った、どちらのものかも分からない体液が陰茎へと絡み付く。

これはまさに起爆剤。二度目の絶頂へと誘う導火線に火を付けた。劣情に身を任せた、闇雲で乱暴な腰振り。女性の膣ではなく、おっぱいに垂れ流すだけの排泄行為。脳が焼き切れるほどの快楽信号に酔った指揮官に、シリアスが告げる。

「僭越ながら、カウントダウンを務めさせていただきます。シリアスの声に合わせて、立派なお射精をお見せ下さいませ」

3。

シリアスの紅い瞳がじっと指揮官を見つめている。瞳に写るのは、快楽に溺れたオスの顔。

2。

射精感がせり上がってくる。何度体感しても、絶頂直前の高揚感には敵わない。

1。

肉棒がおっぱいの最奥へと突き進む。腰がピンと伸びたまま、体重ごと押し付けるようにシリアスへと寄りかかる。

0。

「びゅくびゅく、びゆるるるう、どぴゅんどぴゅん、ぶりゅりゅりゅりゅりゅ…はい、またすごい勢いで射精なさいましたね。いつもより精液の量も多く、この趣向がお気に召したのであれば何よりです」

一発目に匹敵するほどの射精量。今度は乳房の中では収まり切らず、下乳からシリアスの腹部へとぼたぼた垂れている。純白のメイド服に数滴、精液の染みが滲んでいる。

「これにて本日のパイズリ業務、完了で御座います。如何でしょうか」「ぜえ…ぜえ…ああ、勿論『有り』だよ。文句無しだった。スッキリしすぎてすっからかんだ」

この上なく満足感に充ちた表情で答える指揮官。おっと、縄を外してあげないとな。軽い調子で呟くのを見て、シリアスは静かに微笑む。

色々と致命的な勘違いをしたままの彼女であったが、この先も指揮官が輝けるコンディションを保つため、惜しみなく其の身を捧げる事だろう。

レベル1のまま、だが。

鈴谷の愛欲に満ちた耳舐めとパイズリに墮ちる話

カチ、カチ。秒針の音に目を覚ます。

重たい瞼を見開き、時刻を確認。

フタヒトマルマル、既に日は落ち、黒き静寂が支配する時間である。うたた寝にしては時が経ち過ぎている、そう感じた指揮官は立ち上がろうとして、足腰に力が入らなかつた。

「なん、だと」

まるで生まれたての子鹿のように、踏ん張りが利かずカクカク震える膝。

手の力を借りようとして、後ろ手で縛られていると気付いた。縄によつて椅子に括り付けられ、まともに動くことも出来ない。

敵襲、捕虜、それらの言葉が頭をよぎる。

だが、今いる部屋はいつも通りの指揮官の自室であり、ベッドの明かりのみでやや薄暗いことを除けば、特に異常は見受けられない。それに、最後の記憶は戦場ではなく、執務室でのデスクワークであつた。となれば、重要な点は1つ。最後に会話をしたのは誰だつたか、だ。必然的に、その人物がこの事態を引き起こした可能性が高い。

「真つ先に思い浮かんだ顔は、赤城、大鳳、隼鷹を筆頭とする”ちよつと愛が重たい組”の面々である。が、先日彼女たちに遠征組へと編入する旨を伝えたのが最後の接触であつた。」

その際、ちよつとした一悶着により危うく母港が火の海に沈みかけたが、何とかその場を抑えたことを鮮明に覚えていたため、容疑者リストから面々の名は早々に消える。

続いてベルファスト、シエフィールドラメイド隊の顔が思い浮かんだが、昼食に会つたのが最後。ロイヤル隊のお茶会にお邪魔し、そこは執務室ではない場所だつたため、やはり彼女らも該当しない。

「確かその後は……」

執務室に戻った指揮官を待っていたのは、重桜艦隊からの報告書の山。大抵は指揮官の判子待ちのものであつたため、順次それらを承認していく最中、訪問者が1人。

「失礼します、指揮官」

耳にかかった黒髪を掻き上げる仕草。二本の朱角と、身の丈ほどもありそうな長刀から、誰が訪ねて来たのかはすぐに分かった。

「そうか、秘書艦交代の時間だったか」

「はい、本日より秘書艦の任に就かせて頂きます、鈴谷です」

「うむ。新任でありながら堅実な仕事をすると評判は聞いている。気負わずに補佐をよろしく頼む」

「そんな、私には勿体無いお言葉を……」

「謙遜することはないさ。既に先輩の重桜艦たちの中にも上手く馴染んでいる様子、大したものだよ。重桜は何かと癖のある連中が多いからね、君のような緩衝材になり得る人材は願ったり叶ったりだ」

最上型重巡の三番艦、鈴谷。

メンタルキューブの解析が進んだことにより新たに加入した彼女は、一言で表せば優等生タイプであった。

両手が塞がっていて、扉の前で困っている人がいれば、さりげなく開けてあげるような、常識的で気遣いの出来る艦船であると指揮官は評していた。自己主張は控えめで、一步引いた位置から物事を考えてくれるだろう、という期待があった。

鈴谷の仕事ぶりはやはり勤勉であり、秘書艦初日であるにもかかわらず、進捗は円滑そのもの。気がつけば、机を埋め尽くすほど積み上がっていた報告書は粗方片付いていた。

「どうぞ、指揮官。お飲み物です」

「おお、ありがとう」

一息つこうか、というタイミングで差し出された緑茶。何も言わずともこちらの意図を察し、用意する気配りにますます感心を深めた指揮官、特に疑う事もなくずずずと緑茶を啜り、新緑の味わいを堪能する。

記憶に残っていたのは、そこまでであった。

「……そんな馬鹿な」

愕然とする指揮官。

この記憶が正しいのなら、突然の眠気、及び身体を蝕む倦怠感の原因は緑茶にあるということになる。あの緑茶は執務室に常備してあるもので、つい先日指揮官自身が仕入れたばかりの品。異物が混入するような事態は考えにくい。

あの瞬間、仕込まれた場合を除けば、だが。

「ふふふつ、お目覚めですか」

普段より少しトーンを落とした声が、後方より聞こえる。振り向く力の無い指揮官、前を向いたまま言葉を返す。

「鈴谷、か」

「ええ、他に誰がいると思うんです？」

「何故、こんな真似を」

「それを私に聞きますか。ご自身の方がよく分かっているのではないですか」

質問を返される形になったが、指揮官はまるで身に覚えがない。そもそも鈴谷と顔を合わせたのは、今日を含めてもまだ数回程度なのだ。

「すまない。君が何に怒っているのか、私には見当がつかない。ひとまず拘束を解いて、きちんと話を聞かせてくれ」

指揮官は努めて冷静な態度で鈴谷にそう言った。このような上官に対する暴挙に、普通なら怒り心頭に発してもおかしくない場面であるが、それでは解決に繋がらないと指揮官は判断した。

「怒る？ いいえ、怒っているわけではありません」

コツ、コツ。

紅色に染まった厚底の靴が発する音が、だんだんと近くなる。それに合わせるように、彼女のハンドバッグの熊のキーホルダーが、パチン、パチンとエナメルの革に当たり、その反響音が指揮官の心をざわつかせる。

足音が止まった次の瞬間、

「ふーっ……」

生暖かい吐息。

ぞわぞわと耳をくすぐり、快樂信号を脳へと伝える。悪戯が過ぎるぞ、と指揮官は注意しようとしたが、震えてうまく言葉が出せない。有無を言わず、鈴谷は舌先を耳へと這わせて、うねる様な動きで蹂躪を始めた。

「んふ……はむ……ちゅっ……。こうやって、耳たぶを甘噛みしてえ……れろお……。じゅるるっ……。耳の裏をなぞるように舐められたら、力抜けちゃいますよね。いいんですよ……。ちゅば……。ちゅば……。鈴谷に身を任せて……。じゅぶぶっ……。気持ちいいところ、ぜえんぶ可愛がってあげますから……」

とぐろを巻いた蛇のように、指揮官の耳に絡みつく舌。プルンとした唇が耳輪へと吸い付き、舌先でほじられるように刺激され、痺れるような快感がじんわりと脳内を埋めていく。

「はあ……はあ……ああっ……。待ってくれ鈴谷……」

「待ちません……。じゅぶぶっ……。じゅるじゅるじゅるるっ……。くちゅくちゅ……。んっ……。れろれろお……」

耳穴のうぶ毛を一本ずつ愛でるように、執拗に舌でほじくり回す。強く舐められる度にグチュグチュと独特な音が響き、ますます感度が上がっていく。

外側から内側へ。丹念に仕上げられた耳穴は血流がどくどくと集まり、敏感な性感帯と化していた。

あっ、あっ、とまるでイルカの鳴き声のような、甲高い声が漏れる。こんな情けない声を出しているという事実を、指揮官は信じられずにいた。

「ちゅるるっ、ちゅるるる……。じゅばっじゅばっじゅばっ……」

舌先による攻めから、舌を広げてザラザラした部分を押し付けるような舐め方へと移行すると、吸い付くような動きが多くなった。

同時に、鈴谷の手が指揮官の胸部へと伸び、ぷち、ぷち、と1つずつボタンを外していく。白地のインナーが露わになると、Vネックか

らするすると手を潜り込ませ、固くなった指揮官の乳首をサワサワと弄り始めた。

「知ってるんですよ……ちゅぱ……ちゅぱ……んっ……男の人も乳首を弄られると……じゅぷじゅぷ……堪らなくなるんですよ……」

「ぐおっ、ああっ鈴谷、指先が……」

「ヌルヌルでしょう？ 予め唾液を付けていたので……。ほら、こうして乳輪を撫でるようにするの……乳首をコリコリ弄るの……どちらがお好みでしょうか。ふふふ、分かっています。両方してあげますね……」

手袋を付けてない左手が、輪を描くように指揮官の胸を弄るかと思えば、親指と人差し指で乳首の先端を摘んで刺激する。チリチリとした快感が肺にまで染み込んでいくような感覚。上半身を快樂漬けにされた指揮官は、足首をばたつかせて紛らわすのが精一杯の状況だ。

「だいぶ出来上がってきましたね。そろそろ頃合いでしょうか、ふーっ……」

「うひい!？」

「ふふふっ、そんなに椅子をガタガタ揺らして。刺激が強過ぎましたか？」

散々舐め上げられた耳は、先程息を吹きかけられたときの何倍もの快樂信号を送ってしまう。料理人が下拵えをするように、鈴谷は指揮官が快樂をより受け入れ易い状態に仕上げたのだ。

「す、鈴谷……何故……」

「あら、そんな状態になってもまだ分からないんですよ、理由。簡単なことです、とつてもシンプルで、単純な事実。貴方が私を求めたからですよ」

「もと、めた?」

「ええ。鈴谷の顔、鈴谷の手、鈴谷の脚、鈴谷の胸……ずっと見てましたね? 分かっています、熱いシセンを注いでいたのは……。初めからこうされたかったですよね。鈴谷に襲われて、滅茶苦茶にされたって訴えていたんですよ?」

「君はなにを、言ってる」

「取り繕っても無駄です。今日だってチラチラ、鈴谷の胸を見て何を妄想してたんですか。素直になりましょう指揮官、正直になれば、鈴谷がぜんぶ望むことをして差し上げます……」

制服の中でパンパンに張った胸を、まるで強調するかのようになら持ち上げる鈴谷。

改めて見ると結構なバストサイズで、見るものを圧倒する重厚感とエロスを兼ね備えていた。まるで暗示にかかってしまったかのようにな、指揮官は目が離せなくなる。

「ふふふ、そうですか。やはり鈴谷の胸がお好きですか。ズボンに張ったおテントさんが、更に窮屈そうになっていますよ」

そう言われた指揮官、自分の勃起状態をようやく認識する。耳舐めによる昂りが凝縮したかのように、今にもズボンを突き破りそうなほど、猛々しく盛り上がっていた。

「足、開いちゃいますね」

鈴谷はそつと指揮官の膝へ手を添え、ゆっくりと股を開かせる。力の入らない指揮官に、抗う術はない。

するすると鈴谷は間に潜り込み、わざとらしく胸を強調しながら、隆起したズボンを間近で眺めるようにしやがんだ。

「分かりますよ、指揮官が望んでること。鈴谷のおっぱいで、気持ちよくなりたいたいのでしょうか？　いつものシセンと同じぐらい……いいえ、それ以上に熱く、煮えたぎった、欲望の白濁で汚してしまいたいのでしょう」

今度は自分のシャツのボタンを外す鈴谷。出来上がった隙間から、溢れてきそうな程むっちり詰まった下乳と、黒のブラジャーがチラ見えしており、さらなる興奮を煽る。

「ふふふつ、釘付けですね。この入り口から、指揮官のおちんちんをずっぷりと迎え入れて、ブラできつきつになったおっぱいの中で揉みくちやにされるんですよ。先っぽから根元まで、全部鈴谷の乳内に入っちゃったら、きつと気持ち良すぎて、おかしくなっちゃうかもしれませんね」

そう言いながら、パンパンに張ったテントへと手を伸ばす。そつと触れるように撫で回したかと思えば、指先で盛り上がりなぞつていく。指揮官の我慢も、いよいよ限界だ。

「鈴谷あ……」

「ええ、分かっていますよ。これ以上焦らすのも可哀想ですから、そろそろおちんちんを外に出してあげますね」

カチャカチャ。ベルトが外れる音と共に、トランクスから突き出すように現れた指揮官の肉棒は、既に先走りヌルヌルの状態。さながら、自分から潤滑油を提供しているかのよう。

「さあ、じっくり見てください。指揮官のおちんちんが、谷間の中に消えていく様子を……」

先端を下乳へと当て、そこから一気に丸呑みするかのようになり、ずっぷんとシャツの中へ挿乳。

そのまま上へと突き進み、真っ赤な亀頭がシャツの布地の下から押し上げるように主張した。

「鈴谷のおっぱいでも、顔を出せちゃうくらい大きいだなんて。とつても素敵」

たぶん、たぶん。始まりを告げるように、ゆっくり上下へと乳肉を抜き出す。ぎちぎちに締まった爆乳おっぱいの中で、びくんびくんと脈動する陰茎が、今にも飛び跳ねてきそうな勢いだ。

「はっ、はっ、ふふっ、時間をかけてじっくり力を抜いた甲斐がありませんね。今にも腰を浮かせてしまいたいのに、自分からは動かすことも出来ず、さぞもどかしいでしょう。心配しなくても、ちゃんとずりずりしてあげますから」

ぱちゅん、ぱちゅんと、わざとらしく水音を立てるように竿を抜き上げる。亀頭がシャツを突き破りそうなほど、何度もぐいつと当たり、その部分だけがじんわりと滲んでいる。パイズリの激しさが増すほど、ブラの位置が徐々にずれていき、次第にその姿が露わになっていく。

「んっ、ふっ、これ、気になりますか。この前Z23さんを選んでもらったんです。とつてもセクシーなデザインで、私気に入ってるんで

すよ……くすつ、ええ、分かってます。汚したいんですよ、このブラジャー。いいんですよ、汚しても。

このまま鈴谷のおっぱいオナホにぶちまければ、シャツも、ブラも、指揮官の精液の匂いで、好きなだけマーキング出来ますよ……」

どつぶん。今まで顔を出していた亀頭が、おっぱい肉の中へと入っていく。裏筋を刺激するよう、左右でぐりぐり、ぐりゆんぐりゆんと小刻みな動きが加わり、堪らず顔が緩んでしまう指揮官。もはや思考は定まらず、柔肉がもたらす快楽責めにただ身を委ねることしか出来ない。

「指揮官の出した我慢汁で、いやらしい水音が大きくなっています。そろそろ限界でしょう、耳舐めの時からずつと我慢させていましたから。いいんですよ、このまま鈴谷のおっぱいに、濃厚で雄臭いぶりのザーメン、一滴残らずぶちまけましょう。ほら、ほら、イッて下さい、イッて……イケってんの！」

急に語尾を強めた鈴谷、それがトドメの合図となった。

びゆるるう、どひゅどひゅ、ぶびゅびゅびゅびゅ。弾けるように飛び出す精液。おっぱいオナホの中にある、あらゆる隙間を埋めていくように充満していく。収まり切らない分が、既に入り口から漏れ出していた。

「はあ……とつても立派な射精でした。これで指揮官も、鈴谷にその気があるとはつきりしましたね。愛の証を、これだけ胸に吐き出したのですから」

下乳から垂れていく精液を掬い上げ、人差し指と中指の間で遊ばせる鈴谷。愛おしげに絡ませ、出来たアーチを指揮官へと見せ付ける。

「鈴谷……」

指揮官、未だぼんやりする頭のまま、鈴谷の名前を呼ぶ。何かを言いたげな表情に、とうとう墮ちたかと期待を込めた返事をしようとした彼女に向けて、

「それは……違う……」

否定。思わぬ拒絶。何気無く出てしまった、言の葉ひとつ。

一瞬にして凍える空気。

秘めていた彼女の苛立ちが、解き放たれる。

指揮官は踏んでしまった、地雷のど真ん中を。

「はあ、ここままでやってまだ素直になれないなんて……呆れるぐらい強情よね」

普段の丁寧口調から一変した雰囲気は驚く指揮官。鈴谷はすくつと立ち上がると、急に指揮官の後ろへと移動する。ガサゴソと何か機器を弄るような音に不安を感じて逃げ出そうとしても、只でさえ力の入らない身体に射精直後の脱力が追い打ちとなり、動くことは叶わない。

ガシヤツ。頭部に取り付けられたのは、ヘッドホン。綾波が時たま使用しているのと近いタイプのものだ。

「なんのつもりで」

そう言いかけた指揮官の口が止まった。いや、ヘッドホンから聞こえてきた音声により、言葉が続かなくなったのだ。

「指揮官が悪いのよ。いつまでも正直になれない悪い子は、オシオキするしかないでしょう……」

カチカチカチ。

音量を最大まで上げる鈴谷。それに合わせるように、指揮官の体の震えが大きくなっていく。

「ひっなんだこれ、あつ、鈴谷ツ、あつ、くつ、これ早く、あつ、あつ、止め」

「ダメ。ダメよ指揮官。もっともっと、鈴谷に染まってくれなきゃ。これは、その為の儀式なんだから」

ヘッドホンから漏れ出す音。それはポップでもジャズでも、ヘビメタでもない。

指揮官の耳を満たすのは、あの音。

じゅるじゅる、くちやくちやくと、隅々まで犯し尽くすような、鈴谷の舌音。

「綾波さんが教えてくれたの。バイノーラルという音声は、より耳元で囁かれるような臨場感を楽しめるんですってね。ふふふっ、どうです指揮官、左右同時に鈴谷から耳を責められるのは、とっても心地良

いでしよう」

まるで鈴谷が2人に増えたかのような、激しい舌技。実際にされるのと忖度無いほどの快樂責めの最大音量。指揮官、もはや喘ぐだけの雄犬へと成り下がり、肉棒は再び元の硬さを取り戻していた。

どたぶん。ずぼずぼという水音と共に、再び肉棒が乳肉へと迎え入れられる。いつの間にか元の位置へと戻った鈴谷が、2度目の着衣パイズリを始めていた。

「どうしました指揮官、そんなに目を見開いて、懇願する様に鈴谷をじつと見つめて。おちんちんの収まりがつかないということは、またパイズリで搾って欲しいんですよね。大丈夫です、何もかも全て、ぜんぶ分かってますから。安心して、精を胸に吐き出してくださいね……ダーリン♡」

再び元の口調に戻った鈴谷の、激しく胸を揺さぶる本気パイズリ。

両耳では、鈴谷のリップ音が延々とループしている。

ぐちよぐちよに溶かされるような、極楽の三点責め。

許して、と声を発したのを最後に、指揮官は人間の言語を失った。

おんおんと畜生の様に喘ぎ、ただ精子を谷間へと吐き出すのみ。

それは指揮官の隅々に鈴谷を刻み込むまで、終わる事はない。

調教を終えた指揮官はこの先、執務室で働いてるときも、戦術を練っているときも、鈴谷を見るだけでこの夜のことを思い出し、否が応でも興奮が収まらなくなるだろう。

そして誘われるがまま、鈴谷の与える快樂へと墮ちていく。

その愛の毒牙は、すでに戻れなくなるほど、深く指揮官を侵していた。

ボルチモア バトルスーツの蒸れたズリ穴にたつぷり射精／汗だくの制服ズリでびゆるびゆる射精

炎天の体育館、汗しぶきを飛ばす黒のショートヘアが宙へ舞う。

風のように駆け抜けて跳躍、そして浮かんでいるかのように長い滞空時間。

シュートモーションに入った手を下げ、逆の手へと持ち替えるダブルクラッチが決まる。

ゴールネットが激しく揺れる様を、指揮官は少し離れて見ていた。

「ナイスシュート」

そう声を掛けた指揮官が飲み物を手渡せば、「どうも、頂くよ」という軽い返事。

ぷしゅつ、と空気の抜けた音が聞こえるや否や、天井を見上げるような姿勢で、ごくごくとそれを飲み干していく。

糖質とミネラルをたっぷり含んだ液体が喉を通るたびに、滴る汗が首筋をなぞるように落ちていく。やがてその雫は、ピンボールで真ん中を通過していく玉のように、鎖骨の間を抜け、深い谷間へと消えていった。

「……ぶはー！ やっぱ運動後には効くな、この飲み物」

個人的には酸素コーラでも構わないのだけどね、とボルチモア級重巡洋艦ネームシップ・ボルチモアは呟く。彼女も艦船たちの例に漏れず、秘書艦の業務中も愛飲するほど酸素コーラを気に入っていた。

「今日はバスケの助っ人かあ。毎度毎度、違うスポーツをやっているのに、どれも卒なくこなしてしまうんだから驚きだよ」

指揮官が感心して言う理由としては、ボルチモアが所属している（というより、彼女が一人で活動している）サークルにある。

彼女曰く、「汗を掻くだけの、健全なスポーツサークル」という名目の下、あらゆる部活動の応援要員として飛び入り参加をしているのだ。

ボルチモアはとにかく万能選手だった。

バスケのみならず、フットボール、テニス、サッカー、ベースボール、柔道、空手、剣道、ボクシング、卓球、陸上競技……まるでその競技の世界に適応するかのようには、ユニフォームを纏った彼女は常人以上の働きを見せた。

「私という奴はどんなスポーツでも似合ってしまうな」

とは本人の冗談だが、誇張抜きで何でも出来てしまうため、あちこちから引っぱりだこの状態である。

現在のボルチモアはバスケやサッカーで使用する、マゼンタを基調としたメッシュ生地にCA-68と刺繍されたビブスを着けており、下は黒のハーフパンツという格好。

どうやら自分専用のビブスを所有しているらしい。

「通りすがりの重巡洋艦……もとい、通りすがりの助っ人選手を自称する者として、如何なるスポーツも全力で挑まなければいけないのでね。これくらいは出来て当然さ」

クールに振る舞いつつも、やはり称えられるのは嬉しいのか、少し得意げな表情のボルチモア。可愛いな、とつい口に出てしまいそうになるのを抑え、指揮官が言った。

「もう上がりなら一緒に帰らないか。俺も丁度、艦船の皆の部活動予算案が纏まってさ。一人で戻るのも何か、忍びなく思っていたんだ」それを聞いたボルチモア、「何だ、案外寂しがり屋だな指揮官は」と笑いながらも、二つ返事で承認。

人差し指の上でくるくると回っていた六号球を籠に返すと、「制服に着替えるから外で待ってくれ」と言い残し、更衣室へと入った。

ふと指揮官、ボルチモアが普段着用しているバトルスーツに思いをはせる。

藍染の濃い色合いの表生地、ライムグリーン裏地の外套。

それに加え、ハイレグ状のレオタードのようでありながら、大胆にも腹部と腿を露出させ、極限まで機能美を追求したスーツは、フィット感を重視するボルチモアらしいと言える。

その中で指揮官が大層ご執心な箇所が一つ。

胸部にがぱつと開いた、下乳丸見えのひし形の穴である。

何故そのような穴があるのか。

汗で蒸れないよう通気性を良くした、などと尤もらしい理由を付けてもいいが、実際そんなことはどうでもいい。

ぴっちりスーツに強調され、はち切れんばかりに主張する乳房は若々しくハリがあり、そのまま服を破って出てきてしまいそうな勢いである。

重力に逆らい上向くおっぱい、その生乳の一部分を常に晒してしまおうという暴挙。

秘書艦として会話する機会が多い現状、男の性に逆らえない正直な指揮官が目を釘付けにしてしまうのも致し方ない。

更に宜しくないのが、ボルチモアが時折その穴部分に指を掛けて、風を通そうとすることである。

連日の猛暑で汗が止まらないこともあつてか、その頻度は日に日に増しており、へそや太ももの露出に加えて指揮官の欲情を煽り続けている。

半ば無意識のうちにやってしまうのだろう、隣に指揮官の目があつてもお構いなしだ。

さすがに直接そのことを指摘するのは憚れた指揮官、駆逐艦のジャベリンを仲介してやんわりと伝えるよう頼むと、翌日からぱったりとその癖は止んだ。

——それから暫くは、別の事情も絡んでぎこちない会話が続いたのだが。

「お待たせしたかな」

呼びかける声に指揮官が振り返ると、制服へと着替えたボルチモアが立っていた。

その姿、あたかも近所に住む女子高生お姉ちゃんのようにだと表現すべきか。

首には黒のチョーカーにコバルトの模様が入ったアクセサリーが付属したものを着用し、第二ボタンまで大胆に開けたYシャツからは、端正な鎖骨のラインと豊満な胸が丸見えである。緩んだ黒のネクタイの結び目は丁度谷間へと収まっており、邪な想像が頭をよぎって

しまう。腰には短いスカートを押さえるためか、ベージュのカーディガンを巻き付けており、そこから白のスリークォーターの間に映える健康的な太ももは、すれ違う人も思わず二度見をしてしまうだろう。手にはシアンのシヨルダーバックを持っていて、恐らく着替え類はこの中に仕舞っているとみえる。

「……その、あんまりまじまじと見つめられると、調子が狂うよ」
「えっ、あぁごめん。行こうか……」

琥珀色の瞳を伏せ、恥ずかしそうに頬を赤らめるボルチモア。

完全に見とれていた指揮官、正気に戻った途端飛び込んできた愛らしい仕草に、心臓が跳ね上がりそうになる。

夕焼けの差す帰り道。

オレンジの光に照らされた港、風で打ち付ける波の音だけが聞こえる時間が続く。

日が暮れようとしている今でも、うだるような暑さは健在であり、今夜も熱帯夜になるのは言うまでもなかった。

「なあ、指揮官……」

クールでお姉さん気質な彼女が、珍しく歯切れの悪い様子で指揮官に言う。

「——この前の『アレ』について、なんだが」

ピタリ。指揮官の足が止まった。

やはりその話が出てくるか、と心を構える。

実は指揮官が二人で帰るように誘ったのも、それが目的であった。執務室でも二人だけのときは多いが、業務中にはどうしても切り出しづらい話題だからだ。

ただ、ボルチモアの方から先に話を振られてしまったために、指揮官は内心大慌てである。

「……いや、な。確かに責任を取ると言ったのは私だ。ただ、今になつて言うのも手遅れなのは重々承知しているが、やはり順序を間違ったというか、少し飛ばし過ぎたような」

「ごめんなさい、返す言葉もありません……」

「いや頭を下げてほしいわけじゃないぞ、指揮官。べ、別に嫌とは一言

も、つて私の話をするんじゃないやなくて……ああだめだ、どうにも直接的表現を避けてると上手く行かない」

わしゃわしゃとショートヘアを掻きむしるボルチモア。

普段の格好良きの欠片もない、狼狽した様子を見た指揮官は、そもその原因となった「アレ」について思い返していた。

某日、ジャベリンは確かにボルチモアに例の件を伝えた。

「ボルチモアさん、えつとね」

「ん？ どうしたんだジャベリン」

「その、胸のあたりの仕草なんですけど」

「ああ、これか。フィットするのはいいんだがベタつきやすくてね。つい癖で」

「指揮官が気になるから控えてほしいらしくて……」
「きやう!？」

そう、直球で伝えた。代わりに言っただけという要望を素直に受け取った結果だった。

どちらかというところ、やんわりと伝えるのではなく、名前を伏せて伝えると具体的に言わなかった指揮官のミスだろう。

夜になり、執務室での業務を終えた指揮官。

さて自室へと戻ろうかと立ち上がり、ボルチモアに労いの言葉をかけようとしたところ、妙に彼女がそわそわしていると気づく。

「指揮官、その、私の不注意で余計な気を遣わせてしまったらしい」
視線を合わせることなく、ボルチモアは唐突に切り出した。

指揮官、一気に血の気が引いていく。

このタイミングで思い当たる事案は一つだけ。すなわち、ジャベリンに頼んだ例の件である。

「申し訳ない!!」

ボルチモアが次の言葉を発する間もなく、指揮官は頭を下げた。

これにはボルチモアの方が面食らってしまう。

「俺の心の持ちようが悪かった。極力気にしないようにはしていたん

だ、でもふとした瞬間に目に入ってしまったというか、頭から離れなくなつたというか」

勢いあまつて完全にセクハラ発言をしてしまつていているが、指揮官は持ち前の馬鹿正直さを曲げることが出来ない。

「とりあえず顔を上げて欲しい、指揮官。まさか頭を下げようと思つた相手に逆に謝られるとは……思いもなかつた展開だよ」

二人揃つて動転したままでは話も進まないということで、一旦場所を指揮官の自室へと移す。当然、移動中は気まずさから会話の一つもなかつた。

入室後、机一つを挟んで、改めて向き合う両者。

第一声はやはり、ボルチモアからであった。

「これは一つ、確認なのだけど」三つ編みにした部分をしきりに耳へとかけてボルチモアが言う。

「最近指揮官が妙に上の空だったのは、暑さだけでなく私の、む、胸元のせいだったのか」

指揮官、反射的に姿勢を正す。

こちらがボルチモアを見ていたように、ボルチモアもまた指揮官をよく見ていたということである。

誤魔化しようがないため、指揮官は観念して小さく頷いた。

見ると、ボルチモアは頬だけでなく耳元までほんのり赤くなつてい

る。

この手の話題は初心な方らしい。

「——分かつた。そうなつてしまつたのには私にも責任があるな……

私はこの類の話題に疎いのだが、男性というのは時に抑えがたくなるのだろう？ その、性的な意味で。他人ならともかく、指揮官は十分

気心の知れた仲だ、正直者で正しい道を歩もうと努力しているのも理解している。だ、だから、多少の要望なら叶えてあげても……」

がたつ。指揮官が椅子を倒してしまつた音だ。

無論、激しい動揺からである。

ボルチモアの申し出により、話がおかしな方向に転がりだしたからだ。

——これは正直に言ってしまったてもいいのだろうか。

繰り返すが指揮官は馬鹿正直である。しかし、程度が分からない馬鹿ではない。

もしこの場で素直に「ちんちんを下乳から挿入希望」と言ったらどうなるか。

最悪、墓標に刻まれる名前が一つ増えることになる。

しかしここで遠慮して「おっぱいに触らせてください」と言っても、却って煩惱が溜まるだけである。後々に上の空が解消されてないとボルチモアに気づかれれば、身体を張った彼女に申し訳が立たない上、心の余裕が無いと失望されるのは明白。

どの道、下心があったのはもうバレてしまっている。ならばいっそ、清水の舞台から飛び降りるつもりで、ぶっちゃけてしまってもいいのではないか。

指揮官は更に馬鹿な方向へ吹っ切れた。

「耳を貸してほしい？ 構わないが……きやう!? 指揮官、あ、あんた何てことを考えているんだ!? そんな変態的な方向にまで正直であるとは言っていないぞ!」

性に疎いというので具体的に説明してしまったのが不味かったのか、襟首を思いつ切り掴まれてしまう指揮官。

しかし腹を決めたこの男、既に後退の二文字はない。

どうしてもボルチモアにして欲しい、一度叶えてしまえば以降は耐性が付く、今後の業務を円滑に進めるための正しい処置だ、等と指揮官が矢継ぎ早に捲し立てれば、とうとう顔全体を真っ赤にしてボルチモアが黙り込んでしまう。

「……指揮官」

いつになく低い声で呼ばれた指揮官、ああ蜂の巣にされるな、と辞世の句を考え始める。

「先程も言ったが、私はこういう類は本当にからつきしなんだ……後で苦情は受け付けないからな」

俯いたまま呟くボルチモア。

何ということだ、通ってしまった。

要求した側でありながら、指揮官は呆然として暫く棒立ちのままであつた。

「ぐっ、はあっ……指揮官の熱が、胸元に入ってくる……」

同室、フタフタマルマルを過ぎた頃。

ベットの上へと腰を掛け、ズボンとトランクスを足首まで降ろした指揮官。

その足の間に丁度収まる位置に、膝立ちの体勢でボルチモアがいる。

かさばる艦装と外套を脱ぎ、胴体のレオタード部分を除けば、ほぼ裸も同然の恰好である。

彼女は自身の胸を少し持ち上げると、既に反り立っている指揮官の陰茎を、魅惑のおっぱいゾーンへ迎え入れていく。

ずぶずぶずぶ。

指揮官が広げた脚の付け根に、その豊潤な乳房を載せるようにして、ボルチモアは下乳の穴開き部分から熱い肉棒を受け入れた。ぴつちりと張ったスーツに包まれたお乳は、手で圧をかけなくても指揮官の剛直に押し負けることなく、谷間の中へと収納してしまう。

「こ、これがばいずり、という奴か……」

戦闘中でも見せないような強張った表情でボルチモアが言う。

「それで、動かして擦ればいいんだったな。こっ、かな……」

恐る恐るといった様子で、おっぱいを上下に一往復。
たばん。

服の中でみっちり寄せられた乳は、がちがちに勃起した指揮官の陰茎をすっぽりと包み、根元から亀頭へ圧をかけて昇るとそのまま降り降ろされる。

くず餅のようにぶるぶると、弾力のあるおっぱいの感触を直接おちんちんで味わう。

手でするのは一味違う心地良さに、指揮官は頬が緩むのを止めら

れない。

やや自信のない様子だったボルチモアも、徐々に持ち前の適応力を発揮していき、扱き上げるリズムがだんだん良くなっていく。

みちゆ、みちゆと水音が響く。恐らく谷間に溜まっていた汗と、鈴口からチロチロと漏れる我慢汁が混ざっているのだろう。おっぱいで扱かれれば扱かれるほど、指揮官の陰茎は高揚から硬さを増していき、膨らんだ亀頭がレオタードの黒の生地を押し上げていた。

「どうだ指揮官、上手くできているだろうか」

顔を覗き込むように反応を伺うボルチモア。

気持ちいいよ、と言おうとした指揮官だが、呂律が回らないのか、「ひもちいい」と気の抜けた情けない声を発する。

——指揮官のこんな緩んだ顔を見るのは、初めてだな……

このパイズリという行為がそんなに気に入ったのだろうか、そう考えるとボルチモアは、自分がその快楽を与えているという事実にますます気恥ずかしさが増していく。

「先程からびくびく震えているけど、もしかして近いか。その、達するのが」

射精、という単語を使うのに恥じらいがあるらしく、言葉を濁して伝えるボルチモア。

指揮官は小刻みに頷くと、最後は自分で動くから構えていて、と彼女に言った。

構えろと言われても、ボルチモアはどういう体勢でいればいいのかわからないので、指揮官の要望に添う形になった。

「こうして、指揮官のモノが逃げ出さないようにすればいいんだな……うう」

ボルチモアは両手をおっぱいの上で組み、前腕で大きな乳を押しさえつけるようにして陰茎を挟み込む。ただでさえ、レオタードのきつきつの生地に覆われているのに、その上ぎゅつと乳圧をかけられているので、指揮官は一瞬で達してしまいそうな幸福感に満たされる。

服の構造と乳の大きさにより為された、ボルチモアのおっぱいオナホール。

堪らず指揮官、座った状態から飛び跳ねるように腰を上を打ち付けた。

より激しく、レオタード上部に猛々しい突起物が出来上がる。

ばんばんぱんと、まるで孕ませるかのような勢いで乳内を犯している。

「はあ、はあ、指揮官、このまま、出すつもりなのか、せめて最後は、服が汚れないよう外で」

ボルチモアの嘆願も、おっぱいに夢中になった指揮官の耳には届かない。

彼の頭の中は今や、睾丸でぐつぐつに煮えたぎった白い液体で、レオタードの黒ごとボルチモアの胸を染め上げること一杯一杯。

ボルチモアも、パイ突きの反動で揺れる乳を押さえ込むのに必死で、指揮官の方にまで手が伸びない。

イク、イクとうわ言のように繰り返す指揮官は、もう乳内射精に囚われた猿同然。

まもなく、ダムから水が放流されるかのような勢いで、おっぱいマスコの中へびゆるびゆると白濁汁が流れ込んでいった。

「ぎゃ!?、この粘ついた熱い感覚……指揮官、達したのか」

胸の中で延々と精液が放出されていくのを、言葉が出ない様子で眺めるボルチモア。レオタードに隠れているため、全貌は分からないままだが、徐々に広がっていく染みの大きさから、その射精量が尋常でないことは一目瞭然であった。

こぼっ、こぼっ。指揮官の陰茎を引き抜くと、風呂の栓を抜いたかのような音と共に精液が漏れ出す。

垂れたスペルマは、そのまま指揮官の下腹部へと滴り落ちて行き、こつてりと陰毛に絡んでいる。

二人分の荒い息だけが、深夜の薄暗い部屋を支配していた。

——まずい、思い返しただけで興奮してしまう。

再び戻って夕焼けの帰り道。

谷間に散々ぶちまけたこともあってか、それから暫くは上の空になることもなく、バトルスーツのボルチモアを見ても落ち着いたまま、淡々と仕事をこなしていた指揮官。

しかし性的欲求というものは、例えるなら突如発生した上昇気流により発達する積乱雲のようなもので、何かを皮切りにスイッチが入るとぶり返すのである。

そのスイッチこそ、ボルチモアの現在の服装・エースの放課後であつた。

スポーツサークルの活動をするようになってから、彼女はこの恰好でいる頻度の方が徐々に多くなっていき、普段の凛々しいバトルスーツとは違うはつらつとした一面に、指揮官はどきまぎするようになっていた。

するとどうだ、脳裏に押しとどめていた淫靡な記憶、パイズリ狭射のあれこれまでもが一気に押し寄せてしまい、解消したはずの悶々とした気分が再度悩まされるようになったのである。

この機会に二人の関係を改めてはつきりしなければ、と指揮官は思っていた。

あれ以来、ボルチモアとは一切性的な接触は無く、お互いにあえて触れないような態度を取っていたが、それにも限界がある。

「……指揮官、大丈夫か？」

気が付けば、ボルチモアの顔が指揮官の目の前にあつた。

返事の無いことを心配して覗き込んだのか。

慌てて下がる指揮官、その反応に何かを思い出したのか、ボルチモアも一歩下がって目を伏せる。

またしても、波の音だけが響く時間が流れた。

「それで、さっきの話の続きって……」

これ以上ボルチモアにはかり切り出させる訳にはいかないと話しかけるも、結局は返答待ちの指揮官。

「ああ、そうだったな——あの、性急だの変態だの散々言っておいて何なんだが……」

ぷち、と何かが外れる音がする。

指揮官、信じられないといった様子で目を見開く。

第四ボタンが外れた隙間から、ちらりと見える黒のブラジャー。

汗で滲んだ制服に薄っすらと浮かんではいたが、はつきりと見せつけられたことで指揮官の興奮度は一気に振り切れてしまう。

「浅ましいと笑ってくれ。あの日以来、頭の中にフラッシュバックして止まないんだ。指揮官の出した濃厚な雄の匂いと、私の匂いが混じったあの独特な感覚といい、達したときの指揮官のだらしない顔といい……どうやら、自分でも予想だにしていなかったけど、私は存外あの行為に嫌悪感どころか、一種の高揚、いや優越感すら覚えていたのかもしれない」

すらすらと語られる心情のどれもが、指揮官に鈍器で殴られたような衝撃を与える。

「だから、もし今指揮官があの時のように辛抱ならない状態にあるなら……いいよ」

指揮官はもう何が、とは聞き返さなかった。

夕日は既に落ちつつあったが、内なる情炎は却って燃え盛るばかりである。

彼は黙ってボルチモアの手を取ると、迷いのない足取りで歩き始めた。

ずつぶん。ずつぶん。ずつぶん。

風呂の水をかき混ぜるような、激しい水音が聞こえる。

学園の中央、展示室の外れにある雑木林の中。

昼は蝉時雨がうるさく、虫捕りが目的の者以外は誰も入ってくることのない領域。

夜の訪れを告げるよう、木々がざわつくのもお構いなしに、指揮官は立ち上がったまま、ボルチモアの乳を驚掴みにして荒々しく腰を動かしていた。

自室に戻るまですら我慢が効かず、野外でのパイズリという禁断の行為に、二度目にして早くも踏み切ったのだ。

ネクタイを首の後ろへと回し、あえて第一ボタンを閉めさせることで作り出した、擬似的なズリ穴。

一突きするたび水面に波紋が広がるかの如く、ばるんばると振動する。

さらに仁王立ちの指揮官、ぐりぐりと両乳を互い違いに擦り付け、柔らかさを堪能。

しゅっ、しゅっど動かすたびに擦れる制服の音が余計に興奮を煽る。

黒のブラジャーは挿乳を阻害しないよう、下乳の方へややずらしているため、淡いピンク色をした乳輪がほんのりと透けて見えていた。

ボルチモアは跪いてされるがまま、指揮官主導の縦パイズリを見守っていたのだが、

「指揮官、今度は私の方からしても、いいか？」

前回、好き勝手に動かれ射精されたことへの意趣返しか、あるいは純粹な好意からか。

両側からぐいっと乳を寄せると、陰茎に引っ付かせるようにおっぱいを動かし始めた。

言うならば、女性主導によるおっぱいピストン運動。

圧迫により挿乳口が強調され、あたかもちゅぽちゅぽ、おっぱいにおちんちんが吸い付かれているような感覚。ボルチモアの身体が近づいてくるたびに、腰に巻いたカーデイガンや、むっちりした腿の部分も時折指揮官の足に当たるため、二重に気持ちよさが増していく。

もし、下から覗くカメラがこの場に置かれていたならば、竿の部分がボルチモアの制服乳まんこにすっぽりと食べられ、ぶら下がった睾丸だけが丸見えの映像が取れていただろう。

「こういう動きも、好きだっただろう」

今度は上下に小刻みに揺らし、むぎゅむぎゅと亀頭周辺を重点的に扱き上げる。

さわさわと木々が揺れるリズムにも負けなくらい早く、指揮官の

弱点を徹底的に攻めていく。

勝手が分からなかったこの前とは見違えるような乳捌き。

スポーツ競技と同じように、パイズリという性行為すらもお手の物にしていく。

むせ返るような熱気の中、互いの体臭を染み込ませるように、乳と肉棒の混じり合いはよりエスカレートする。

やがて快楽が飽和点に達したのを示すかのように、ぷるぷると指揮官の足が震えだす。

我慢の限界も目前といったところだ。

「――達したくなつたのなら、遠慮しないでいいよ指揮官。この間のスーツは後処理に随分困つたけど、今回の制服にはちゃんと替えがある。いくらでも、気の済むまで漏らせばいい……♡」

優しい声音での催促は、余りにも不意打ちであった。

制服の中、にゆるにゆるできつきつ、汗やら我慢汁やらで滑らかに動く肉棒が、欲望のまま暴れだす。一番深いところで射精したい、という欲望に突き動かされた指揮官、ボルチモアの動きに合わせるよう、今まで最も長いストロークでおちんちんを谷間に押し込んだ。

どびゅ、どびゅどびゅ、びゆるびゆるびゆるびゆる。

はぁ、という深いため息とともに、濃厚な白濁液が制服の中へ注がれていく。

ボルチモアの汗で張り付いていた布地に、精液の粘性が加わったことで、よりねっとりとした感触へと変わっていった。

ホースで水を掛けられたかのように、胸の部分だけがぐしよぐしよに濡れてしまっている。

またしても、谷間では収まりきらない射精量だったのだろう。

「本当に沢山出るものだな……そんなに好きか、私の胸」

やはり羞恥から顔を赤らめているものの、慣れが生じてきたのか、徐々に普段の余裕ある態度を取り戻していくボルチモア。

小さく頷く指揮官を見ると、

「なら、今日はもっと出していい。何、どうすれば気持ちよくできるかは大体分かったさ。この先また、余計な煩惱でトラブルを起こさない

よう管理して上げるのも仕事のうち、なんてね。とにかく、これはしてあげたくてやっつてることだ、あんたは少しも気に病まず、好きなか
けぶちまけて構わないからね……♡」

その後、夜が更けるまで二人が拠点に戻ってくることは無かった。

ケツコン艦フォーミダブルの可憐な乳行為情事〜ド レス篇〜

執務室の窓を叩きつけるように、風がごうごうと吹き荒れている。雨足は通り過ぎるサイレンの音のように、強くなつては弱くなるのを繰り返して、一向に遠のく気配が無い。母港は現在、台風による嵐の真つただ中にある。

ヒトヨンマルマル、昼を過ぎたばかりだというのに、空には暗雲が立ち込め、まるで夜が訪れたかのような薄暗さであった。

「こりゃ、遠征は止めておいて正解だったなあ」

机に肘をつき、書類作成に没頭する指揮官、ふと首を上げ外の様子を伺いながら呟く。

今年は比較的数が少ないなど思っていた矢先に、近年でも勢力が大きい部類の台風が接近中との情報が流れて来た。あたかも、今まで不足していた分が収束したかのような強さであったため、指揮官はデイリー任務を含めた海域への出発を取りやめることにしたのだ。

この暴風雨により出撃や諸々の遠征が無くなったことで、艦船たちには思わぬ余暇が生じた。そこで「各人、自由に過ごし体調を整えるように」と指揮官は全員に通達した。

思い切つてリフレッシュの日に充てたのだ。・

といつても外は猛烈な荒れ模様、基本は母港内で過ごす他ない。

学舎で思い思いの知識を学ぶ者もいれば、疼く身体を解消するため体育館内で出来るスポーツに興じる者もいるだろう。今日の分のしわ寄せは後々になつて生じるだろうが、今は雨風がもたらした休暇を味わつてくれれば幸いだ、と指揮官は思った。

「まあ、行儀の悪い姿勢ですこと。目を悪くしてしまいますわよ、指揮官」

——ぼふっ。

指揮官の肩に顎を乗せるようにして、覗き込む顔がある。

一見して薄幸の愛玩人形を思わせるような、ほんのりと赤みを帯び

た白肌と虚ろな紅の瞳。

しかしそのあどけない顔つきに反して、発する声は広い場所でもはつきりと聞こえるほどに芯が強く、透き通っていて気品を感じさせる。

足のつま先にまで伸びるほどの長髪は、無漂白の木綿のような生成り色であり、それが頭の左右で結われている。俗に言うツインテールである。

「フォーミダブル」

「肩が重いからどいてくれ、というご意見でしたらお断りしますわ」

「……左様ですか」

困惑気味の指揮官に対し、微笑を浮かべて楽しげな様子を見せているのは、イラストリアス級三番艦のフォーミダブルである。

「それにしても、あまり捗ってないご様子ですわね」

「この天気で気分もガタ落ちしてるからねえ。それに、誰かさんが身体を乗せてきたから余計にやりづらいですわ」

「——へえ。それは私が重たい、ということかしら？ し・き・か・ん？」

「え、いやちよま、ぐええっ、仮にもじよ、上官にヘッドロック決めるんじやな、ああああっマジでムリムリ、謝る、謝るから止めてくれええ」

華奢な見た目からは想像も付かない、艦船特有のパワーで指揮官の首を脇に抱えて締め上げると、数秒も経たないうちに降参の合図が出された。なお首絞めを食らっている間、指揮官の側頭部にはたわわに実った胸部装甲がむっちり当たっていたので、離れるのが少し口惜しかったのは彼の中だけの秘密である。

物腰が柔らかく誰にでも親切で、包み込む光のような暖かい印象を与える長女・イラストリアス。

気分屋かつ自分勝手に、嫌いと言っているはずの暴力に真っ先に頼るも、根は優しくとってもウブな次女・ヴィクトリアス。

彼女らに続く姉妹艦であるフォーミダブルは、ロイヤルレディらしい優雅な佇まいと言葉遣いを兼ね備えた、まさに貴族と呼ぶに相応し

い女性——と言うのが表での所作。

実際の彼女は、次女に似た奔放な部分も持ち合わせており、むしろそちらの方が素の性格に近いのだが、普段は淑女たれと自分を結構抑えているのである。

「全く、いくら指輪を渡された間柄でも、言っていないことと悪いことがありましてよ」

ぶくうと頬を膨らませた表情で腕組みをするフォーミダブル。

その左手の薬指には、ハートを形どったピンクカラーの宝石が嵌められており、室内の照明を反射して眩く煌めいている。

「いや、別に体重のことを言ったんじゃない……はい、すみません。俺が悪かったので甲板からフェアリーアルバコアをちらつかせるのは止めてください」

「ふふん、よろしい。それじゃケーキのご用意と足のマッサージ、お願いしますね」

「おまえほんとサボる気満々だよね？」

二人の力関係は、通常このようにフォーミダブルがほぼ主導権を握っている。

ケツコンして親密な仲になってからというものの、彼女は二人の姉に接する以上に遠慮が無くなり、指揮官とふたりっきりのときは面倒くさがり屋な一面も、茶目つ気のある一面も隠すことなく表すようになっていた。

その結果、秘書艦であるにも関わらず、指揮官の方が小間使いのように扱われてしまっているのだが。

指揮官の中での彼女に対する印象も、当初はロイヤルらしい高潔な態度からロンドンのビックベンに降り立つ天使のように思っていたのだが、今では墮天使、むしろ悪魔にまでイメージダウンしている。ドレスに裁縫された二枚の白翼も、彼にはすっかり黒ずんでいるように見えていた。

(まあ、丁度休憩しようと思っていた頃合いだし、用意してやるか)

悪態を付きつつも甘い対応をしてしまうのは、惚れた弱みというものであろう。

指揮官は立ち上がると、部屋の隅に置かれた1ドア式の冷蔵庫へと手を伸ばす。

足の早いものを手軽に保管できるような、最近になって設置した代物だ。

「おーい、母のショートとチョコレートのどっちに」

——fire!!

湿った空気を吹き飛ばすような爆音が、突如として執務室に響く。

音源は机の傍にある筒状の小型スピーカー。これは、携帯情報機器などと数メートルの近距離で接続する無線通信機能が備わっているもので、そこから高音域の男性の歌声に合わせて電子楽器を用いたアップテンポな曲が流れていた。身体が勝手に動き出しそうな、気分が昂るダンス・ミュージックである。

「……フォーミダブルさん？」

「あつ、いけない。接続を切り忘れていましたわ」

フォーミダブルはいつ間にか、備え付けてあるソファアーへと寝そべっており、その手元には長方形の携帯端末が握られていた。

「つてそれ俺の端末じゃん!! とういか、パスコードどうやって破った!？」

「指揮官のことですから、ご自身の着任日とか昇進の日とか、記念になる日を選んでいると当たりを付けて片っ端から入力したら、この通り簡単に抜けられましたわよ」

「え、何で日付知っているの？ 怖っ……」

思わぬリサーチを受けていたことが発覚し、指揮官は背筋に冷たいものが走る感覚に襲われた。

「へへへ、指揮官もこの楽曲がお気に召したようですね」

「元々ユーロビートは好きだし、定番みたいなどころあるし、度々鼻唄で聞かされていたら気になるのも自然とういか」

「そ、その話は今しなくても良くってよー!」

慌てて発言を遮るように起き上がるフォーミダブル。

彼女は貞淑に振る舞っているときでも、時折糸が解れるようにボロが出ることもある。

鼻唄というのは、母校に帰還する際の気の緩みから思わず歌ってしまふ癖のようなもので、指揮官が最初に目撃した際、見間違いか目を疑ったのは言うまでもない。

「でも、この鬱蒼とした空気を変えるには丁度いい刺激だな」

「ええ。他のロイヤルの方々と御一緒の時は、落ち着いた楽曲が主になってしまいますもの。誰もいらつしやらない今日くらい弾けても、罰は当たりませんことよ」

「だな」

さすがにケーキでお茶をするには合いませんけど。フォーミダブルが呟くと、指揮官も小さく笑った。そして彼女が座るソファの前に膝をつくとき、白磁色のタイツに覆われた細足にそっと手を伸ばす。

「どれ、気分が乗ってるうちに揉んで進ぜようじゃないか」

「まあ、指揮官が進んでマッサージュをするだなんて。明日はきつと猛暑になりますわね」

「どういう意味だよそれえ」

フォーミダブルの足は陶磁器のように滑らかな触り心地で、いくら撫でまわしても飽きが来ない触感であった。

「どさくさに紛れて変なところに触れたら怒りますからね」

「はいはい」

「こら、言ったそばから踵を撫で回してますわよ指揮官」

「綺麗な形だったから、思わず」

「もうー」

勤務時間中とは思えないほどのイチャつきぶりである。公私はきつちり分けるよう努めていた二人であったが、ほとんどの艦船が出払って寮舎か学園にいる特異な状況である。ユーロビートのリズムに乗せられるように、すっかり気分が舞い上がって普段とは違うことをするのに夢中になっていた。

——執務室を叩く優しいノックと包み込むような癒しの声音が聞こえてくるまでは。

「指揮官さま、フォーミダブル、お茶のお誘いに参りましたわ。お邪魔してもよろしいかしら」

イラストリアスがやってきた。

「どうぞ入って」

少しの間を置いて、指揮官の声が返ってくる。

中からドタバタと騒がしい物音が聞こえてきたので、イラストリアスはきつと二人仲良く休憩でもしていたのだろうと察知し、「仲睦まじいようで何よりですわ〜」などと微笑ましく思っていたのだが、いざ執務室へ入るとフォーミダブルの姿が見えない。

指揮官が一人、自身の机へと座しているだけである。

雷の音に紛れて聞こえてきたテンポのいいバックグラウンドミュージックも、ピタリと止んでいた。

「指揮官さま、フォーミダブルは……一緒ではないのですか」

「……え、あ、ああ。彼女は丁度資料を取りにいっている最中なんだ。いやー間が悪いな……」

指揮官の声は明らかに上ずっており、様子が変だと一目で分かるほど挙動不審である。

ついでに手も小刻みに震えていて、どこか緊張した面持ちだった。

外の雷鳴は、心なしか激しさを増しているようである。

(私が義理のお姉さんの間柄になったから、ではありませんよね)

一瞬、指揮官が自分に遠慮しているのかと思ったイラストリアスが、この動揺は何か隠し事をしていると考えた方が腑に落ちる。

「あの子はああ見えてお転婆なところがありますから、指揮官さまも手を焼いていらっしやるのではないですか」

「いやほんととおっしやる通りでアツツツツツ」

試しにフォーミダブルに関する話題に踏み込んでみると、突然指揮官が悶えるように机へと突っ伏す。一瞬だけドゴン、と床が震える音が指揮官の足元から発せられていた。

「……ちよつと、足の指打っちゃっただけだから」

そう言う指揮官だが、明らかに手で押さえているのは足の先ではなく腿の付け根の方である。

(もう、あの子ったら)

イラストリアスは察しが良かった。

「それで……お茶がどう、とか言ってなかったっけ」

「はい、ユニコーンちゃんとヴィクトリアスも交えて五人でお茶でもどうかと思いましたが。でもまた次の機会にさせて頂きますわ。フォーミダブルもいないようすし」

「そ、そっか。わざわざ誘いに来てくれたのにごめん。余計な手間を掛けさせてしまったみたいで」

「ふふっ、構いませんのよ。以前のフォーミダブルは肩肘張って力んでいることが多かったのですけれど、指揮官さまとケツコンンされてからは余計な力が抜けたようで、とても活き活きとしているのが私にも分かりますから」

イラストリアスは人差し指を唇に当てるような仕草を取りながら、「義理の姉として、妹のことをよろしくお願いしますね、可愛い弟さま。なんちゃって」などと珍しく冗談を言って立ち去って行った。

ぽよんぽよん、という擬音が聞こえた気がしたが、恐らく指揮官の空耳だろう。

「……十中八九見逃してもらったわ。後で何かお詫びの品を送らないと」

冷や汗を掻いたまま机の下を覗き込む指揮官。果たして、フォーミダブルは正座のままじっと座っていた。

「何も隠れる必要はなかったんじゃない……あとめっちゃ痛かった。加減して」

「あ、あんなだらけているところをイラストリアス姉さんには見せられませんのよ」

「もうバレてるんだからいいじゃない」

「良くない！ もう一回いきますわよ、もう」

「ホント痛かったから勘弁して。抓られた場所赤くなってるよ絶対」
フォーミダブルが出てこれるように椅子を引く指揮官。

だがどうしたことか、彼女は体勢を崩さないまま机の下から動こうとしない。

黒のドレス衣装が暗闇の中に溶け込んでいて、まるで巣穴の中から様子を伺っているかのようである。もしかしてまだ怒っているのだろうか。そう思った指揮官が謝罪の言葉を続けようとする、

「……イラストリアス姉さんの仰ったこと、当たっていますわ」「えっ?」

突然の発言に素っ頓狂な声を上げてしまう指揮官。

外から風の吹きつける音が強くなっていく。

「前に私がもう少し楽に生きたいとお話したこと、覚えていらっしやいますか指揮官」

「も、勿論。だから俺なりに気の置けない関係になれるよう努めてはいるんだけど……も、もしかして空回りしてた?」

フォーミダブルは静かに首を横に振り、言葉を続ける。

「この指輪を頂いたときから、指揮官は私のありのままを出せる居場所になって下さいましたわ。自分の趣味を共有して楽しんで下さるパートナーが出来るだなんて、夢にも思っていませんでしたもの。イラストリアス姉さんやヴィクトリアス姉さんにもあまり見せない一面でも、受け入れて頂いて……指揮官は本当に、包容力のある御方ですわ」

「え、ほんと? やった、滅茶苦茶嬉しいッ」

「すぐ調子に乗って私に悪戯するところはどうかと思いますけど……ね!」

「上げてすぐ落とされた!」

思わぬ感謝の言葉に絶頂まで昇った気分を一瞬で叩き戻され、指揮官はがくりと肩を落とした。

「まあいいや。とりあえず出ておいでよ、ケーキも食べてないし」「言われなくても今すぐ参り……」

ぴたっ。膝を上げようとしたフォーミダブルが静止した。正確には動こうとして動けなくなったように見える。

「……痺れましたわ」

「十五分くらいその姿勢でいれば、そりやあねえ」

「見ていないで手を貸してくださいませ指揮官。このままじゃ一生机の下暮らしですわ」

「そんな大袈裟な……仕方ない」

足に力が入らない様子のフォーミダブルを助け起こそうと、指揮官がそのか細い腕を掴んで引き上げようと試みた瞬間であった。

ぴしゃあ、という閃光とともに一際大きな雷が母港へと落ち、これまでにないほどの轟音が響き渡った。その影響なのか、執務室の電灯がチカチカと点滅している。

驚いたフォーミダブル、きやんと短い悲鳴を上げると、指揮官に寄り掛かるようにしてそのまま倒れ込んでしまう。結果として、頭だけが机の下から脱出した体勢のまま、指揮官の下半身に抱き着くような恰好になっていた。

「い、今のはでかかったわあ……大丈夫かフォーミダブ、ル……」

何とか起き上がろうとした指揮官、ふにゆんという心地良い感触を自覚し、思わず言葉を失ってしまう。

リアス式海岸、と揶揄されるほど深い谷間を形成する彼女の乳が、指揮官の膝元付近でクツションのように潰れている。縦長で、手そのものがすっぽりと収まってしまいそうなほどの柔乳が押し付けられれば、たちまちどんな男であつても鼻の下を伸ばしてしまうだろう。

同時に、フォーミダブルの美しいツインテールを形成するため、白と黒とが交互に折り重なるように結ばれたリボンが、彼女の頭が揺れ動くたびに指揮官の腿を撫で上げ、むず痒い刺激を与えている。互いの感覚が共鳴するかのように指揮官の情欲を滾らせていき、否が応でも熱が集まっていくのを抑えられそうにない。

(まずい、はやくどこかさないと本気で勃っちゃうよ)

焦りからもぞもぞと身体を動かす指揮官だが、倒れた際に甲板が足に絡みついたのか、抜け出すことが出来ない。それどころか、脚の動きに合わせて豊満な乳房がぐにぐにと軟体動物のように形を変えるので、その扇情的な光景が余計興奮を煽るのだ。

ふと、顔を上げたフォーミダブルと目が合う。

目元でぱつんと整えられた前髪の下から覗くような紅の瞳。

普段冷たい印象を与えがちなその目は、今日に限って少し熱っぽいように思えた。

丁度その顔が指揮官の股の近くにあるのだ、男性器の起立に気づかぬはずがない。

「その……ごめん」

不可抗力だから、という言い訳よりも先に謝罪の言葉が出てきた。

指揮官の中では、せつかくい霧囲気だったのをつまらない性欲で台無しにしたと負目を感じていたのだろう。

しかし、そのムードは思わぬ方向へと転じる。

前触れもなく、フォーミダブルは指揮官の腰を抱えるとそのまま元居た机の下へと引きずり込んだのだ。

「へっ!? フォーミダブルなににして」

ぴりっ、という小さな電気が走ったような刺激を感じる。

より正確に言えば、ズボンを押し上げるように形成された緩やかな膨らみを、指でそつとなぞるような刺激だ。あうっ、という情けない声が指揮官から漏れる。

下半身が薄暗い空間に飲み込まれてはつきりとは見えないが、今確かに、フォーミダブルは指揮官の怒張へと布越しに触れたのだ。

「——全く。指揮官はどうしようもないくらいの変態ですわね」
変態。

フォーミダブルの口から発せられたとは思えない強烈なワード。

それは痺れ薬のように指揮官の思考回路へと浸透していき、徐々に麻痺させていく。

ジジジジ、とファスナーが下ろされる音がする。

我慢が効かない肉棒は、外への扉が開かれたのをいいことに、その勇ましくいきり立つ姿を外界へと晒した。

「……相変わらず、グロテスクな造形。こんな近くで観察するのは初めてですけど」

息を呑む様子が闇の中からも伝わってくる。よく目を凝らすと、おちんちんをまじまじと見つめる赤の双眼があった。フォーミダブル

のような美少女にじつくりと恥部を視姦されているという事実が、ますます海綿体の血流量を増していく。

徐に衣服が擦れる音がした。指揮官のではない、フォーミダブルが胸元の今にも零れそうな布地をずり下ろしたのだ。ぷるん、とボールが跳ねるように爆乳が露わになる。その圧倒的な質量は薄暗い空間の中でも、確かな存在感を示している。単純なサイズではイラストリアスの方が上だが、彼女より更に小柄な体格のゴスロリ爆乳はその不足を補って有り余るほどの威力だ。

この体勢でおっぱいだけを露出するという前準備。

まさか、と思った指揮官、ペニスに感じる粘性の液体が彼女の分泌した唾液であると察した瞬間、予感が確信へと変わった。

「おま、こんなこと一体」
——ずぶり。

どこで、とも誰から、とも言いかけた口は、挿乳の与える快感によって強制的に閉じさせられた。はつきりと彼女の口からは告げられていないが、ペニスを包む弾力に富んだ柔らかさはどう考えても乳肉によるものだ。

「指揮官が私の趣味に勘づいたように、私も指揮官の趣向なんてとつくにお見通しですもの」

「うそ、だろ……」

「むしろどうしてバレてないかと思っっているのかが不思議なくらいです。ことよ。メイド隊の間では、誰を一番見ていたかなんて話題に上るくらいバレバレですのに」

何と云うことだ。指揮官は絶句してしまった。

そんなに露骨だったのだろうか。確かに盗み見したことは一度や二度ではない自覚があるようだが。

「こんなはしたない行為のどこがお気に召しているのか、私には点で理解が及びません。ですけど、私以外の女性に現を抜かすのはもつと腹が立ちましたので、情けはかけませんわよ指揮官」

たゆんたゆんと、下から搦り上げるようにおっぱいが揺らされる。男根をふんわりと包む柔肉が波打つように弾んでいき、じわじわ溶け

ていくような快楽を与える。

「あつこれやばい……」

「もう降参ですの？ まだ白旗を上げるには早いのではなくて？」

左右の乳房が別々に、上下、上下と交互に揉み込むように動かされる。

ぬめぬめとした刺激がおちんちんをじつくり責め立てている。刺激自体はまだ緩やかであるため、まずはフォーミダブルの風船のように膨らんだ乳感を味合わせる恰好となった。

ぐつと歯を食いしばって、断続的な快感を耐え忍ぶ指揮官。

母性の象徴ともいえる、女性の中でも屈指の柔らかな箇所。

それを男性の最も弱い箇所でも堪能するのだから、これが気持ち良くないはずがない。

ましてやそれが、フォーミダブルのようにペニス全体をすっぽりと覆えるほどなら尚更である。

パイズリはHカップから、というのとはとある過激派の言であるが、彼女のサイズはそれを優に超えているのは明らかだった。

(想定以上にいやらしいですね、この行為)

フォーミダブルはたどたどしい手つきながら、円を描くように両乳を擦り合わせて、柔肉ですり潰すようにペニスを挟み込むと、指揮官はますますだらけ切った顔になってしまう。

この一方的に快楽を与え、手玉に取っていくズリ行為は、思いのほか彼女の好奇心をくすぐっていた。

(次は逆に回してみましようか)

先程と逆回転でおちんちんを揉み込むと、更に腰を浮かせて気持ちよさそうな反応を示すので、フォーミダブルはすっかり気をよくしていった。

「まあ、指揮官。お返事もまともに出来ないほど感じていらつしやるのかしら」

「はあはあ……」

モチモチの弾力におちんちんが呑み込まれるたびに、咀嚼されるようなぞくぞくとした快楽信号が背筋を走っていき、打ち上げられた魚

のようにびたんびたんとして身体が跳ねてしまう。

度重なるパイズリ行為により、先走りの液が次から次へと溢れ、深い谷間をよりドロドロに汚していく。

「ふ、フォーミ、俺、もう、我慢できな、あう」

指揮官の顔が一層険しくなる。ぎゅっ、ぎゅっ、と締め付けるような双房の動きが、カリ首を撫で上げてぞわぞわが昇ってくる快感に溺れそうになる。

——たぱん、たぱん、たぱん。

リズムカルに跳ねる胸の間では、既に我慢汁や唾液が入り混じった液体が糸を引いていて、扱かれる度に二本、三本と本数が変わる様を指揮官は見つめていた。それを意識することで射精への引き金をどうにか繋ぎ止めているのだ。

(きつとこの糸が途切れるような事態になったら、本当に決壊する)

既にコップから水が溢れだしそうなほど、尿道には精液が蓄えられている。

ほんの一押しされるだけで決壊寸前のおちんちんダム。

それを跳ね具合から察したのだろう、フォーミダブルは指揮官へと問いかけた。

「ティンドンティンドン♪ 限界寸前の指揮官にお知らせがあります」

こんなギリギリのときに何を、と思った指揮官であったが、

「先程の指揮官は、イラストリアス姉さんの胸が揺れるのを見ていましたよね」

——ぎゅむっ。

噴出寸前のペニス乳圧によってせき止められる。

それは大好物を前にしてお預けを食らったかのような、地獄の辛抱であった。

「イラストリアス姉さんとフォーミダブル、本当はどちらに浅ましい欲情を抱いたのかしら？ きちんと分かるように答えてね」

指揮官は悟った。彼女は単に言わせたいのだ。

分かり切った答えであろうと、指揮官の口から発せられることに意

味があると。

そう、訴えているのだ。

「フォーミダブルがつ、つ、机の下に隠れてた時から」
「から？」

「い、いやもつと前、本当は肩に顔を乗せられて、髪の毛が鼻をくすぐったときから、こ、興奮していて」

「よろしい。はい、幕引きよ♪」

鉄のように熱く、硬く滾った肉棒がラストスパートと言わんばかりに激しく乳肉に挟み込まれると、指揮官は鉄砲水のように勢いよく屈服の射精を胸に浴びせていく。どくどくとペニスが脈動するごとに、食い止められていた精子がおっぱいへと泳ぎだすようどんどん放出される。ねつとりとした汗がおっぱいにかけてられるたびに、じんじんとする熱感がフォーミダブルの乳房へと伝わって行った。

指揮官は完全に精魂尽き果てた様子で大の字に横たわっている。

「はあ……こうした行為は勿論はじめてのことでしたが、指揮官の様子を見るに大成功のようですね」

「……」

「——おりゃ」

蹴り一閃。

指揮官の腹部にクリーンヒットすると、トリップから帰還したのか飛び上がるように意識が戻った。

「や、やばい。完全にイッてたよ俺」

「そんなことより、女の子を汚れたまま放っておくのはどういう見なのかしら？」

「……すいません」

ウエットティッシュを用いて丁寧に拭っていく指揮官に対し「埋め合わせは明日の海でよろしくてよ」とフォーミダブルが告げる。指揮官はスケジュールを確認するときつちりオフの日であり、どうやら拒否権はないらしい。

あれほどうるさかった雨風と轟く雷も、二人の熱に押し負けたのか、いつの間にか過ぎ去っていた。

ザラのおっぱい観閲くシャワー室でのパイズりく

三方を囲む水色の壁と、肌色の布で仕切られたシャワー室。

整然と並び立つそれらは、早朝の沈黙に従うようにしんと静まり返っていた——右角の一室を除いては。

タイル張りの床に打ち付ける水音はさほど大きくないため、近づけばすりすりと擦るような音が混じって聞こえてきた。カーテン越しに見える人影は、二つである。

個別のシャワー室に二人と来れば、やはり睦み事を想起するのは自然の流れというものである。例に漏れず、ここでも劣情に身を任せた交わりが行われていた。

一人は、薔薇のような優雅さと妖艶さを兼ね備えた女。

しとどに濡れた赤のサイドテールが揺れ動くたび、ぬぶぬぶと何かを出し入れする音が響いている。その女の目の前には、やや体格の大きい男が壁に寄り掛かったまま、まるで立ち小便をするかのように足を開いていた。右足の傍には、男の履いていたものである、ボツクスタタイプの競泳水着が脱ぎ捨てられている。

「ふふふつ。おっぱいの圧に負けないくらい、ガチガチ……♡」

幼子をあやすような優しい声音。

耳の奥まで蕩かされるような甘いトーンで、より男を釘付けにせんと誘惑する。

その効果はてきめんであり、男はある一点へと向かって、吸い寄せられるようにじつと熱い視線を注いでいた。それは、楕円形に潰された胸にすっぽりと埋まった男の肉棒。決して小さくはない、十五か六はあるだろう長さに膨張した逸物が、包み込むように挟まれている。

まるで自分自身がおちんちんそのものになったかのように意識を集中させると、おっぱいの柔らかさに溺れる悦楽に染まっていくような感覚が、男の全身を徐々に支配していった。

「その調子、その調子……余計な力を抜いて、私に全て委ねるのよ……いい子いい子」

たぶ、たぶとゆったり上下に扱き続ける。谷間でみっちり締め付

けられたまま、ゆさゆさする動きは着実に肉棒を絶頂へと導いていく。地球の重力に押し負け、たたりと垂れた爆乳は随一の大きさであり、興奮の余りはち切れそうな陰茎でさえ跳ね除けることは出来ない。

「さつきからびくびく震えてるようだけど、もう限界近いのかしら。精液込み上げて我慢できない？ 遠慮しないで言って頂戴……うん、それじゃちよつとだけ、おっぱいの圧を上げちゃおっか」

両方の乳首を合わせるように胸を寄せ、そこから亀頭を挿入するよな形で肉棒を挟み込む。ちゅぽちゅぽとおっぱい肉が肉棒へと密着し、スポイトで吸い上げるように乳圧をかけて竿部分をなぞっていく。両手で乳肉をぎゅつと押しえておちんちんの根本までどつぷり呑み込み、またカリの辺りまで引き上げていく様は、まるで大きな口を窄めて肉棒へと吸い付いているかのよう。

ふと、カリ首のところでおっぱいへの抜き差しが止まったかと思えば、今度は先端を集中的にこねくり回すように挟んでいく。

謂わば、おっぱいによる咀嚼行為。

あむあむと真つ赤に膨らんだ陰茎の先っぽを賞味し、男性器特有の鼻に付く匂いを乳肉に刷り込んでいく。しゅつしゅつという摩擦音の中に、口をぱくぱくさせたような空気の抜ける水音が混じり合い、パイズリの音色を奏でていく。

「むずむずしてもどかしい？ とうんとした目をして、そんなにお気に召したのかしら。口をぎゅつと結んで、頑張つて耐えていますって顔をしているけれど、逆効果だつて気づいてないのね。そんなそる表情をされたら、余計に弄りたくなるわ……」

漏れ出す先走り汗が谷間に吸い込まれれば吸い込まれるほど、ぴちやぴちやと乳肌が肉棒に擦れる音が激しくなり、次第にそれだけが耳を支配していく。シャワーの水流がゆるく身体にかかる感覚すら、ぶわりと浸透していく快楽の痺れの前ではかき消されていった。

お尻の奥がぎゅつと締まる、射精の前兆。

為すがままに翻弄されている男は自身の限界を感じ取り、ここまでの経緯が走馬灯のように頭を中を駆け巡っていた。

まだ日も昇り切らない頃、屋外プールに黙々とモップで擦る音が響く。

艦隊全体を仕切りセイレーンの脅威に日々立ち向かう指揮官、この日は早朝の清掃当番であり、モップの緑の毛先をせっせと動かして、プールサイドをゴシゴシ磨いていた。

下はボツクスの競泳水着、上には白の薄手のパーカーを羽織っただけで、他には何も身に着けていない。

現在母港には、屋内の五十メートルプール、外にある二十五メートルのサブプールの二つが設置されており、遊泳と水練の二組に分かれて使用することが多い。

駆逐艦をはじめとする見た目年少組は、どちらかと言えば本格的な競泳よりマットやボールで遊びたい盛りであり、そうなると五十のプールではかえって広すぎる。二十五であれば合流もしやすいので、余所のグループに移って違う遊びにも興じやすくなるのだ。

「とはいえ、二つも管理する身としては結構きついんだよなあ」

プールの管理とは、単に掃除をすればいいという訳ではなく、適正なpHを維持するために塩素濃度を調整したり、浄化槽が正常に稼働しているか、塩素剤の在庫数が規定数を下回ってないか等の日常点検に加え、定期的に外部による水質検査を依頼して基準をクリアしなければならなかったため、それが二つともなると気苦労は倍である。ましてや一つは外にあるプールで、風に煽られた落ち葉が知らず知らずのうちに溜まり、アメンボが悠々と水面を走る環境なのだ。夏の間だけとはいえ、当番制で負担を軽減しているとはいえ、気が滅入るのも仕方の無いことである。

「そういえば、右奥のシャワールの調子が芳しくないとか言ってたっけ」
指揮官はそう言うと、六つ並んで設置されているシャワー室の一番右へと足を運んだ。彼自身にシャワーが直せるわけでなく、単に出方を確かめて、故障していると判断したなら申請書を書かないといけないという思いからの行動であった。

「どれどれ、調子は如何ほどかな、かな」

などと少し調子づいた発言をしながら入室した指揮官、さつそく水を出そうと蛇口に手を伸ばした瞬間である。ピピッと吹かれたホイッスルの甲高い音が耳元でいきなり発せられ、驚きの余り背筋が伸び切ってしまう。振り返るとそこにいたのは、笛を口に咥えたまま得意そうな顔つきをしている重巡洋艦・ザラであった。

「いきなり驚かすなって。気配もなく後ろから近づいて、悪趣味だよ」
「指揮官がのほほんと仕事をして、警戒がお留守になっている証拠よ」
「手厳しいことを……そもそも、何でこんな時間にプールにいるんだ？
？ 見ての通り、水を少し抜いて循環させている最中だし、泳げないぞ。水練なら屋内のプールでどうぞって感じだ」

「——水練？ もう、指揮官は鈍いわね。ザラの恰好を見て分からないのかしら」

「恰好って、いつも通りの水着姿では……」

改めてザラの全身を見渡す。

薔薇のように真っ赤な頭髪を、イタリアの国旗を模した勲章のような髪留めで片側にまとめ上げ、おでこには洗練されたデザインのゴーグルを着用している。口から離れたホイッスルは黄色の紐で首に掛けられており、視線で追っていくと必然的に豊満な胸へと着地する。

彼女が所属するサディア帝国の面々は、大層なお餅を持った艦船が勢揃いしているのだが、ザラはその中でも（というより艦船全体から見ても）桁違いのサイズの胸部装甲を有しており、頭よりも大きいのではないかと疑ってしまうほどポリウーミーである。

その爆乳を懸命に支えている黒のビキニは、天井に吊るされたビニール製ボールのようにぼよんぼよんと揺れていて、少し動いただけで零れてしまうのではないかと心配になるほどだ。

「……………」

もう一度ビキニを凝視する指揮官。そこはかたく違和感を覚えたのは、どうも肌面積が普段より少ない気がしたからだ。乳房に黒の布地が食い込んで、両側から収まりきらない柔肉がぷるんと現れていた。

「ふふふっ、どうしたの指揮官？ 怖い目をしちやって」

「い、いや、なんかいつもより足りないような」

「どこが？」

「だから、その」

「素直に教えてくれれば……いいことがあるかも」

「ぐぬううう……」

——またザラのペースに乗せられっぱなしだ。

出会ってこの方、指揮官はザラを相手に主導権を握れたことがない。

というのも、このザラという女性は超が付くほどのお世話好きで、一部のとんでもない過激派を除けば、程度を弁えた面倒見の良さはトップクラスと評して良いだろう。

ひとたび秘書艦を命じると、食事に体調管理にタスクの分担、服装のコーデまで世話を焼かれてしまい、気づいたときには膝枕で耳かきをされていた始末。

からかうように耳に息を吹きかけられれば、抵抗する気力も失せてしまい、常にされるがままの指揮官。威厳も沽券もへったくれもないさまである。

今度こそは、とその度に意気込む彼なのだが、

「ふんぎぎぎぎぎぎぎ……」

「悔しそうな表情の指揮官も好きだけど、正直な指揮官が可愛くて一番好きよ、私」

「——ビキニの布面積が少ないです」

「Si、良く言えました♡」

このように簡単に屈してしまうので勝負になっていない。

しかし、この布面積の少なさでは、少し泳いただけで乳輪がはみ出してしまうだろう。どうしてそんな欠陥品をわざと着ているのだろうか。

指揮官はまだザラの目的を理解してないのか、首を傾げた様子である。

「それで本題に戻るのだけれど、どうしてわざわざ、こんな泳ぐ気が全く無いような水着を着て、指揮官が一人でいる時間のプールにザラが来たのか、いい加減察しがついたかしら」

えっ、と声を漏らした瞬間には、指揮官の身体はシャワー室の壁際へと追い込まれていた。

ザラは両手を指揮官の首の後ろへと回し、琥珀色の瞳で彼のどよめく顔をじつと見つめている。

「ザ、ザラさん？」

いつ間にか入り口のカーテンは閉められていて、ぱつと見では中は何をしているのかは分からない状態。勿論、他の五つのシャワー室は最初からカーテンが閉じているので、一つだけ変に目立つということもない。

「と、時と場合を考えるんじゃない？」

「ええ、指揮官。それじゃここは相応しくない場所かしら？ どうなの？」

「ッ……」

「恥ずかしくて答えられない？ それじゃあ、直接伺ってみるしかないさそうね」

ザラの細指が指揮官の頬をなぞり、胸筋の間をすり抜け、へその緒周辺をくるくる回ったかと思うと、その下でこんもりと主張する水着の上から、カリカリと人差し指で弄り始めた。無凶痒さに指揮官の身体がビクビクと反応する。

「ほら、強がっちゃダメよ。この子、今にも飛び出したくて苦しんでるじゃない」

続けて、手のひらで包むようにして、硬く張った水着部分を撫で回すと、更に股の下にまで手を伸ばして、玉袋を揉むように刺激する。そこからまた竿の方へと戻って、裏筋を五指によるソフトタッチでさわさわと撫で上げた。一連の愛撫により、指揮官の銃身は水着を突き破る勢いで膨張し始めている。

「準備運動はこのくらいでいいわね。指揮官、ザラの誘惑はお嫌いかしら？」

手の動きを止めることなく聞いてきたザラに、指揮官は小さく二度、首を横に振って返事をした。しゆるしゆると衣服の脱げる音がする。着ていたパーカーを剥かれ、指揮官の上半身が露わになる。その背後で蛇口の捻る音がすれば、やや弱めの水量でシャワーから水が滴り始めた。やはり故障しているのか、身体を洗うには心もとない量でも、雰囲気作りには最適である。

「——ありがとう、指揮官。ザラも嬉しいから、最初のご褒美をあげちやうわね」

——ぱさり。

何かが指揮官の頭へと被せられ、視界が黒に染まる。同時に唇へとザラの口が吸い付き、熱いベーズが交わされていく。ザラの手は競泳水着を降ろしにかかっており、今にも元気になった肉棒が外気に晒されそうだ。

混乱して頭が回らない。鼻先から感じる濃密な匂いは、ザラとすれ違うたびに鼻腔をくすぐるフローラルな香りによく似ている。頭に被さっているのは、恐らく彼女が身に着けていたものなのだ。

ちゅっ、ちゅっ、と唇同士の甘噛みが続く中で、舌先でノックされる気配がある。

訳も分からないまま口を開けば、すかさずザラの舌が指揮官の口内で生き物のように絡みつく。舌同士がとぐろを巻いてじゅぶじゅぶといやらしい鳴き声を上げ、ずぞぞと吸引される。触手に蹂躪されているかのような卓越した舌使い。

中から掻き回されるような快樂で、頭をシェイクされてるような錯覚に陥っていく。

「——ぷはっ」

唾液の紡ぐ糸が、ゆるやかな曲線を描いて垂れていく。

ようやく解放されたところには、既に指揮官の逸物は完全に仕上がった状態で、逆手によるストロークを受けながらびんびんに反り返っていた。

「ビキニの匂いを嗅ぎながらのデープキス、とつても気持ちよさそうに反応してたわね。こういうのも悪くはないでしょう」

悪くないどころか、今後ザラ以外では射精できなくなりそうなほど捻じ曲がった性癖を植え付けられそうで、指揮官の背筋に冷たいものが走る。

「ぼーっとした顔になって、他の人には見せられないわね。もっとならしない表情にしてあげるから、ザラに全部任せて頂戴」

言うや否や、指揮官の前に膝立ちで屈むザラ。ビキニから解放された爆乳は、気球のように縦長でもっちりした印象を受け、下から持ち上げれば間違いなく指が乳肉に隠れて見えなくなるに違いないと思わせる極上の一品である。その先つぽ、やや陥没した淡いピンクの乳首に亀頭をあてがうと、ぺち、ぺちと上下にペニスを揺らして、鞭で叩くように擦り始めた。

鈴口周辺に乳輪が当たると、ちりちりと火花が散るような快感を覚え、腰が震える指揮官。

それを見たザラは、間髪入れず亀頭を乳首にむぎゆりと埋めた状態のまま、一本一本の指が意思を持つかのように竿へと纏わりついて、しゅりしゅりと扱っていく。

陥没乳首に亀頭を嵌めたままの手コキは、搾乳機の逆のようだと指揮官は思った。

母乳を吸い出すための機械ではなく、おちんちんを柔らかかおっぱいに突き立てて、陥没部分を埋め立てするように精液を注ぎ込む。白いミルクを吸い出すはずが吸い取られているのだから、全くもって真逆である。

「これはね、挨拶なのよ指揮官。今からこの子を気持ちよくする本命の前の前戯。言わなくてもこの後、何をするかは分かっているでしょうけど、敢えて言ってあげるわ。そのほうが指揮官も喜ぶみたいだしね」

自分の膝に重くのしかかった乳房を持ち上げて、左右にくぱっと開帳。

その中央に位置するのは、熱感を伴ってギンギンに反り立つ肉棒。

「——パ、イ、ズ、リ♡」
ずつぶん。

指揮官のペニスは魔の乳壺へとすっぽり収まり、消えてしまった。

どくどくと尿道を競り上がる白濁液。

指揮官を走馬灯から引き戻したのは、抑え切れないほどの強烈な射精感であった。

「はっ、イツ!？」と発射前の通達もままならず、びゅーびゅーとお漏らしのような乳内射精が始まってしまふ。バイプ音のように小刻みに震える肉棒を包み込んで離さない乳房は、泣きじやくる子供を抱きしめる母のようで、その暖かい抱擁に甘えた射精は天国のような心地よさであった。何秒経っても続く吐精、その間ザラは重たい乳を離すことなく全て谷間で受け止めていく。射精の熱を冷ますかのように、シャワー水が指揮官の股間を濡らしていった。

「ずっしりと重たい精液ね……谷間の隅々まで行き渡るような量よ。お疲れ様」

微笑むザラを見て、ああ終わったのかと現実に戻る指揮官。見ると、谷間から噴き出した精液が彼女の顎を打ち付けてしまったのか、そこから汗のように滴り落ちていた。

「安心して指揮官。これで終わりにする気はさらさらないわ」「えっ、あっ……」

「一発目は夢心地できちんと味わいきれなかったのでしょうか。顔にそう書いてあるもの」

ザラは指揮官の肉棒を谷間に挿入したまま、押さえていた手を離すと、未だ震える指揮官の腰へと腕を回して爆乳をみっちり密着させる。予期せぬ抱き着きを前に戸惑いの表情を浮かべる指揮官であったが、数秒もしないうちにその真意を味わうことになる。

「出したばかりでまだ辛いでしょうから、お掃除も兼ねて……ね」

ザラが上下に身体を揺らすと、それにつられて爆乳が波打つようにたぱん、たぱんと揺れる。

全身で押し付けるような形で、手による圧のかかっている自然体

なおっぱいの柔っこさが堪能できるノーハンドパイズリ。のしかかられる乳の重さだけで優しく扱かれるソフトな快感に、陰茎の硬さが少しずつ戻っていく。

「んっ、ふっ、本当はビキニを着たままするのが正しいのでしょうか、こうしてぴったり抱き着いて動かされるのも、互いの体温を感じることが出来て心地いいわね」

「うん……気持ちいいし、安心する」

「ふふっ、そうでしょう。でもちよつとだけ興奮できるように、イメージをしてみましようか指揮官」

「イメージ？」

ザラはそう言うと、ぐりぐりと腰に柔肉を押し付けながら語り始める。

「折角こういう場所にいるのだし、指揮官の部屋のシャワー室に水着のザラがいるのを想像してもらおうかしら。確かシャワー室のガラスは透明で、外からでも丸見えだったわよね。指揮官はそのガラスになった気持ちで聞いて頂戴。シャワーを浴びているザラは、外からの熱い視線に気づいて振り返るの。そこには誰かさんがおっ起てたま、嘗め回すようにザラを視姦しているわ。でも残念、指揮官も知つての通りシャワー室にはオートロック機能がついていて、中から開けない限りその人は入ることが出来ない。そこでザラは考えるの、ちよつとからかってみよっかな、なんてね。ボディソープを塗りたくった胸をガラスに押し付けて、円を描くように動くのよ。さしずめ、おっぱいスポンジと言ったところかしら。ザラの乳首が吸盤のようにガラスに張り付いたまま、上下左右に動いている様を見せつけられたら、きつと外の人も辛抱できずに自分で扱き始めるわ。ガラスの前にまで移動して、ザラの動きに合わせておちんちんをシコシコ——擬似パイズリをしている気分になりながらオナニー射精、それも乙なものかもしれないわね。でも、いくら想像したところで、目の前にある肉体の柔らかさ、熱々のザラのおっぱいの感触を知ることが出来ないのよ——良かったわね、指揮官？ 今の貴方は眺めるだけの男ではなく、直接味わうことのできるガラス。特別待遇よ、好きなだけ堪能

して頂戴……♡」

話が終わる頃には、指揮官の逸物は再び剛直へと戻っていた。自分が如何に贅沢な状況にあるのかを、他ならぬザラ自身に分からされたからだ。

この世のどこを探しても、これほど恵まれたボディラインの女性はそうはいない。

Jカップで収まるかも怪しい爆乳、くびれのあるウエスト、手を挟んだまま眠りたいと思うほどむちむちな太もも。その全身をおっぱいを動かすことのみ注力して、乳奉仕を捧げられているのだ。おっぱいフェチとして、これ以上望むことは何もない程の幸福。

自覚したからには、もうあふれ出るリビドーを抑えることは出来ない。

「指揮官、私の肩を掴んでいいのよ。自分で動きたい、滅茶苦茶に腰を振って胸を孕ませたいって、必死に訴える可愛い目……そんな目で見られると、私もたまらなくなるわ。さあ、おいで♡」

まさしく悪魔の誘いだ。これに堕ちない男はいない。

快樂でだらけ切った四肢へと急激に力が溢れる。指揮官はザラの手をおっぱいへと添えさせると、なりふり構わず腰を突き上げ、胸板にまで届かせようと必死のパイ突き運動を始める。そこは掻き分けでも、掻き分けても終わりの無い乳獄。奥へ奥へと勇ましく進んでいく剛直であるが、ザラの胸はあまりにも縦長で、縦パイズリに強すぎた。乳奥に龟头を届かせようと突っ込んでも、軟乳でとろとろのおっぱいホールは底が知れず、逆にみちゆみちゆと隙間なく刺激してくるきめ細やかな乳肌に屈してしまいそうになる。

「もう、興奮しているのは分かるけど、あんまり激しく腰を振ると、ペち、ペちってぶつかかる音が漏れちゃうわよ?」

そう言つて窘めるザラであるが、悟られないようにホールドをきつくしていき、より乳圧による快感を増して、ズリ音を余計に響かせるよう仕向けているので同罪である。

「小雨のようにパラつくシャワーを浴びながら、ザラのおっぱいを犯す気分はどう? 青姦しているみたいで興奮する? 事実ここは外

なのだから、それも間違っていないわね。今更だけど、こんなこと他の子にさせちゃ駄目よ？ 聞かん坊なおちんちんはザラの胸にだけ甘えていなさい」

肯定するようにおっぱいピストンが激しくなる。あまりにも激しく擦るので、谷間に赤い痣が出来てしまうほどだ。言い換えれば、おっぱいを隅々まで味わった証のようなもので、自分専用の証を刻んでいるかのような錯覚に喜びの先走り汁を漏らす指揮官。

「またびくびく震わせて……二度目も近いのかな？ いいのよ、ザラのおっぱいは逃げないから、いくらでも精液を注いで頂戴。いつそ、洗い流しても取れないくらいに、濃ゆくて青臭いのを、ね」

前腕で押し付けるように圧力をかけるザラ。
規格外の爆乳がより強調され、指揮官の絶頂を迎え入れる体勢へと入る。

ぎゅうぎゅうに詰まったおっぱいマンコは、指揮官から挾射以外の思考回路を奪っていく。

最初の射精から引き抜いていないため、おっぱいの中は一度目の精液やら我慢汁で粘っており、そこにシャワーの水が谷間から流れて滑らかな具合に調整される。

ずぶぶつ、ぐつちゅぐつちゅぐつちゅぐつちゅ。

もはや指揮官のおちんちん専用最適化されたといっても過言ではないザラっぱいは、啜え込むような搾り穴へと変貌しており、魔窟であった。

到底、堪えられるはずもなく――

「どぴゅどぴゅー……また随分と勢い良く出したわね。おっぱい全部白濁塗れにしたいのかしら。粘っこくていやらしい臭い……本当に胸だけで孕んじやいそう」

発射された精液は尿道で随分と圧を掛けられたのか、谷間に収まり切らず浸水するかのように乳奥から漏れ出している。玉袋で生成された男汁が一滴残らず放出され、萎んでいくのを指揮官は感覚的に理解した。ザラのお腹を伝うように精液が流れ落ちていき、シャワー水の作った水溜まりへと混じって浮いていた。

ぐりぐりとザラがおっぱいを擦ると、ぶるると震えた肉棒が残り汁を吐き出し、勢い余ってザラの顔へと飛んでいく。

ザラは口元に付いた精液を舌で舐め上げると、味わうように口内で遊ばせ、最後は一息で飲み込んだ。

「ご馳走様。とつても可愛いイキ顔でザラも満たされたわ……足に力が入らない？ なら、少しゆっくり休んでいきましよう。必要なら膝を貸してあげるから、頭を私に預けてね。それと」

——夜になったらこっちも、お願いするわね♡

そう囁くザラの秘部は熱く濡れそぼっており、更なる交わりを予感させる。

指揮官は今日の業務が始まっているにも関わらず、明日が非番であることに早くも感謝していた。

外の排水溝には、精液混じりの白濁水が流れ落ちている。

プリンツ・オイゲンの搾精は濃密なベージュで始まり、とろけるような耳舐めを経て、最後はえぐいパイズリでめられる

時計の短針が十一を指し、橙色の灯台の光が暗闇の母港を妖しく照らす頃である。

最後の団子に手を伸ばそうとした指揮官は、既に皿が空であることに気づいた。

手元の資料から目を離して顔を上げる。

犯人——プリンツ・オイゲンは机に腰を掛けて足を組み、ガーターベルトにより際立った太腿を惜しげもなく晒していた。みたらし団子特有の、艶のある褐色のたれを舌へと絡ませ、見せつけるように賞味している。

普段は左右に従えた、鮫のようなギザ歯を持つ船首（セイレーンの技術の影響なのか、艦装でありながら生き物のように振る舞う節がある）を、水色の腺を持つ尻尾のような太いコードで胴体へと繋げているのだが、執務室で仕事をする際は外しているため、「俺たちにも分ける」とせがまれることもなく、実質彼女の独り占めである。

「あ、それ僕の」

指揮官の制止の声も虚しく、一個、また一個と、啜えられては消えていく団子たち。

最後の一個に差し掛かったところで、プリンツはようやく指揮官の顔を一瞥し——悪戯っぽい笑みを浮かべると躊躇なく口内へと放り込んだ。

「あむ、じゅる」

わざとらしい咀嚼音が聞こえる。

葛粉によりとろみの付いたみたらし団子は、とろけるような甘味を口腔粘膜の隅々にまで浸透させる。甘露に満たされた様子で、プリンツは人差し指を唇へと当てながら、

「ごちそうさま」

と言い、目を細めて指揮官の方を見た。

「……プリンツ、せめてひとつだけでも僕に残しておこうという配慮はないの？」

「あんたがいつまでも手を付けないから食べてあげたのよ」

からん、と乾いた音が響く。

プリンツが串を皿の中へと投げて戻っていた。

僅かに団子の残りが付いたままである。

「取っておいたの！ この深夜業務の補給用に!! もう頭が限界だぁ……無理……」

「そもそも働き過ぎよ指揮官、いい加減切り上げなさいな」

「いや、せめてこの資料だけでも……でも甘いものが無い……力が出不い……」

萎れた花のように項垂れる指揮官。

身体は糖分で出来ている——と豪語するコンコードほどではないにしろ、甘いものに目が無い指揮官にとつては生命線を断られたに等しく、その落ち込み様はお菓子を取られた子供にも勝っていた。

その様子を見たプリンツは小さくため息を付くと、指揮官の方へと身体を乗り出し、

「ほら、ちよつとこつちを向きなさい」

くい、と彼の顎を指で上げる。

突然のことに呆けた顔の指揮官。

プリンツの顔が視界に映る。

かつてのぎこちなさを感じさせない、情熱的な笑みが徐々に近づいていき——次の瞬間、彼が認識したのは、鼻腔をくすぐるみたらし団子のたれの甘みと、柔らかなプリンツの唇の感触であった。

「んっ……」

そつと触れるような口唇の重なり。

淡い桜色をしたプリンツの唇は瑞々しさも兼ね備えており、軽い接触でも宙に浮いたような心地よさを与えてくる。

プリンツは自身の銀髪を耳へとかける仕草を取りながら、比較的肉

厚な指揮官の下唇を挟むように唇を密着させる。

そのまま舌先で左右にゆっくり擦ったかと思うと、軽く甘噛み。異なる刺激の連鎖で、身震いするような快感が背筋を走る。

「ちゅっ、ちゅっ、ん、ちゅっ……」

未だ硬さの取れない指揮官をほぐしていくかののように、今度は唇をすぼめて啄むような接吻を繰り返す。温もりを確かめるように、何度も、何度もリップを合わせる。

すると、堪えるように奥歯を食いしばっていた指揮官も、徐々に力みが抜けていき、その口が半開きになりかけたところで——熱を帯びたプリンツの舌がねじ込まれた。

「んんっ!？」

不意打ちに目を見開く指揮官だが、舌同士が絡み合う快樂の前に締まりのない表情へと変わっていく。一度指揮官の舌を捉えたプリンツは、手心を加えることなく次々と技巧を披露する。

指揮官の舌を吸い込んで自身の舌で包み込み、愛撫するように擦ったかと思えば、舌先を固くして何度も角度を変えて出し入れし、上顎や頬の内側の粘膜を突くように刺激する。

更に歯茎をなぞるように舐め回されると、指揮官の身体は何度もびくつきを繰り返した。

「れう、じゅるじゅる、じゅるるるっ、れろれろ……くちゅ」

やがてされるがままだった指揮官の方からも舌が差し出され、お互いの唾液を交換するように舌を交互に出し入れしたり、舌だけを出して触れ合わせるような接吻も織り交ぜられる。舌同士が擦れ合うたび、粘り気のある唾液がいやらしく糸を引いて垂れていく。

不意に紙の束が、すんと落ちる音がした。

両手に力が入らなくなったせいで、指揮官の手にあった資料が床へとばらまかれる。

もはやそのことを気に掛ける余裕も、彼には残っていない。

「ぢゅるぢゅるぢゅるるる……んっ、はあ……じゅぱっじゅぱっ、ぶじゅるるるるっ」

とうとうプリンツは両手で指揮官の頭を押さえると、口内を掻き乱

すように舌をうねらせ、激しい水音を執務室に響かせる。

暖かい唾を纏った柔らかい感触が口の中で蠢くと同時に、湿り気のある吐息が注がれる。

堪らず舌を引つ込める指揮官だが、これを逃すまいとプリンツはしつこく追いつがつて絡め取り、互いの蜜を混ぜ合わせていく。

(あたま、とろけて、へんになる)

口内を蹂躪されるのは、脳内を掻きまわされる感覚に等しく、指揮官はすっかり陶醉し切っている。

「ぶぶつちゅつつつちゅつつつ……っはあ」

最後に顔を交叉させて、貪るように唇を隙間なく吸いつかれた後、指揮官はようやくプリンツの濃厚な口吸いから解放された。

熱いベーズの余韻は残響となつて脳内にこだましている。

焦点の合わない目のまま彼女を見ると、赤のメツシユが入った銀の前髪がぶれて、幾重にも重なつて映つた。

口の中は、互いの唾液と団子のたれの甘い風味が混じり合つて、独特の味わいを醸し出している。

「——これでおすそ分けはおしまいよ。少しは元気になつたかしら」

などと言いながら、机から降りて指揮官の座る椅子の正面へと立つプリンツ。

放心したままぴくりとも動かず、息の荒い指揮官の前で、手に付けた赤黒のグローブを外していく。陶磁器のように滑らかな肌を持つ素手が露になる。

「ふうん、あんたには少し効き目が強かつたみたいね。こんなに腫らして……いけない指揮官様なこと」

指揮官の胸から腹、その下へと、疼きを与えながらなぞっていくプリンツの手。

指先が目当ての場所——息苦しそうに盛り上がった股間へと辿り着くと、その曲線をそつと撫で上げ、ファスナーを摘まんでゆつたりと降ろしていく。

じじじ、と開かれていく音を聞かせるかのように緩慢な手つき。

焦らされた末に最後まで開き切ると、もう一方の手でズボンの留め具が外されてずり落ち、膨らんだトランクス状のパンツの布地がはつきりと見えるようになった。

「ふふふ、ガチガチよ指揮官……これじゃお仕事に集中するなんて到底無理でしょう。今日はこのままお開きね」

「ご、強引にも程がある……」

「あら、私はただ駄々をこねる指揮官に？甘いモノ”を分けてあげただけ。勝手に大きくしたのはあんたでしょう？ うふふっ」

「そんな言い草、しなくても」

弱々しく目を伏せている間に、プリンツは起立したパンツの布地に顔を寄せるように屈む。目と鼻の先でまじまじと観察され、羞恥で一気に身体の熱が上がる指揮官。

「これ、今にも突き破って出てきてしまいそうね」

五本の指が指揮官の膝を撫で回したかと思うと、腿の付け根を通って張ったテントの頂へと上っていく。先端へと行き着くと、親指で塗りこむように円を描き、パンツ越しに伝わる弾性を何度も確かめる。「ほら、すっかりビンビンよ……はむ、くちゅっ」

最後に盛り上がったパンツの上から軽く口に含む口付けをすると、用は済んだとばかりに立ち上がる。

ここまで散々煽られたこともあり、肉棒は今にも飛び出してきそうなほどいきり立ち、男臭を撒き散らしている。それを抱えた指揮官の表情は苦渋に満ちていた。

そんな姿に加虐心を刺激されたからか、プリンツの頭に意地悪な発想が浮かぶ。

「ねえ指揮官、辛いならここで処理すればいいじゃない。こんな時間に訪ねてくる子もいないでしょうし。お邪魔なら私は出ていくわ……それとも、見てて欲しいのかしら。さっきまでのベージュを思い出しながら、一心不乱に自分のモノを扱き上げるあんたの情けない姿を……♡」

「えっ……っ？」

「ふふふ……その反応、このまま直接してもらえなくても思ってた？

そんなに期待してたのかしら、恥ずかしい指揮官様」
完全に凶星であった。

このままプリンツに抜いてもらえる——執務室という公的な場所のブレーキが働いていても、上官としてのプライドが歯止めをかけようとしても、ズボンを降ろされただけでなく、布越しに舌を這わされた時点で、期待感の方が遥かに上回っていた。

「……そ、そんなの、ひどいよ」

震える声はどうにか絞り出す。

既にパンツには染みが出来ており、漏れ出た先走り汁とプリンツの唾液によつて滲んでいた。

「もう、泣きそうな顔をしては駄目よ。そうね、どうしてもというなら……」

徐に立ち上がったプリンツは後ろへと回り込むと、指揮官の首を抱き寄せるように腕を回して、下半身を覗き込むような形で肩から顔を出す。

背に押し付けられたふくよかな乳袋は、柔らかさを示すように楕円状に潰れていた。

「いったい何のつもりなのか、そう問いかけてようとした指揮官は、

「こういうのはどうかしら——あむっ、んじゅるる」

次の言葉が出なかった。

突如身体に走った電流は、一切の動きを止めてしまう。

彼が辛うじて目を横に向けると、プリンツが真っ赤な耳たぶへ舌を這わせ、そのまま口へと含んで唾液を塗りたくるように舐め始めた。

「こら、頭を動かさしちゃ駄目よ、んふ、じゅるるるる……くぶくぶくぶくぶくぶつ……ずずずずずつ」

流れるように耳輪をなぞっていき、内側の窪みへと舌先をねじ入れて、ほじくるように弄り回す。ミミズがのたうち回るような激しい舌遣いに、思わず「ひぎつ」と悲鳴を上げてしまう指揮官。

「こんな風に……じゅぶぶつ……あんたのよわあいお耳を責めて……」

れるお……ずずず……頭が馬鹿になっても止まらない自慰行為のお手伝い、してあげてもいいのよ……じゅるり」

舌なめずりをする音。

挑発にも近い誘惑だが、結局は自らの手で処理することに変わりはない。

しかし、指揮官はもう限界だった。

プリンツの絶技により閾値を超えた身体は、媚薬を盛られたかのように発情し切っており、更に強烈な快楽体験を求めてしまう。

(自分の手でもいいから快感を得たい……こんなえつちすぎる状況で我慢なんか出来るわけないじゃないかッ)

トランクス状のパンツに手を掛け、勢い任せにずり降ろすと、反り返った怒張が大きく跳ねた。血管がくつきり浮き出たそれを握ると、情欲に流されるまま激しく扱き始める。

「あらあら、返事もしないうちに始めてしまったわね……そんなに我慢できなかった？」

とプリンツに聞かれても、答えることもなく夢中で逸物を扱き続ける。

(はあ、はあ……だってこんなの反則だよ……あんな滅茶苦茶なキスされて、今度は敏感な耳を舐められて、息吹きかけるみたいに囁かれて……気持ちよすぎるのが悪いんだ……)

止まらない自慰行為によって、亀頭は充血したように赤く染まり、大きく膨らんでえらが張っている。我慢汁で滑りの良い肉棒は簡単に扱けてしまうのか、徐々に摩擦音の間隔が短くなっていく。

「ぐちゅぐちゅいやらしい音立てて、随分思いつきり扱くのね。普段からそうなのかしら？ 可愛いわ……はあむ、ちゅっ」

先程までとは反対の耳に移り、再び熱い口内へと招き入れる。

「ちゅっぶ、ちゅっ……んふう……ぢゅむぢゅむ、ぷちゅ、ぢゅぶぷぶ……っはあ、なんだかさつきよりビクビク跳ねてるようだけど、もしかしてこっちの方が弱いのか？ なら、念入りに苛めてあげないといけないわね……れろれろれろ、ぐりゅぐりゅじゅるるるる」

耳の外側を唇で優しく挟んでの吸い付きから、螺旋階段を下るよう

に耳穴へと向かって舌を回していき、満遍なくぬめりを広げる。

蜂蜜を瓶から直接耳に垂らされている——そう錯覚するほどの粘り気が耳に浸透する。

やがて敏感な性感帯に仕上がったのを察したプリンツは舌を細め、穴の縁辺りを抜き差ししながら、またゆっくりと逆方向に回し始めた。

段階を踏んで手前から奥へ、奥から手前へと犯されるほど身震いが止まらなくなり、指揮官は口を半開きにしたまま「あつ、がつ、ひつ、おつおつおつ」と、動物のような喘ぎ声を漏らしている。

「耳が弱いなら、んちゅ……れろお……ちゅつ……こつちも責めてほしいわよね……ちゅぶつ……れるっ……」

耳元から輪郭へと沿うように舌を動かし、そのまま首筋へと這わせ、て吸い付いていく。

「ひぐつ、そつちは、だめ」

「ちゅるるっ……そうかしら？　ますますだらしのない顔になってるけど……はむっ……んっ……」

「あつ、歯が当たって」
「こういうのもいいでしょう……たつぷり跡を付けてあげる……あむっ」

とうとう吸い付くだけでは飽き足らず、歯を当てて、噛みつかない程度の微弱な刺激を与えていく。喉元を押さえられた指揮官が、あまりの恍惚に男根を抜く手の力が弱まっていく様は、肉食動物に狩られて衰弱していく草食動物そのものであった。

「さつきから手が止まつてるわよ指揮官。その調子じゃイクまで程遠そうね」

「……誰の、せいだと思って、はあ、はあ」

両耳は丁寧に舐められて真つ赤、逸物を扱いた手も真つ赤、ついでに亀頭も真つ赤。

完全に熟して食べ頃の指揮官をどう料理するか————いつもの人差し指を噛む仕草を取りながら、プリンツは次の段階へと移ることにした。

「……興が乗ってきたわ。もし私のお願いを聞いてくれるなら、ちゃんと出させてあげてもいいわよ」

「ほ、本当に」

一瞬にして顔が晴れた指揮官だが、「お願い」の三文字が持つ不吉な気配に感づき、引きつった表情へと変わる。

「ええ、本当よ……お願いは、一緒のお風呂に入るだけ。簡単でしょう？」

「えっ、いやそれは……」

「は・い・る・わ・よ・ね？」

「……入ります」

風呂場——完全に逃げ場の無い、しかも濡れても大丈夫な場所に連れ込まれたら、一体どうなってしまうのか。

指揮官はもう、今抱いている感情が期待なのか恐怖なのか、緋い交ぜになり過ぎて判別が付けられなかった。

風呂に入るなり早々、指揮官は四つん這いになっていた。

正しくは、四つん這いになるよう命じられたのだ——他ならぬプリンツ・オイゲンによって。

本来艦船に指示を出す立場にあるはずの指揮官が、言われるがままに羞恥を煽る体勢を取らされている。

下半身に溜まった白濁の放出を担保しているからこそ生じた逆転なのだ。

「そう、もっとお尻を上げなさい。そのままキープよ指揮官」

プリンツは生まれたままの姿ではなく、上下ともに黒を基調とした、ドイツの国旗を彷彿させる赤と黄の二本線が入ったビキニを着用している。

普段髪留め代わりにしている真紅の艦装ではなく、やや薄い色合いの黒リボンで二つに結んでおり、耳には十字勲章を模したピアスが付

けられている。

艶のある豊満なバストがビキニによって引き締められ、一層目を惹く格好となっている。

特に象徴ともいえる右胸の黒子は、あまりに魅惑的。

ひとたび視界に収めただけで釘付けとなり、脳殺されてしまうに違いない。

何故風呂場なのに水着なのか、という問いかけは無粋であろう。

明らかに指揮官の性的興奮を煽る目的で着ているのだ。

「なんでこんなポーズを……うう」

指揮官がお尻を突き上げると、臀部の割れ目から覗く放射状に広がる菊門も、ぶら下がった睾丸も、そこから突き降ろされた剛直も全てプリンツの方から一望できる形となる。

「鉄血では動物の名前で恋人を呼ぶこともある話はしたわよね」

「あ、ああ、うん、多分。今それと何の関係が」

「……指揮官の部屋にある、左から二番目のたんすの裏」

「へっ!? いやあれは知り合いが無理やり、つてそもそもなんでそれを知ってんのさ!!」

「あなたの考えることなんかお見通しよ。それにしても、つれないわね指揮官……ああいうのが好みだったなんて一言も話してくれなかったわ」

「だからあれは強引に押し付けられたんだって……」

知人の悪戯により、郵送物に紛れていた一枚のDVD。

問題はその中身で、くノ一の格好をした女優の前で、男が仰向けに横たわった状態から両脚を頭の方へと持っていき、恥部が持ち上げられて晒された体位のまま、舌や指、胸で執拗に責められるという、中々に専門的なアダルトビデオだったのだ。

貰い物を捨てるわけにもいかず、かといって送り返す勇気もない指揮官は、誰にも発見されないような場所にこっそり保管するしかなかった。

(よりにもよってプリンツに見つかるなんて……)

果たして内容まで確認されてしまったのかは定かではないが、この

体位を取らされた以上、何をされるかは考えるまでもない。

「……ワンちゃん♡」

「……ッ」

「ふふふっ、股間が反応してるわね。嬉しくて尻尾を振ってるみたい」
「ち、ちが……」

「口では否定しても身体が喜んでるわよ。そう、指揮官はワンちゃんと呼ばれたいのね」

顔から火が出るほどの恥ずかしさ。

動物呼びの話が良からぬ方向への火付け役を果たしてしまい、指揮官は弁明の仕様がなくなる。

「さっきまでの火照りが残ってるのかしら。こんなに尻尾を硬くして」

不意にプリンツの指が尻の割れ目から竿の裏筋へとかけてなぞる。当然堪えられるはずもなく、指揮官は全身を震わせる。

プリンツは薄笑いを浮かべると、そのまま片方の手で睾丸を揉みしだきながら、もう一方の手でくすぐるように亀頭をカリカリと弄り出す。

「もう準備万端なようね。少し時間が経ったのに、さつきと変わらないくらいかちこちよ」

「プリンツ……あつ……もう焦らさないで……」

「ふうん。そんなにイキたいのね」

「イキたいからッ、お尻の穴ほじろうとしてないでッ、あつ、息吹きかけるのも駄目だからあ」

「はいはい、しようがないわね……それじゃ今度は中腰になりなさい、手は壁に付けるのよ」

言われるがまま、指揮官は起き上がると尻を差し出し中腰の姿勢を取る。

後方からは何かを泡立てる音が聞こえ、それをどこかに塗りたくっているようだ。

——ずっぷり。

突如男根を包み込む柔らかな肉質の感触に、指揮官は驚く。

首を後ろへ向けることは出来ないが、おおよそ何をされてるのは察しが付いていた。

プリンツはビキニを着たまま、その豊満な谷間に潤滑液を塗り込んで肉棒を挟んだのだ。

「ほら、今まで頑張ったご褒美をあげる。あんたの大好きなおっぱいでしてあげるわ」

指揮官の足の間に出来た空間で膝を付き、ぶら下がる肉棒をビキニの間の生乳で迎え入れる。

一見ストローを挿す感覚に近いが、中に詰まっているのはサイズにしてHかIはあるだろう、温いプリンツの乳肉。

液体の中とは違う、肉厚で密封された場所は男根を押し返すように圧をかけてくる。

それでありながら、事前の仕込みで程よいぬめりが施されていたため、肉棒はすんなりと呑み込まれてしまう。

圧に逆らいながら乳房を掻き分けていくのは、これ以上なく指揮官の興奮を煽った。

「ふふふつ、本当に嬉しそうに震えてるわよ、あんたのおちんぽ♡それじゃ思いっきり扱ってあげるから、好きなだけ声を上げなさい」

通常とは違い、上乳から挿入する形で行われる乳との交わりは、まさしく未知の体験であった。

上位置へと変わった睾丸へ打ち付けるように乳房が持ち上げられると、乳圧をかけて亀頭の位置まで降り降ろされる。滑らかな一連の動作の中で、密着した乳房が肉棒へと吸い付き、手や口とは違う柔らかない圧迫感が与えられる。

それを手拍子に乗せるように上下、上下と繰り返されれば、たちまちのうちに顔がだらしなく歪んでしまう。

反応の良さに気を良くしたのか、プリンツはビキニに皺ができるくらい強く抱き寄せて、よりホールドを高めていく。

団子に刺さった爪楊枝はこういう気分なのだろうか、と指揮官は思った。

張りのある乳肌は餅にも負けないほどの弾力で、カリの段差へと食い込むように吸着してくる。

そうして肉棒の形を覚え、指揮官専用の乳穴へと最適化されていく。

「胸の中でぐちゅぐちゅにされるのも、お玉に柔らかい肉が当たるのも、全部気持ちいいでしょう。こっちから見るとすごいわよ、あなたのおちんちんが私の胸にずぶずぶ挿し込まれて、ねっとり糸を引きながら抜かれてる……ふふふっ、ワンちゃんだけじゃなくて、ミルク搾りされるウシさんもお上手なのかしら♡」

相変わらず煽るのを止めないプリンツだが、指揮官はもはやそのことに意識を割く余裕は残っていなかった。

散々お預けを喰らった末に堪能する乳房の心地よさは想像を絶するものであり、加えて本当に胸で搾られてるような家畜同然の体位であることが、ますます射精への欲求を強固なものにしていく。

「プリンツ……もう……イキたい……イキたいよお」

ぼやけた思考の中、最後の力をふり絞った、か弱い声でのおねだりが浴室に反響する。

「自分からせがむなんて、よっほど射精したいのね……でも残念。本番はここからよ指揮官……んっ、れるお……」

酒を飲み干す時のように大きく口を開けたプリンツは、目の前でひくひくと動く尻穴へと被さるように吸い付き、皸を伸ばすように舐めまわす。

同時に前腕を寄せて乳房の締まりを良くすると、快樂の逃げ場がなくなってしまう。

肉棒は極上の乳壺の中で、今にも白い欲望を漏らしそうである。

「ほら……んじゅるるる……こうしてデリケートな部分を舐められながら……ちゅぷちゅぷ……おっぱいでずりゅずりゅされるのは天国でしょう？ このまま果てるまでしてあげるから、気にせず出しなさいな……ちゅるちゅる」

両耳にしたような舌遣いをそのままお尻で実行された指揮官は、極楽の二点攻めの前に「し、死ぬっ、きもちよすぎて死んじゃう」と狂ったように叫ぶことしか出来ない。

両乳によりこねられる肉棒からは卑猥な音が鳴り響き、それに対抗するように尻穴を虐める舌音も激しくなる。

——ぱちゅんぱちゅん、ぐりゅぐりゅ、ずつぶずつぶ、ぐぼぼっ。

淫猥の音色は僅かに残っていた理性をかき消し、指揮官の頭を真っ白に染め上げる。

間もなくまともに発射を告げられないまま、弾むように揺れ動く乳房の中、降参の白濁汁がぶちまけられた。

「ふふふっ……白く粘ついた精液がびゆるびゆる、びゆるびゆる……まるでボディソープね。ビキニまで真っ白に染まるくらい大量よ……」

牛の乳搾り以上の勢いで噴射されたザーメンは、プリンツの乳房では受けきれずに下乳から零れ落ちていく。

射精の最中でも左右に揺すって、最後まで出し切るよう促すプリンツ。

その間、彼女の舌は尻の割れ目に抜き差しするように挿入されており、こちらに刺激を与えるのも怠らない。

太腿へと飛び散った精液が垂れて広がる様は、ドーナツをコーティングする白い砂糖を連想させた。

最後の一滴まで谷間に吐精し終わると、力を使い果たした指揮官はそのままプリンツの膝に尻餅を付いて倒れこむ。

「もう、足に力が入らない……」

背中をプリンツの乳房にもたれたまま、ようやく終わった搾精に安堵する指揮官。

だが——

「何を終わった気になって、身を預けてるのかしら。まだ一発目でしょう？ ほら、ほらほらほら、まだ硬いままじゃない♡次は湯船に

浸かりながらたつぷり可愛がつてあげるから、覚悟して頂戴——
ワンちゃん♡」

抱きしめられ、再び肉棒を手で扱かれながら、地獄の宣告を突き付けられる指揮官。

もう勘弁して下さい、という弱々しい叫びは当然聞き入れられず、指揮官は足腰立たなくなるまで搾り取られる運命から逃れられなかった。

「本当、散々な目に合った……ちんこ取れたりしてない、よね？」

一連の行為を終え、床に就いた指揮官。

射精の負荷で未だに痛む睾丸を気にしながら、鉛のように重たい足を動かし、寝返りを打とうとするも——艦船の力がかつしりと腕に抱き着かれてるため、下手に体勢を変えることが出来ない。

隣で静かな寝息を立てているのは、案の定プリンツ・オイゲンである。

「流れて添い寝することになったけど、まさかへろへろの僕より先に落ちるとは……おかげでこっちは寝付けないという」

二の腕を包み込む幸せな温もりのせいで、先程までの淫靡な交わり（というよりは一方的な搾精）が脳裏を過り、中々落ち着けない指揮官である。ひどい倦怠感と眠気に身を任せようとしても、ざわつく胸がどうにもそれを阻害してしまう。

改めてプリンツの寝顔を見る。

獲物を刈り取るような嗜虐的な雰囲気は四散し、安らぎに満ちた様子で寝入っている。

（そういえば、こういう表情を見るのは初めてかも）

着任して直ぐからの付き合いである指揮官だが、当初は飾ったような笑顔が目立ち、からかうことはあっても決して深くは踏み込んで来ず、距離を保ったような付き合い方だったと記憶している。

しかし、誰かにちよっかいを出すというのは、構ってほしい心情の裏返しでもある。

本質的には寂しがり屋な部分もあるのかもしれない——そう
思った指揮官は、努めて彼女の孤独に寄り添ってきたのだが、いつの
間にか完全に火を付けてしまったらしい。

今回の搾精も、八割方自分が楽しんでたとはいえ、指揮官の趣向に
併せようとした結果なのだろう。

「とはいえ……なんかやられてばかりだと沽券に関わるな」

そう言う指揮官は眠るプリンツの前髪をそつと上げて、額に添え
るような優しい口づけをした。

(我ながらへタレすぎるだろ、これ……)

起こさないための配慮、などと言いつけた、奥手な男のせめて
ものお返しだった。

「おやすみ、プリンツ」

気恥ずかしさから早々に目を閉じた指揮官は、彼女の口角が微かに
上がったのを知る由もなかった。

ベルファストとお出かけ後の楽しいポツキーマゲームがエロい方向に傾いていく件について

立冬を過ぎて迎えるはじめてのオフの日。

放射冷却による朝の冷え込みが強くなり、布団がますます恋しくなる季節であるが、指揮官は非常に上機嫌だった。

その理由は単純明快。

今日はベルファストと二人きりでお出かけする予定だからだ。

(この時をどれほど待ち侘びたことか……)

かのアークロイヤルは駆逐艦を見守る際、鼻から血が噴き出すほど気合が入っているとよく言われるが、今日の指揮官もそれに匹敵する意気込みっぷりである。

というのも、今まで何度も誘ってはやんわりとお断りされてきたからだ。

これにはベルファストが普段担当している役職にも関係がある。

エディンバラ級二番艦である彼女は、ロイヤルが誇るメイド隊を総括する「メイド長」であり、その仕事ぶりはまさに万能。

メイド隊のメンバーには、力仕事のケント、掃除のシェフィールド、身辺警護のシリアス、お菓子作りのサフォーク、紅茶のエディンバラ等と、一芸ならばメイド長を上回る人材がこれでもかと揃っている。

だがベルファストは、その全てを高水準でこなせてしまう。

数値で表すなら、九割以上の出来だろう。

——メイドたるもの、見返りを求めず全身全霊で奉仕するべし。

という見解を示したのはシェフィールドであるが、これを本当に体現できてしまう完璧ぶりこそ、ベルファストがメイド長たる所以である。

しかし、あまりに聡明なのが災いして、ベルファストはほとんど自己を表に出さない。

強いて言うならば、主人がまだ自覚していないことすらも察知して、敢えてすぐには答えを教えず、焦らしては困り顔を楽しむ程度のものである。

茶目つ気は見せる。

しかしそれも、指揮官の思考力と問題解決能力を鍛えるという目的あつてこそである。

一介のメイドとしての線引きがあまりにも固すぎて、決してそれを破ろうとしない。

「ご主人様からのお誘いは身に余る光栄ではありますが、ベルファストにはメイド長としての責務、およびご主人様のご不在の際でも業務を滞りなく進めるといふ、秘書艦としての責任がございます。何卒ご容赦下さいませ」

この一点張りである。

指揮官は心配だった。

徹底してメイドであり続けることを、ベルファストは恐らくストレスに感じたりはしない。艦船である彼女は人間のように幼少期を経て育つたのではなく、生まれた時から「瀟洒な従者」としての完成系であり、そう造られたのだと彼女も自認しているからだ。

しかし一人の女性としてはどうなのか。

メイドの枷を外して、ありのまま過ごす時間があつてもいいのではないか——ついでにそれが自分とイチャコラする時間になれば一挙両得というもの。

両得の部分は完全に自分の都合だが、思い立った指揮官の行動は早い。

元メイド総括のニューカッスルに相談を持ちかけると、メイド隊全員の助力もあつて、とうとうベルファストに休暇日を設けることができた。

なおこの際、指揮官は綺麗な目的のみを打ち明けたものの、内に秘めた我欲をほぼ全員に看破されている。

ばれていないと思つてるのは当人だけだろう。実に幸せ者である。仕上げに自身のオフ日を、ベルファストの休暇日に当てれば作戦成功。

どう見ても職権乱用であつた。

「……メイドとしてはご主人様を窘めるべきですが、主や皆様の御心

遣い無下にするわけには参りませんね。不肖ベルファスト、ご主人様とのお買い物に一日同伴させて頂きます」

外堀を完全に埋めることで、ようやくベルファストは折れてくれた。

メイドとしての一面以外をようやく拝める絶好機、男として浮かれずにはられない。

そういう経緯もあつてか、指揮官は普段以上に身なりを整えて、気力十分のまま待ち合わせ場所へと向かったのだが――

「お早い(ご)到着で(ご)ございますね、(ご)主人様」

舞い上がる木の葉も、秋空に浮かぶ雲も、そして行き交う人々さえも制止して見えた。

待ち合わせ時刻の十分前に到着した指揮官よりも早く着いていたベルファストだが、驚くべきところはそこではない。

着任以来、初めて拝む私服姿だった。

普段の彼女の格好といえば、クラシッくなメイド服に、破碎した鎖の垂れたチョーカー、重桜の五航戦・瑞鶴の一刀ですら受け止めてしまうほど頑強なガントレットが特徴的である。しかし今のベルファストは、それらメイドとしてのエッセンスを一切排除した秋のコーデであつた。

真紅のベレー帽とお揃いの色をした大判ストールを羽織り、肩を大胆に露出したベージュのセーターに黒のタイトスカートを身に着け、腰には濃茶のベルトと白紐が巻いてある。太ももから脚まで艶めかしい黒タイツに覆われ、下にはシックなハイヒールを履いている。また、ベルファストから見て左側の頭部にはチョコレート色のリボンが結ばれていて、それが絹のような白髪に映えて一層際立っている。耳に付けられた金のイヤリングは、揺れるたびに光を反射し、存在感を放っていた。

「おお……」

感嘆の声を漏らした指揮官だが、後の言葉が何も続かない。

口が開いたまま数秒固まっていた。

本当は、息つく暇も無いほど誉め言葉を捲(まく)し立てるつもりだったの

だ。

だが、これほどの美しい造形を前にしては、どんな飾った言葉も陳腐でしかない。

ようやく捻りだした一言も、

「……すげえ似合ってる」

に留まり、指揮官は己の語彙力の無さを恥じていた。

「勿体ないお言葉でございます」

一瞬、薄青の瞳を大きく開いた後、ベルファストはそう答えていつも通りのお辞儀をした。

「ごめん、折角の私服なのに気の利いたこと何も言えなくて」

「あら、ご主人様はお気づきではないのですね」

「な、何を？」

「ご主人様は本気で感銘を受けたときほど、口が回らなくなるのです。先程の表情だけで、ベルファストの服装をお気に召して頂けたと十分に伝わっております」

「うわっ……それマジか」

恥ずかしさの余り天を仰ぐ指揮官。

このメイド長は、あとどれほど自覚していない部分を知っているのだろうか。

そう考えるとますます顔から火が出そうになる。

「それでは参りましょう。時間は有限でございます」

「お、おう」

順調な滑り出しとはいかなかったが、雰囲気も和んだところで二人揃って歩み始めた。

指揮官は新鮮な気分であった。

勿論ベルファストの私服姿が美麗であるのも一つだが、何より並んで歩くのが楽しい。

普段の彼女であれば、従者の立場を弁え、常に三步後ろを歩んでいくところだろう。

かといって、メイド気質が完全に抜けるわけでもなく。

「ストップストップ、俺が荷物持つからいんだってば」

買い物中、率先して荷物を持つとうとするベルファストを手で制止する。

「しかしメイドとして、ご主人様のお荷物を持つのは当然のことでございます」

「ベル、今日はそういうのを抜きにして、楽に振る舞ってほしいんだよ」

指揮官はベルファストに向き合って言う。

「俺の我が儘に付き合わせといてなんだけどき、こんな時ぐらいベルにはメイドじゃなくて一人の女性としてメイドの枷を外して欲しいというか」

「女性として、でございますか」

「もっとはつきり言うと……その、デートの時ぐらい俺が引つ張っていききたいな、と」

思い切ってそう告げる。

決して男らしくはないが、勇気を出した発言だ。

控え目な印象の男から飛び出した意外な宣言に、さしものベルファストといえど驚きを顕わにする。

「お手を煩わせることになりましたが……」

「むしろ歓迎さ。それでベルがもつと素のまままでいられるなら、いくらでも」

胸を拳で叩いて見せる。

「……そうですね。仰る通り、指揮官としての……いいえ、男性としてのメンツを立てるのも大事でございますね。それでは半分お預けしてもよろしいですか」

「あ、そこは譲らないのね」

「ご主人様に荷物持ちを全て押し付けては、メイド長の名折れですから」

「成程、お互いに尊重しないとな」

ふと、左腕に何か絡みつく感触がした。

ベルファストは突然、指揮官の脇に手を通すと身体を密着させるように寄せてきた。

露出した肩が近くにあるので、思わずどぎまぎしてしまおう。

「それではエスコートをお願いしますね、ご主人様」

「はは……参ったな」

結局はベルファーストに先手を取られてしまい、指揮官は苦笑いしつつも、衣服越しに触れ合う温もりを心地よく感じていた。

「悪いなベル、俺の部屋まで付き添わせてしまつて」

日が西に傾いたころ、二人は買い物を終え指揮官の自室へと戻つていた。

「当然の勤めです。それにしても、ご主人様のお部屋にお部屋に給仕以外の御用で二人きりになるのは、なんだか不思議な感覚が致しますね」

「確かに。今日はいつもの主従関係じゃなくて……その、デートだからな」

「はい、所謂お部屋デートでございます」

(うつ……ちつとは動じてくれるかと思つたのに、さりと返された) 恥じらう顔を拝むはずが、かえつてこちらが恥ずかしかる表情ばかりを見せてしまい、指揮官は少し負けたような気分に陥る。

そんな主人の様子を見透かしたかのように、ベルファーストは買い物袋の中から長方形の箱を一つ取り出し、指揮官からもパッケージが見えるように手に持った。

「それ……ポッキー？」

「はい。本日は11月11日、ポッキーの日でございます」

「あつそういえば……ん？ わざわざそれを言うつてことは」

「察しが早くて助かります、ご主人様」

箱から飛び出した銀の袋に切り込みを入れ、チョコレートに覆われたスティックを一本取り出すと、教鞭のように扱い指揮官の方へ指す。

「世間では『ポッキーゲーム』と呼ぶとお聞きしました。いかがですか、このベルファーストと勝負するというのは」

「ベルおまつ……」

意味を分かって誘っているのか、そう続けようとした指揮官。

しかし、口元を手で押さえ、悪戯っぽい目で見つめてくるベルファストの反応で確信する。

(こいつ、からかうつもり満々だな)

裏を返せば指揮官の要望通り、ベルファストが本来持っている素の性格、すなわちお茶目な部分を前面に出し始めたともいえる——いきなり大胆過ぎる提案だが。

「よし……やっつてやろうじゃないの」

指揮官はこれのある種の挑戦と受け取った。

確かに、ベルファストの伸び伸びとした一面が見たいと思っていたのは事実。

だからといって、終始手玉に取られて主導権を明け渡したい訳ではない。

調子に乗らせてたまるか、と指揮官は闘志を剥き出しにする。

「ルールはシンプルにいくぞ。互いに目を閉じてスタート、ポツキー折ったら負け、口離しても負け、目を開けても負け！ 三本勝負のうち二本先取で勝利！ どうだ!!」

「ご主人様の意のままに。ですが、一つだけ確認してもよろしいですか」

「何だ」

「お互いの唇が触れてしまった場合は……どのような判定になるのでしょうか」

「はっ!? そ、それは」

引き分けという考えが頭を過ぎったが、それでは勝敗が付かない可能性もある。

「……後に触れた方の負けということだ」

数秒間を置いて、指揮官はそう答えた。

先か後かで悩んだが、先にすると居待ちによる膠着状態が発生すると考えたため、積極性を促す意味でも後の方を選んだのである。

どちらが先に触れたか曖昧なときは、ポツキーの長さで判別を付ける。

キスを受けた側の方には、より長いポツキーが唇に残っているはずだ。

「ふふっ、かしこまりました」

「そ、そうやって余裕ぶってられるのも今のうちだかな」

「ではお手柔らかにお願いします、ご主人様」

ベルファストは手に持っていたポツキーを咥えると、目を固くつぶって顎を差し出す。

心なしか、頬が少し朱に染まっているようにも見える。

年頃の乙女を思わせる初々しい仕草に、思わず身体の熱が上がる指揮官。

（いや、これは罠だ。動揺を誘ってるんだ）

寒気で肌が赤くなっているのを上手く利用しているに違いない、と指揮官は考えた。

（早くも心理戦を仕掛けてくるとは……さすがメイド長、あくどいな）
その手には乗らないぞ、と内心で盛り上がりつつも、初手の作戦は決まっていた。

ずばり先手必勝である。

ベルファストより一口が大きいのを生かし、先に進んでさっさとキスをしてしまう戦法だ。見立て通りなら、二口も噛り付けば半分の位置に達するはずである。

「……タイマーを三秒後にセットした。鳴ったらスタートで」

指揮官が端を咥え、携帯画面をタップする。

緊張が走る中、間もなく開始の合図を告げるアラームが部屋中に響いた。

（よっしや先制攻撃を……を？）

意気込んで齧ろうとした指揮官だが、何ということだろう。

次の瞬間にはひゅるとポツキーが口から抜け出しており、勢い余った指揮官はそのまま先端を齧って折ってしまった。

「まずはベルファストの一勝、でございませうね」

指揮官が大きく噛り付こうとした瞬間、隙を突いたベルファストはポツキーを吸い込んで自身の口に手繰り寄せ、意図的に折れやすくな

るよう仕向けたのだ。

「嘘だろ、そんなストローで吸うみたいな芸当ありかよ……」

「ご主人様の示したルールの通り、きちんと口を離さずに行いましたので」

につこり微笑むベルファストの顔には、何か問題でも？ とはつきり書かれていた。

てつきりギリギリを攻めてくると思わせての変化球。

しかしこれも、指揮官の気負いぶりから合理的に行動を予測しているのである。

「……さすが、俺の感情の機微を知り尽くしてるだけはある」

「そのようなことを仰られるのは、メイド冥利に尽きるというものです」

「ぐぬぬ」

今更ながら相手が悪すぎる、と指揮官は思った。

下手をしなくても、ベルファストは指揮官以上に指揮官自身のことを把握している。

(さつきはがつつきすぎて唇のホールドが緩んでいたのが敗因だった……今度はそうは行かないぞ。カウンターを狙ってやる)

指揮官の言うカウンターとは、敢えてベルファストに先に食べ進ませ、一口の射程範囲内に入ったところで一気にキスを狙う作戦である。

「次も同じ手が通用すると」

思うなよ、と言い終わる前にベルファストはまた目を閉じて顎を突き出していた。

しかし口にはまだポッキーが啜えられていない。

「……それは一体何のジェスチャー」

「折角ですので、ご主人様の方から啜えさせて頂けないかと……過分な申し出とは存じますが」

「はぐっ」

精神的揺さぶりをかけつつ、欲求を満たそうとする強欲ぶり。

こちらが断らないと知ってのおねだりである。

「そ、それくらい、お安い御用だ」

などと強がってはいるが、指揮官の指は小刻みに震えていた。主に羞恥と緊張による精神的負荷から振戦を起こしている。

もう一方の手で震えを抑えながら、慎重にベルファストの口へと運んだ。

「あむ……」

薄紅の唇に先端が乗る。妙に生々しい光景である。

糸が張ったようにポツキーがぴんと立つ。無事に啜えられたようだ。

「ふふっ、視線が熱いですよご主人様……」

「な、何をくっ」

急ぎ反対側を口に入れ、再びタイマーを押す。

今度こそ勝つ——決意を込めて挑む第二ラウンド。

しかし、またしても指揮官の思うような試合展開ではなかった。

(……動かない?)

目を閉じているため、漠然とした気配しか分からないのだが、居待ちを決めた指揮官と同じように、ベルファストも動かない。

先に唇が触れた方の勝利、というルールがありながら、まさかの膠着状態。

(動かないってのは一体……?)

先程ベルファストがやった芸当を指揮官が返してくると予想しているのか。

いや、そこまで器用な男ではないのは向こうも承知してるはず。

(つまり同じカウンター狙い……まるで居合の立ち合いだ)

しかし、何時までもこのままというわけにはいかない。

今、指揮官とベルファストの顔の距離はおおよそ十三か十四センチ。

その上、五感のうち視覚をふさいでいるため、研ぎ澄まされた嗅覚がベルファストのフェロモンを感知してしまう。

繊細な白髪から漂う甘い香りは、長引くほど指揮官の意識を散漫にする。

そして、長時間の姿勢維持にとうとう悲鳴を上げたのは——指揮官の首筋であった。

一瞬撃ったような電撃が走り、痛みから思わず緊張の糸が揺らぐ。当然その機を逃すベルファストではなかった。

——さくさくさくさくさくさくさくさくさく。

(え、ちよ早)

——ちゅっ。

小刻みながら驚異的速度で口内に運んでいくと、最後は優しく口唇を重ねる。

「私の勝利、でございませぬ」

そう告げるベルファストの表情は、やはり意地悪であった。

まんまと術中に嵌り、唇まで奪われ、指揮官は完全な敗北を喫したので。

「うがああああ」と呻き声をあげ、悔し気に睨んでも既に面目は丸潰れである。

「い、一本も取れずに負けてしまうなんて……不覚……」

「顔をお上げください、ご主人様」

「何だよ勝者の余裕かこんちく……」

指揮官の目に留まったのは、一本のポツキーであった。

本来三本目の勝負に使われるはずだったそれを、ベルファストが持っている。

今更それがどうした、そう思っていた指揮官だったが。

「んしょ……少々お菓子の強度が心もとないのが気がかりではありませんが」

刺した。

谷間にポツキーを刺した。

大胆に開かれた胸元の中にすっぽり収まっている。

まるで突き立てられた剣だ。

「え……」

指揮官は状況を飲み込めずにいた。

口ではなく、胸。

それには勿論仰天しているが、何より勝負が付いたのに続行する意図が掴めない。

「ここからは、ベルファストが敷く追加ルールでございます」

手の甲で豊かな乳房を寄せつつ、ポツキーが折れないよう絶妙な力加減をしながら、ベルファストが続けて言う。

「ご主人様は今から、手を一切使わずにこれをお召し上がり下さいませ。見事折れずに完食出来たならご主人様の勝ち、というのはいかがでしょうか」

「……」

「お受け致しますか？」

「……やる」

頭が追いつかないまま挑戦の意思を示してしまったのは、乳房の魔性に魅入られたからか。

はたまた最後に残った意地か。

差し出された谷間を上から覗き込む体勢へと移り、食べやすい位置を調節する。

指揮官から見た光景は、実に異様だった。

生肌が晒された上乳がまず目に入る。

そそり立つ黒茶色の柱が今にも眉間を刺してきそうで、妙な威圧感があった。

セーターと乳房の隙間に目を凝らせば、薄っすらだが突起物らしき姿が目視できる。

もしそれが乳首なのだとしたら——これ以上はないチラリズムだろう。

正座により張ったタイトスカートと太腿も、妙に厭らしく感じてしまう。

今から顔だけで乳房に飛び込む——傍から見れば、言い訳の仕様がないほどの変態行為に臨もうとしている。

「どうぞで……ご奉仕の準備は出来ております」

勝負ではなかったのか、等と無粋な発言が飛ぶこともなく。

指揮官は静かに、最初の一口を啜えた。

——さくつ。

先程も説明した通り、一本辺りの長さは十三か十四センチ。

一口食べるごとに三センチ進むペースであれば、約四回か五回で終点へと辿り着く。

そして食べれば食べるほど、魅惑の領域へ近づいていくのだ。

普段のメイド服でもはつきり分かるほど存在感のある爆乳、それが剥き出しになったゾーンへと。

——さくつ、さくつ。

なんと瑞々しい肌色なのだろう。きめ細やかで絨毯よりも柔らかい乳肌、今にもおでこに触れそうな位置まできている。

——さくつ、さくつ。

五口目。

最後の欠片を前にして、指揮官の顔は完全にベルファストの上乳へと沈んでいた。

あと少し口を動かせば終わる。そこまで来て、最後の一步が踏み出せない。

(……これは、駄目だ)

食虫植物は、一度捕らえた獲物を長い時間をかけてゆっくりと消化すると聞く。

今の状況は、まさにそれと同じだ。

四肢の力が抜けていく。

母性の象徴は顔を満遍なく満たして、柔和な慈悲を与えてくれる。

「失礼します、ご主人様」

ベルファストの声が遠くで聞こえたかと思うと、両肩に腕を回され、胸に押し付ける形で抱き締められた。

その一押しで、最後の欠片が口へと放り込まれる。

それは、指揮官の勝利を意味していた。

(なんだ、要はこれがしたかったのか)

ようやく読めた茶番の真意。ベルファストは「よし……よし……よし……」と子守唄のように囁いて、自身の胸に指揮官を抱き寄せるのを止めな

い。

(甘やかすの好きそうだなあ……ベル)

鼻先が乳房に埋まっているため、呼吸がやや苦しい。

熱い吐息が谷間に注がれ、湿度が徐々に上がっていく。

ようやく解放されたときには、指揮官はすっかり蒸気して、のぼせ顔になっていた。

「申し訳(ご)ぎいません(ご)主人様。思わず力が入ってしまったみたいで……ベルファストの我が儘にも付き合わせてしまい……」

「それは……ほら、お互い様だから……」

未だ夢見心地の指揮官は、気の抜けた声で答える。

だが、ある一部分だけは違う。

火照った身体から熱を集めるかのように、燻った情欲が一点に凝縮されていく。

ズボンを徐々に押し上げる、勇ましき益荒男。

もはや隠すことも出来ないほどに主張していた。

「でも一応勝ったんだから……俺のしたいことも、していいのかな」

「それは……もつと熱く滾るモノをベルファストに挟ませてみたい

……ということでしょうか」

「……ッ」

ますます膨張していく逸物を抑えられない。

何を示唆しているのか察しがつかないほど、指揮官は鈍くは無かつた。

ひたすらに想像を掻き立てられる。

今しがた顔を包んでいたあの長い乳房に、自身の怒張を埋めたとしたら……一体どんな感覚がするのだろう。

きつとただ癒されるだけで済むはずがない。

指揮官は黙って、ズボンの留め具に手を伸ばしていた。

「それでは、(ご)主人様の上に跨らせていただきます。はしたない体勢では(ご)ぎいますが……どうぞ、ベルファストの臀部を(ご)覧になりなが

ら、身をお任せくださいませ」

仰向けの指揮官に対し、頭を反対の向きにして覆い被さるベルファスト。

当然指揮官の視界には、タイトスカートにより強調されたヒップラインが光沢を放っている様子が一面に広がっている。

俗に言うシックスナインの体勢である。

ごくりと唾を飲み込む大きな音がした。

タイトの中ではち切れそうなほど肉厚な太腿が、余計に興奮を煽る。

「少々風変わりな趣向ではありますが……ご主人様の性的嗜好を鑑みて、このようなご奉仕はいかがでしょう」

ベルファストはセーターを捲らなかつた。

てつきり下から挟むのだと思っていた指揮官は、完全に意表を突かれる。

胸元に掛ったセーターに指をかけ、谷間への侵入口を作ると、そのまま寝そべって反り返った肉棒をずっと迎え入れていく。

イメージとしては、通常の吊るされた状態から逆さにしたバナナが、湾曲した末端から吞まれていく構図だ。

着衣のまま、大胆に露出した上乳から挟んでいくパイズリというのは、さぞマニアにとって堪らない光景に違いない。

ましてや、それが衣服に収まりきらないほどの長乳なら尚更である。

「ベルファストの胸の中でこんなにも硬く……それに熱も籠って、このまま乳房が溶けてしまいそうですね」

「はあ……ベルのおっぱい、ふわふわだ……」

蒸れた乳肌が竿に密着して擦れている。

肉感を持った柔らかな双丘に挟まれた肉棒は、まるで流体の中にあるかのように滑らかな挿入を繰り返していく。

両側からの圧により、乳房の形がスライムのように歪んでは、また元の張りのある形へと戻っていった。

「ふっ、はっ……お気に召して頂ければ幸いです。そのままベルファ

ストの乳房を心ゆくまでご堪能下さいませ」
より強く抱擁するために、ベルファストが上体を屈めて体重を前へと乗せる。

尻が持ち上がったことで、タイツに覆われた下着がタイトスカートの中から姿を現した。

薄ピンクの逆三角形は指揮官の視線を釘付けにし、より怒張へ送られる血流量を増していく。

「ご主人様の情熱的な視線を後ろに感じていると、思いのほか火照ってしまいますね。むしろその方が好みでしょうか……ベルファストの熱が増すほど、乳房の中がますます煮えたぎって、噴き出す汗が絡みつき……ああ、こんなにも淫靡な音が響いて」

龟头から竿へ、竿から龟头へ。

竿全体が埋まるほどの乳に撫でられ、喜びの痙攣を示す。

指揮官の方からは、どう挟まれているのかを見ることは出来ない。だが、ずっしりとした両乳の重さを、陰茎だけでなく股関節の部分でも感じ取れるのは、直接見ないことで感覚が凝縮されているからに違いない。

このシックスサインで行うパイズリには、いくつかの利点が存在する。

縦パイズリのような乳房に挿入する感覚であるため、龟头は常に乳の奥で埋もれ、揉まれ続ける快感が得られる。

加えて座位特有の、体重を預けた乳房の押しつけも可能である。

そして何よりも優れているのが――

「ぴちや……れるっ……」

睾丸を舌がなぞる。

皴を伸ばすように、二つの玉の間を舌先が舐め上げた。

予期せぬ快感に足がぴんと張ってしまう指揮官。

睾丸を舌で弄ばれながら、肉棒を谷間の中で扱かれるなどという、得体のしれない快楽を味わえるのはこの体位ぐらいなものだ。

甘い痺れが広がる。

チヨコレートよりも甘く、深く浸透する射精への疼き。

——ずりゆ、ずりゆ、ずりゆ。

淡々と響く水音自体が、カウントダウンの役割を果たしているかのようであった。

「ご主人様、ベルファストの私服を汚してはいけない、などと遠慮をしてはいけませんよ。込み上げる欲望のまま、全てを解き放つてくださいませ。その様子を独り占めできる贅沢を、どうかこの私に与えてください……んちゅ」

ベルファストはそれ以上何も言わず、ただ睾丸を弄ることにのみ口を使いだした。

乳房を掬い上げる両腕に力が入る。

セーターに覆われたまま、乳圧が増した肉壺の中でぶるりと肉棒が震え——濃厚な男汗が漏れ始めた。

白濁液がセーターへと染み込んでいく。

元の生地の色を侵略するように、より濃い色に染め上げる。

やがて心臓に匹敵するほどのサイズにまで染みは広がり、むせ返るようなスperlマ臭がベルファストの上半身を覆った。

射精の終わりを察したベルファストは、ゆつくりと肉棒を引き抜いていく。

まだ硬さを保った肉棒は、粘ついた状態のままぶるんと跳ねて、健在ぶりを見せつける。

彼女がそのまま上体を起こすと、固形を保ったままの精液がスカートにまで垂れていった。

「とても勢いの良い吐精でございました……ですがまだ、この子は満足し切っていないようです」

細い指が裏筋をひと撫でしただけで、再び臨戦態勢へと移る。

「どうでしょう、お次のお楽しみとして——ベルファストのタイツを破ってみるといのは」

混濁した意識の中、指揮官の手は彼女の臀部へと伸びていく。

ああ——これは朝までしっぽり行くかもしれない。

まだ夜を迎えたばかりだというのに、確信に近い予感が指揮官にはあつた。

ホーネットとえっちなスキンシップをした後、ちんちんを挟まれる話

窓から染み入る真冬の冷気も、今の指揮官にとってはどうでもいいことであつた。

目の前にいる女性——ヨークタウン級航空母艦の三番艦・ホーネットと交わす接吻に、全ての意識を奪われているのだから。

「ちゅっ……ちゅぶ……んむっ……ちゅるる」

互いの唇を貪る、濃密な口吸い。

ほのかにシャンパンの味がする。既に三本は空けた後だつた。

ソファアーに座つたまま、くびれの際立つ彼女の腰へと手を回し、より身体の火照りを近くで感じようとする。

炭酸の弾ける刺激は徐々に、舌が絡み合う粘質な快樂へと変わつていった。

「ぶはっ……指揮官、すごい顔真つ赤じゃん」

「……ホーネットだつて大概じゃないか」

「そりゃこんなに激しいキスしちゃつたら、ねえ」

熱を帯びた青緑の瞳が指揮官へと熱い視線を注いでいる。

目尻の下がつた表情は、快活な彼女が普段見せない「女の顔」そのものだ。

「ふふふ、なくんか私の太ももに手が伸びてるけど何でかにや〜？」

「ん〜？ ああ、すごいむちむち」

「いや、その感想は聞いてないってば……」

ホットパンツとロングブーツの間で剥き出しとなつた、ホーネットの太ももへと五指を這わせる。

そのまま股の間へ手を滑らせると、肉厚な内ももに挟まれる暖かな感触が指揮官に安心感をもたらした。

「ま、まあ私はスタイルに自信持つてるし？ そんなに好きなら、触らせてあげるけど……」

「うむ」

「即答って……こういう時だけ素直なんだから。しようがないにやあ……」

太ももを自由に触らせたまま、ホーネットは彼の頭をゆっくりと撫でてあげる。

あまりに指揮官が腿をまさぐるので、ホットパンツの留め具が外れ、黒の下着がちらりと見えてしまっていることに、どちらも気付いていない。

そもそもの発端は、ホーネットがシャンパンと大量のDVDを持ち込み、指揮官の自室へと乗り込んだことにあつた。

目的は酒盛り……ではなく、あくまでも西部劇の鑑賞である。

「いや〜指揮官が興味を持ってくれて、私すっごく嬉しいよ!! さあ、どれから見よっかな〜」

同好の士を得た喜びからか、えらくご機嫌な様子のホーネット。

既に季節は冬だというのに、いつも通りの露出が多いウエスタンな恰好をしている。

全身ほぼ黒一色の服装に、テンガロンハットの裏地、ホットパンツのベルト、所々の服のラインを染める黄色が映える。その名の通り、スズメバチを彷彿させるカラーリングだ。

二つのお餅を抱える黒のビキニに、くびれのある腰、加えて肉付きの良い太腿と、世の男が思わず視線を向けてしまう箇所をこれでもかと晒している。

自分の体形に自信があるからこそ、このような大胆な恰好が出来るのだろう。

慣れないうちは目のやり場に困り、その度に「私に惚れたかにや〜?」と冗談交じりだからかわれたのが懐かしいなど指揮官は思った。今でもどぎまぎすることは多いので、克服してはいないのだが。

「姉ちゃん達……ヨークタウン姉もエンプラ姉も、あんましドラマに関心持つタイプじゃないからさ。二人揃っていーぐるちゃんと遊ぶのが趣味って感じだし」

いーぐるちゃんというのは二人が使役する鷹の名前のことだが、姉妹艦にも関わらずホーネットには自分用の鷹がいない。

それに限らず、彼女の容姿も二人の姉とは似ていない。

特に髪色に至っては、姉二人が銀髪なのに対してホーネットは真逆の金髪だ。

ショップ店員兼メカニック担当の明石曰く、

「にやにや……ホーネットは後付けで建造された空母だと聞いたにや。メンタルキューブがヒトの思念の具現化だとしたら、多分その間隔の開きが影響しているにや。後は多分、名前に引ッ張られた可能性も……いやはや、人間の考えることってホントに単純にや」とのこと。

実際、ホーネットは日本のロンドン海軍軍縮条約の脱退により、アメリカの制限が緩和されたため急遽追加された空母である。

彼女にだけいーぐるちゃんがないのには、そういった背景も関わっていた。

外見の違いに加え、姉のエンタープライズが誇る不屈の戦績の数々。

同じヨークタウン級として？比較”するヒトの思念が根幹に入っているからなのか、ホーネットは生まれた時からそのことに対してややコンプレックスを抱いている。

しかし、そこで卑屈にならないのが彼女の良さだ。

姉とは対照的な明朗快活ぶりも、独自のスタイルを突き詰めようとする努力の形なのかもしれない。

そう思うと、上官として彼女の趣味の一つや二つに付き合うのもやぶさかではない——というのが指揮官の気持ちの半分。

もう半分はただの下心である。

「さあ、飲みながらじゃんじゃん見るわよ、分からないシーンがあったら私が全部説明してあげるから、遠慮なく聞いてよね指揮官ッ」

ホーネットの笑顔が一層眩しくなったのを見て、話に乗った甲斐があったなと指揮官も嬉しくなった。

こうして始まった鑑賞会だが、思いの外二人の口数は少なく、揃ってテレビ画面を食い入るように見つめていた。

意外にも、西部劇そのものへと魅せられていることに指揮官は気付く。

切り立つ崖、緑の無い荒れた木々、無秩序に舞う砂塵——荒野に立つ男達が、哀愁漂うバラードの流れる中で睨み合う。

「どっちが先に抜くのが早いかの勝負」は、詳しくない人でも知っている西部劇の代名詞だ。

しかしここまで緊張感を駆り立て、かつ登場人物の背景が複雑に絡み合った上で成り立つ勝負だとは思ってもしなかった。

「男の子ってこういうのが好きなんでしよう？」と聞けばいかがわしい想像をしてみいがちだが、この言葉にはそういった性的なニュアンスとは別の意味も含まれている。

すなわち、漢の浪漫だ。

リボルバーの撃鉄と硝煙の匂い、そして男の矜持が詰まった西部開拓時代へのノスタルジーを感じさせる世界観——まさに男心を刺激するエッセンスの塊だ。

「……いやー、何度見ても痺れちゃうわね」

エンディングに入ったところでホーネットはようやく口を開いた。

鼻息が荒く、興奮冷めやらぬ様子である。

指揮官もまた鳥肌が立っていた。今までこのジャンルに触れてこなかったのを、素直に勿体ないと思えた。

「なあホーネット、最後の一騎打ちで差し込まれたカットインの回想なんだが……」

「あーそこはねえ、同じ回想なのに主人公から敵役へと流れるように視点が移ってるのよ」

「視点が……成程つまり、あれが復讐の原点で……うわっ上手いなあ構成」

「でしよでしょ!! 私もすっげえ気に入ってるんだ、そのシーン」

感想の共有ができたホーネットはとても満足気に笑っている。

彼女はこの西部劇が特にお気に入りらしく、劇中の台詞回しを自然に覚えてしまうほど繰り返し鑑賞しているようだ。

ここで火が付いたのか、ホーネットは饒舌に好きな名シーンを語り出し、それにつられてシャンパンの減るペースも加速度的に早くなつていった。

「あく指揮官のグラス空になつてるじゃん。私が注いであげるよ」
そう言つてグラスへと手を伸ばすホーネット。

悪いな、と一言礼を述べようとした指揮官だったが、思わぬ出来事に口を紡いでしまう。

——むにゆり。

幸せな柔らかさが指揮官の太ももを覆った。

二人はソファーに隣同士で座っており、ホーネットから見て指揮官のグラスは斜め右の位置にある。

そのグラスを取ろうと、指揮官の膝上に覆い被さつて身を乗り出したので、確かな大きさを誇る胸が押し付けられてしまったのだ。

脚の曲線に合わせて形を歪ませる黒ビキニに、思わず目を奪われる。

「はいどうぞ……ってどうしたの、顔真っ赤にして。そんなに酔つた？」

「え、あ、まあそうかも」

「ふうん？」

咄嗟に誤魔化す指揮官。しかし、このボディタッチはあまりに過ぎなかった。

元々ホーネットは距離感の近い娘である。

異性の指揮官に対しても、まるで同性の幼馴染に接するかのよう
に、気軽なスキンシップを試みるタイプなのだ。

そこにアルコールが入り、判断能力が鈍るとどうなるか。
「来た来た、僅か数秒で一気に三人も倒しちゃう神射撃!! すぐくア
ゲアゲ気分になるわ」

再び画面へと夢中になったホーネットは、自身の太ももが指揮官の
脚部へと当たっているのに気付かない。

それどころか、満員電車で詰めて座るときと同じぐらい密着していることさえ意識してないと見える。

肩と肩がぶつかるほどの近さ。

指揮官がもう少し足を広げたなら、むっちりした生の太ももの感触を存分に味わえるだろう。

ズボンをまくり上げ、素足同士で絡ませたならさぞ心地いいに違いない——邪な欲求が頭を過ぎり、指揮官は大きく首を横に振った。

その後も足を組み替えたり、腕組みをしたりと、体勢を変えるだけでホーネットと接触するので、指揮官は気が気でない。そして一旦落ち着こうと背もたれに寄りかかったとき、事故は発生した。

「……………」

ソファーに付いた手から、合皮の生地とは違った温い感触が伝わる。

手汗で湿った掌に吸い付く華奢な触り心地である。

何を握ってしまったかを指揮官は直ぐに察した——ホーネットの手だ。

あれだけの重量がある艦装を操っているにも関わらず、男の角ばって硬い皮膚とはまるで違う、しっとりとして滑らかな彼女の手肌に心音が跳ね上がる。

すると、先程まで騒がしかったはずのホーネットの声が一切聞こえてこない。

恐る恐る顔を横に向けると、彼女はいつも以上に深くテンガロンハットを被っていた。

顔にほんのりと朱色が差し、あごを搔いて視線を逸らす仕草は、普段の元気娘な彼女とは違って純真な乙女そのものだ。

「あー、なんかさ……思ったより近くに座ってたんだね私達。あはははー……」

ホーネットらしくない乾いた笑い声を上げると、それ以降は借りてきた猫のように大人しくなった。俯いたまま、西部劇の映像にさえ目を向けない。

指揮官も言葉を詰まらせる。偶然触ってしまった、と言って手を離

せば恐らく有耶無耶のまま鑑賞会が続くだろう。
では逆に、握る手を強くしたならば。

「……ううう……ちよ、ちよつと外に行って買い足ししてくる！
してくるから……その、手を……」

沈黙に耐えきれず、適当な理由を付けて抜け出そうとしたホーネットだったが、指揮官の手を振り払おうとはしなかった。

それを肯定と受け取ったのか、思い切ってホーネットを抱き寄せた。彼女は抵抗することなく、指揮官の胸の中へと収まった。

「我慢、出来なくなっちゃった……？」

そのホーネットの確認こそが、理性の壁を粉々にする最後の一手となった。

「れるっ、ちゆるるるるっ、ぢゅぶぢゅぶ、んっ」

二度目の口づけはより深く、舌を結び付けるほどに絡ませていく。

一度目の接吻で残っていた遠慮も吹き飛び、指揮官は積極的に舌を伸ばしていった。

菌茎を撫で、唾液を吸い、互いの火照りを交換し合うようにねつとりと交わる。

舌がうねるたび、淫靡な水音が響いて思考を満たしていく。合間に挟まるホーネットの悩まし気な吐息も、指揮官の興奮を更に煽るスパイスとなっていた。

「ぢゅっつっつっくぢゅぶつぢゅっつっつ……っは」

頬肉を吸い込むほどに啜ったのを最後に、二人の唇が離れる。

粘っこい白金の糸がソファアールへと垂れていき、合皮の上を汚した。

(……なんだかすごく、ぼんやりしてきた)

指揮官はやや夢見心地で、交わした唾液の味を噛みしめている。

スズメバチの毒は二度目が本番。一度目で出来た抗体に対して反応し、ショックを起こせば死に至る可能性もある。

だが、ホーネットがもたらしたのは毒ではなく甘露。

全身が恍惚に染まる甘さを、二回の口づけで浸透させた。

もはや指揮官は彼女のこと以外眼中になく——テレビの音にも構わず、たわわに実った乳房へと手を伸ばしていた。

「んっ、本当に躊躇がないんだから」

「好きなら触らせてあげるって言われたからな」

「それは……あっ……太ももの話でしょ……んはあ……」

黒のビキニの上から擦る程度に手を這わせ、ふくよかな球形を堪能する。

指を曲げず、手の平で優しく撫で上げるたびにぷるりと弾む乳房。

下乳から谷間へ手を潜り込ませながら、円を描く動きで丁寧に愛撫していく。

「……指揮官、どう？」

「どう、っていうのは」

「姉ちゃんたちと、比べてとか……」

「……それは姉妹であるホーネットの方が知ってるんじゃないか」

「わ、私だって分からないわよお、んっん、そんなこと」

客観的に見て、ヨークタウン三姉妹の中で一番大きいのは長女のヨークタウンだろう。

だが、それでホーネットが見劣りするということはない。

今にもビキニから零れ落ちそうな乳房はぴんと張っており、地球の重力にも負けずその形を保っている。

「俺は……すごく好きだぞ。ホーネットのおっぱい」

そう言うと、指揮官は今までビキニの上から添えていた手を、生地の下へと滑らせる。そのまま乳首付近を指先でそつとなぞった後、下乳から持ち上げるように寄せ合わせて、乳揉みを続行していく。指揮官の手の形がビキニの生地にくっつきりと浮き出していた。

「やつ、指揮官、揉み方がやらしいってば、あん、んんっ」

元気娘から発せられたとは思えないほど、ホーネットの声には艶が混じっていた。

指揮官の指にも徐々に力が籠もっていく。彼女が痛がらないよう注意を払いながらも、指の第一、第二関節を踊らせて乳肉へと沈み込

ませる。丹念に刺激を与えた成果か、強く握ってもホーネットから拒絶の意思はみられない。

すかさず、指揮官は手探りで乳輪と思われる部位に狙いを付け、人差し指と親指でつまむようにして擦り合わせながら、ぷっくりとした突起に迫っていく。

「ひっ、あっあっあ、そんな先っぽばっかコリコリ弄っちゃ、んん」
執拗な乳首弄りに力が抜けたのか、肩に顎を乗せるようにして、ホーネットが指揮官へとしな垂れがかった。金色の髪が顔へとかかると、柑橘系の果物に似た瑞々しい香りが指揮官を覆う。

(いい匂いだ)

思わず鼻を寄せたくなるホーネットの香りだった。

「はあ、はあ……好き放題やってくれたわね指揮官」

匂いに気を取られているうちに、ホーネットは指揮官の腰へと手を伸ばしていた。

カチャカチャとベルトの金属音が聞こえる。既に脱がしにかかっているようだ。

指揮官は構わず、ホーネットの双丘の柔らかさを賞味し続ける。身体を寄せられたせいで揉みづらくなっていたが、その分指で鷲掴みにする贅沢な味わい方で、ひたすらにビキニの形を歪ませている。

「もう、おっぱい好きなのは分かったから、ちよつとだけ腰上げてくれない？」

「ん、脱がしにくかったか」

「だって、その……おつきくなってるんだもん」

ズボンの上からでもはつきり認識できる膨らみに、そつと指を当ててみるホーネット。

「うわっ、す……ズボン越しなのに固い感触が伝わってくる」

張られたテントを山なりになぞると、頂上をぐりぐりと弄る。

図らずも亀頭を責められた指揮官は「わ、わかった。ちゃんと脱ぐから」と堪らず要求に応じた。

——ぼろん。

実際にそういう音が鳴るわけではないが、肉棒が露出する瞬間を表

すのにこれ以上の確な擬音はないだろう。とにかく指揮官のいきり立った息子は、狭く息苦しい場所からの解放に震えていた。

「こんなびんびんにして……そんなに揉んでて気持ち良かったの？」

私の……おっぱい」

「う、うむ」

「そ、そう……じゃなくて、おっぱい馬鹿な指揮官にちよつとサービスしてあげよつか」

「サービス？」

疑問符を抱いた次の瞬間、何か指揮官の顔へぱさりと被せられた。突然視界を塞がれた指揮官は抗議の声を上げようとしたが、鼻腔をくすぐる匂いに覚えがあることに気付いた。

(さつき嗅いだホーネットの髪の毛の香りだ)

顔一面に広がる柑橘系の香り。真つ黒な空間に充満したそれを浴びて、全身が一気に弛緩していく。

彼女が身に着けていたものの中で、これほど強い香りを放ちかつ視界を塞げるのは一つしかない。

被せられたのは、ホーネットのトレードマークとも言えるテンガロンハットだった。

「見られるのはちよつと恥ずかしいから、終わるまで取っちゃダメだからね」

快活さにやや恥じらいのトーンが混じった声でそう言うと、彼女の気配が徐々に下へと降りていった。そのまま指揮官の股の間へと収まると、反り立った肉棒をまじまじと見つめる。

「これ、ちゃんと収まるのかな……ううん、私だって大きい方だし、多分いけるっしょ」

ぶつぶつと何やら独り言が聞こえた後、んしょ、という掛け声と同時に、ずぶぶぶつ、と何かに挿入した感触が指揮官を襲う。逸物を緩く包み込む肉感が伝達され、指揮官はびくりと痙攣した。

それはあたかも餅に覆われたかのようで、亀頭から竿に至るまで優しく抱擁しながらも、隙間なく吸い付いて離そうとしない。またもや指揮官は、どこかで似た感覚を味わったデジャヴを覚えていた。それ

もつい先程まで、その手で弄んでいたあの柔らかな触り心地に近い感覚。

「……なあ、ホーネット。ひよっとして今——」

疑問に対する返答はなく、代わりと言わんばかりにたぽんと一往復、肉棒が挟まれたまま扱かれた。そのまま、一回一回を噛みしめるような速度で、柔らかな肉感が上下に動き出す。明らかに手や口がもたらす刺激ではない。何をされているかは明白だった。

(パイズリ、知ってたんだな……)

普段のホーネットの姿を知っている指揮官は、こういった男性器を喜ばせる行為とはおよそ無縁の存在だと思いついでいた。しかし一体誰の入れ知恵か、彼女は現にその際立った乳房で熱く滾った肉棒を捏ね上げている。テンガロンハットに遮られ、その映像が見られないことが惜しくてたまらない。

「どう、指揮官？　ちゃんと気持ち良くなれてる？」

「ああやばいよ……気を抜いたらすぐ果ててしまいそうだ」

「そんなに？　そっか、えへへっ……」

テンガロンハットで隠してる以上、ホーネットの方からも指揮官の顔を伺うことはできない。

だが谷間の中でしきりに震える肉棒と、指揮官の素直な返答に相手を崩し、徐々に扱く胸使いにも力が増していく。乳圧が強くなるにつれて、尿道を精液が駆け上り、乳内射精の準備を整え始める。

「ホーネット、どうしてもこれ取っちゃダメなのか？」

「これというのは当然、テンガロンハットを指している。」

「だ、ダメよ。さつきも言ったけど恥ずかしいって」

「どうせここまでやったなら同じじゃないか。それに、俺はホーネットがしてるところをちゃんと見ていきたいんだ……」

「おねだりしてもダメ！　あんまりしつこいと止めちゃうよ？」

「そ、そんな殺生な」

この幸福な時間を取り上げるとまで言われては、指揮官も強く出れない。ただ、明らかに落ち込んだ様子に罪悪感が沸いたのか、ホーネットはこんな提案を持ちかけた。

「じ、じゃあさ、どういう風になっているか私が聞かせてあげて……
それで我慢して？　ね？」

「え、あ、ああ……頼む」

場合によつては見られるより恥ずかしいのではないかと指揮官は考えたが、折角の提案を無下にすることもない。

「んしょ……今ね、指揮官のお、おちんちんをおっぱいで挟んでるわ。えっと、ビキニは着たまま。最初は固定した方がやりやすいってロイヤルの……ってタンマ！　今の聞かなかったことして！」

どうやらロイヤルの誰かしらがホーネットに吹き込んだようだ。それもビキニを着たままの着衣ズリを提案するあたりが抜け目ない。いくつかの顔が浮かんだ指揮官だが、揺れ動く双乳の快樂の前に霞みとなって消えた。

「ビキニの下からずっぷり飲み込まれて、私の胸の間でとつても熱く
なってるよ……なんか、こっちまで変な気分になりそう。おっぱいを
押し付けるたびにびくびく反応して、先っちょからねばねばした液が
漏れて……男の人が気持ち良くなると出るんだったかな。それが
胸の中にだんだん溜まってき……ほら、聞こえる？　ずちゅずちゅ、
にちやにちやって、いやらしい音立ててるの。私まで顔から火が出そ
うよ……」

想像して、真つ黒の視界に映像を作る。

耳たぶまで赤く染まったホーネットが一生懸命肉棒を挟みこみ、ビ
キニごと乳肉を寄せて抱き抱えながら、上下に出し入れを繰り返して
卑猥な音を響かせている光景を。

——たぶん、たぶん、にちや、ずっぷん。

五感のうち一つでも塞がれると、それを補うために他の感覚が鋭敏
になる話によくあるが、まさしくそれが今働いてるのだ。乳房に吞ま
れるたびに包皮が剥け、露出した亀頭を甘く揉まれる恍惚も、そこか
ら発せられる粘質な音も、ホーネットの徐々に激しくなる息遣いも、
見えないからこそ意識し、感じ取れる。加えて、テンガロンハットか
ら漂うあの香りが、今自身の肉棒を健気に挟んで奉仕しているのは
ホーネットなのだと思感させるのだ。

視覚的興奮がないからこそ、想像を掻き立てるあらゆる要素に目が届き、指揮官は快樂の洪水に溺れる寸前である。

「うっ、あっ、ホーネット、このまま」

放出目の指揮官は手短に嘆願する。

限界が近いことを察したのか、目いっぱい柔乳に圧をかけたまま、激しく上下運動を繰り返すホーネット。半球型の綺麗な曲線がひしゃげて、ビキニに皺が寄るほどの乳圧を受け、いよいよ達する瞬間。「はっ、はっ、いいよ、替えの服ならいくらでもあるから、このままっ、ホーネット様のおっぱいに、指揮官の気が済むまで出しちゃえ、ほら、ほらっ、きやつっ！」

催促されるまま腰を突き出し、脈打つ肉棒に全てを委ねた。間もなくせり上がった精液が蕩ける快感を伴って押し出され、ホーネットの谷間から勢いよく飛び出していく。射精中も甘えたがりの幼子のように、谷間の中へと隠れる肉棒。圧迫刺激に耐えかねて噴き出る白濁汁が黒ビキニを汚し、一瞬白く染めたかと思うとそのまま溶け込んでシミとなった。

指揮官は挾射の反動から背中を反ってしまい、それにつられて首も動いてしまったため、意図せずテングロンハットの目隠しが解かれソファアの下へと落ちていった。

「……あっ」

室内灯の眩しさに目を細める。

そのまま向き直ると、視界には当然精液塗れになったホーネットが収まった。

改めて、自分が出した量の多さに驚く指揮官。一人で処理するときよりも遥かに多い液体が、ホーネットの胸を汚し、谷間に水溜りを形成していた。飛び跳ねた分が髪にまで行ったのか、金色の毛先からどろりとした白濁汁が垂れ落ちている。

大きく喉を鳴らして唾を飲み込む。目の前のあまりに扇情的な光景は再び欲情を呼び起こし、肉棒が瞬時に硬さを取り戻していった。

「……見ちゃダメって言ったのに」

「すまん事故だ、諦めてくれ。それより、もう一回頼めないか。今の

「ホーネットを見て、堪らなくなってしまった」

「ええっ!? そ、そんなにすぐ回復するものなの？」

「今日は何か、いくらでも出せる気分なんだ……出来たら生のおっぱいを見せて欲しい」

「ほ、ほんとに節操無しなんだから……後で私にくれる分も、その、残してくれるならいいわよ」

肉棒を谷間に迎えたまま、ホーネットは黒ビキニの結び目を解いて生乳を露にした。

今まで隠されていた乳輪はほんのり桜色で、乳首は興奮を示すかのように固く立っている。

「じゃ、続けるからね」

ビキニという拘束から開放された影響なのか。

より大振りになった乳房の扱きは、先程放出された精液の助けにより、実に滑らかでリズム良く肉棒を刺激する。

互い違いに擦り合わせるたびに、左右の乳首の位置が上に下に入れ替わり、紋様を描いてるかのようであった。

射精直後で敏感な影響もあつてか、乳肌がずり動くだけで背筋に電流が走り、声が漏れてしまいそうになる。

「指揮官のこれ、さつきよりも大きくなってない？ んしよ……こんなにいっぱいフェチだったなんて」

「否定はしないが、何より興奮するのは、ホーネットがこないやらしい行為に没入してるからだぞ」

「ひ、人を変態みたいに言わないでよ」

——ぎゅむうううう。

押し潰すほどの勢いで乳圧をかけ、抗議の意を示される。指揮官は耐えられず情けない声を漏らした。

「余計な事が言えなくなるくらい、悶えさせちゃうんだから」

そこからのホーネットは、文字通り容赦の無いパイズリ責めを繰り返してきてきた。

小刻みに震わせたかと思えば、苛烈に乳房を上下に動かしたり、扱く速度にも緩急を付けて、乳肉がカリ首にまで吸い付き密接した摩擦

刺激を与えるよう工夫を凝らす。一度目の狭射で快感のツボを把握されてしまったのか、二度目の乳内射精に早くも追い込まれていた。

「う、あぁっ、さつきよりも、気持ちいい」

腰が砕けるぐらいに陶醉する快感が、下半身を支配していく。

無意識のうちに膝が外の方へと向いていき、大腿を開いていた。

密閉された乳壺の中で、射精欲に疼く尿道が精液の充填を告げている。

睾丸はすっかり萎んでおり、生産した全てを送り込んだことを証明していた。

「また出ちゃうんだ。今度はどこにも飛んでいかないように、ぎゅって抑えるから。ほら、出していいよ、二回目もおっぱいにたくさん注いで、ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅうう〜」

止めの三段搾りに合わせて、乳肉の密閉度が上がっていった。

肉棒全体を逃さず詰めていく乳房の柔らかさに負け、鈴口から漏れ出すように乳内射精が始まった。

一度目のような飛び散る派手さは無くても、精液が止めどなく溢れて乳内を満たしていく。

指揮官は腰を揺らして、一滴でも多く注ぎ込もうと必死だ。

「ひゅー……さつきよりも多く出ちゃってる。おっぱいの中、ぐちよぐちよにされちゃったわ……♡」

長い射精が終わると、絶頂の余韻に浸りながらも乳房から逸物を引き抜いた。粘り気のある液体がアーチとなって、胸と肉棒を繋いでいる。

ホーネットはその光景を漫然と眺めていた。二回分の挟射で溜まった精液の影響か、普段より乳房がずっしりと重い。

「ねえ、指揮官」

神妙な口調でホーネットが問う。

「もし今日ここにいたのが姉ちゃん達でも、こんな風にしたのかな……」

「……おいおい、賢者に至るにはまだ早いんじゃないか」

「ち、茶化さないで答えてよ」

「悪い悪い、そうだなあ……」

ホーネットの肩にそつと手を添える。指揮官は優しく、ソファアの上へと彼女を押し倒した。

「そもそもホーネットとじゃなきや二人きりになってない訳だし、俺が欲しいのもホーネットだけというのが答えになるかな」

自分でも恥ずかしいのか、最後に指揮官は目を逸らした。

しかし肉棒は正直で、待ち受ける本番をも余裕でこなせそうなほど再勃起している。

「うん、ありがとう指揮官。優しくしてね……」

不意の言葉にまたしても理性が外れた指揮官。

後に明石が証言するには、一晩中獣のような唸り声が止まらなかったそうなの。

ドスケベレースクイーン・翔鶴と瑞鶴に挟まれ、車の中でたつぷりズリ抜きしてもらおう話

1960年代に活躍し、「無冠の帝王」と呼ばれたイギリス人のレーズドライバーは言った。

——男には下手だと認めたくないことが二つある。自動車の運転と、メイク・ラブだ。

なるほど、当時の「良い男」像が見えるセリフである。

だが、それも現代、とりわけ艦船の取り巻く女所帯ではほとんど意味を持たない。

どんな男であれ、人並外れた力を持つ艦船たちからすれば、ずっと弱い存在なのだ。

つまり、上官という立場の「盾」が薄れるプライベートにおいて、指揮官はただ美味しく頂かれる獲物でしかないのである。

その日の情事は、むせ返るほどの熱気がこもった車の中だった。

「はむ、ちゆるっ、んん……うふふ、身体が震えていますね指揮官。翔鶴が奏でる舌の調べ、気に入ってくれました？」

「ちゅっ、ちゅっ、ん、ちゅっ……指揮官、翔鶴姉の耳舐めが気持ちいいのは分かるけど、こつちにも集中してよね……れう、れろろ……んっ、せっかくのキ、キスなんだから」

やや背もたれを倒した運転席。

そこに座る指揮官へと群がる、二人の女性。

白銀の髪を耳へとかき上げ、後部座席から乗り出して指揮官の耳を責めているのが、姉の翔鶴。

その一方で、栗色の髪が乱れるのも構わず、助手席からぎゅっと抱き着いてキスをせがんでいるのが、妹の瑞鶴。

その名の通り、彼女たちはかの有名な五航戦をメンタルキューブで具現化した姉妹艦だ。

注目すべきはその格好——普段の鶴をイメージした和の装いとはかけ離れた、ほぼ裸同然の、公序良俗に違反しかねない衣装。

男の目を惹いて止まない、レースクイーンの姿である。

胸元からへその辺りにまで大きく開いたスリット——本来はジツパーで閉じる仕様のようだが、二人の胸があまりにも大きいため、一番下まで開きっぱなしになっている。

そこから惜しげもなく晒される大きな胸はH、I、いやJカップ相当だろうか。

下着を付けていないため谷間が丸見えとなっており、一般的なビキニ以上に露出度が高い。

大半の男は、すれ違うだけで思わず視線を釘付けにしてしまうだろう。

また肩が丸出したため、首輪と胸元にかけて二本の紐をクロスでつなぎ、ずり落ちないように支えている。それが、二人の胸の大きさをより強調する形となっていて、非常にあざとい。

下はガーターベルトとストッキングだけであり、布一枚をひよいと持ち上げるだけで、桃よりもボリユーミーですべすべな巨尻が丸見えになってしまう。

ストッキングは翔鶴が白、瑞鶴が濃いベージュと、それぞれの髪色に合わせたものを選んでいた。

「うふふ、どうですか指揮官。仕事終わりに美人姉妹のコンパニオン捕まえてえ……狭い車内でむぎゅつと密着させてえ……独り占めのご奉仕をさせている気分は♡ それも大胆で破廉恥な格好をさせたままなんて……赤城先輩にバレたらどうなることやら」

黒い笑みを浮かべ、心底楽しそうな翔鶴。

あたかも指揮官が無理やり連れ出したように聞こえるが、もちろんそうではない。

発端は彼女が仕事終わりのドライブを指揮官にねだったことにある。

「瑞鶴も一緒、お願いです〜」といかにも媚びた声でしな垂れかかってくる翔鶴に、指揮官はあつさりと屈した。

車内という閉鎖的な空間で、両手に花という男心をくすぐるシチュエーション。

それも、タイアップ企画できわどい衣装を着た艦船たちのせい、股間のムラムラは最高潮。

そんな時に、ドスケベなレースクイーンの姿で思わせぶりの誘いを仕掛けられては、期待しない方が無理があるというものだ。

「翔鶴姉、あんまり脅かしたら指揮官かわいそうだよ……れう、ちゅっ……よしよし、大丈夫。心配しなくても、私が傍にいて守ってあげるから……はあ、ふう……ちゅ……だから今はちゃんと手を握って……んっ、んふう、ちゅ、んちゅ……ついでに『瑞鶴が一番大切だよ』って言ってくれると嬉しい、かな」

「あー、もう瑞鶴ったら……お姉ちゃんを差し置いて、独占欲全開のキスなんてずるーい……。指揮官もすっかりとろけた顔で夢中になって……ダメですよ、『翔鶴も瑞鶴も自分の翼だから、どちらかを選ぶなんて言語道断』なんてくっさあーいセリフを吐いたんですから、翔鶴にも構って頂かないとお……♡」

珍しく積極的な瑞鶴に負けじと、再び指揮官の耳を舐めだす翔鶴。薄ピンクのきれいな舌が、耳の外側をぐるりと撫で回す。

ねっとりして、ほんのり熱を帯びた舌。

ねばっこい唾液を塗りたくるように、ゆつくりと舌を這わせる。

ぞわり、ぞわりと耳を通じて、頭の中に甘い痺れが染み込んでいく。「うわあ、すごっ……指揮官、分かる？　翔鶴姉の舌が耳の外から中に入って、ぐちゅぐちゅうごめいているの……いやらしい音いっぱい立てて吸い付いてるんだよ。唇でも優しくはむはむして……一番気持ちいい力加減、あつという間に把握されて……耳を楽器みたいにされちゃってるよ」

翔鶴の持つテクニク——笛を奏でる絶妙な息遣いに、柔らかな唇のタッチ。

本来なら演奏で発揮される技術を、耳をねぶるためだけに使われている。

今の指揮官は、翔鶴の音色で操られる艦載機と同じで、彼女の意の

はまだ。

耳たぶを舌先で転がされ、短く声が漏れる。

今度は耳穴に舌をねじ入れられ執拗に舐め回されると、悲鳴に近い喘ぎ声をあげる。

大人の男性で、しかも上司という立場なのに、情けない声で鳴くワンちゃんになってしまう。

「れるれるれる、ずっ。ぶぶぶれるくちゅずずっ……うふふ、お耳が真っ赤ですね。それに指揮官のズボン、すっかり盛り上がってます。そんなにムラムラ、しちゃいましたか？　そうですねえ、優越感すごいですよええ。昼間はあんな大勢の人に囲まれて、お尻や胸をいっぱい強調したポーズで写真を撮られましたけど……あの人たちはその写真で妄想するのが精一杯♪　コンパニオンのやらしくい服を着せたまま車で連れ出してえ……こんな人っ子一人いない河川敷に車を停めてえ……えっちなことし放題なのは指揮官だけです♡」

「あつ、指揮官のが大きくなって……ズボン越しても分かるくらい、私の太もも押し上げちゃってる。翔鶴姉の煽りですますます興奮しちゃったんだね……」

二人の言うとおり、指揮官の股間は既にテントを張っている。

こんもりと盛り上がって窮屈そうだ。

その必死な勃起は、「瑞鶴のむちむち柔らかい太ももを直に感じた」と訴えてるように見える。

「これ、こすられると気持ちいいのかな……すりすり……う、うわわ、もつと硬くなっちゃったよ翔鶴姉」

「あらあら……指揮官、とても辛そうですね。瑞鶴の太ももすりすり、そんなに嬉しいのかしら」

いつの間にか助手席から完全に離れ、指揮官の上に覆いかぶさるように抱き着いた瑞鶴。

山なりになった股間を太ももで潰すように撫でてくる。

弾力のある太ももの肉とズボンの生地がこすれるたび、指揮官はやや上ずった、それでいて苦しそうなうめき声を漏らす。

時折、ストツキングのこすれる音がして、それがまた興奮を助長す

る。

「うふふ、ビクビク反応して……瑞鶴のやらしい太ももコキ耐えられない、早くお外に出て気持ちよくしてもらいたい、でもここから出してもらえないくって、おちんちんがイライラして困っちゃってますね」
♪

翔鶴はよこしまな笑みを浮かべ、敏感になった指揮官の耳に「ふーっ♡」と優しく息を吹きかけて、

「そ・れ・な・ら、この翔鶴に溺れてみませんか？ 指揮官のされたいえつちなこと、全部お姉ちゃんが叶えてあげますよ……もちろん、もつと苛めて焦らして欲しい、なんてことでも♡」

と囁いた。

「しよ、翔鶴姉、今は私の番なんだってば！ うう……私だって、指揮官のして欲しいことなら何だってやるよ。今日だって恥ずかしいの我慢していっぱいポーズ取ったんだし……そりゃ、もつとカッコいいのとか、運転してるところとかも撮って欲しかったけど……」

「はい、妹がグチグチ悩んでいるうちに『せてひっしょー』♡」
「え、う、うわっ」

翔鶴は急に運転席下のレバーを引いて、限界まで背もたれを倒した。

支えを失った指揮官が、自分に乗っかっている瑞鶴を抱えたまま、後ろに倒れ込んでしまう。

突然の出来事に瑞鶴が驚いているうちに、翔鶴は指揮官の空いた唇を独占しにかかっていた。

「うふふ、捕まえた♡ んっ、ちゅば、れるれる、ちゅるる、ちゅっちゅうう……」

「え、あつ、あーっ！ 翔鶴姉、そんなあ……」

瑞鶴が顔を上げた時には既に遅く、濃密な口づけが始まっていた。その舌技は、瑞鶴のものとはひと味もふた味も違う。

さきほどまでの瑞鶴のキスは、いわば手探り感の強いウブなもの。軽く合わせるソフトキスに、互いの唇へと吸い付くバードキス。

もちろんそれも心地いい。双方の気持ちが少しずつ高まって、繋

がっていく。

そんな温かい快感がある。

しかし翔鶴のキスは、その程度の繋がりでは生ぬるいと言わんばかりに苛烈であった。

指揮官の耳を手玉に取ったときと同じかそれ以上に、舌を器用に使って彼の口内を犯していく。

「れう、じゆるじゆる、じゆるるるっ、れろれろ……ぢゅうううううう」戸惑う指揮官の舌を捕まえて自分の舌で包み込んだ後、じゆるじゆると吸い上げる。

あるいは、頬の粘膜へと舌を伸ばして隈なく愛撫する。

そうして口の中を隅々までほじくり、翔鶴の色へと染めていく。

指揮官はその絶技にすっかり魅了され、自分から舌を差し出して唾液を交換し合うディーブなキスに夢中になっていた。

（むむむう……そりゃあ、翔鶴姉のほうがこの服を着こなしてるし、女子力も高いし、そういう官能的？ な雰囲気も出せるのも分かってるけど……せつかく私の方がいい雰囲気になってたのにく。こ、こうなったら指揮官の好きなアレをやるしかないよね。覚悟を決めるのよ瑞鶴、行動派の意地を見せてやるんだから！）

瑞鶴は一瞬、姉の醸し出す官能のオーラに吞まれそうになるも、気を取り直してすると指揮官の下半身へと流れていった。

——むにゆり。

翔鶴とのキスに心を奪われたままでも、指揮官にはその感触がはつきりと伝わった。

凹凸がしつかり嵌まったブロック塀のように、勃起して膨らんだズボンがすっぽり柔らかいナニかに収まっている。

先程まで恋焦がれていた太ももの柔らかさ、とはまた違う。

あれはぴつちりと筋肉が詰まっていながら、女性特有の肌の滑らかさで押し付けられる点に快感がある。今回はもっとおおらかで、全体を包み込んであやされる感覚だった。

「へへ、さ、さつきとの違いが分かっちゃったかな？ 多分指揮官が想像している通りのものだよ。ほら、ずりずり、ずりずり、ずりずり♡」

「れうちゅう、れるれるる……ぷはっ、まあ瑞鶴ったら。お仕事の余韻で少し大胆になってるのかしら」

ぐにゆりと形を変える豊満な二つの感触。

考えるまでもなく、たわわに実った瑞鶴の胸だ。

そして彼女が着ているのは、へそまでスリットが開いた破廉恥なレースクイン衣装。

ブラを着用してないため、ほとんど生の状態でズボンの上からこすられている。

「うわあ……♡ 太もものときよりもガッチガチになってる。やつぱりこれ、好きなんだ？」

「ふうん、嬉しそうに頬を緩めちゃって。指揮官の今のだらしない顔、写真に撮っておきたいくらいです。もちろん観賞用と一航戦の先輩を煽る用に分けてですけど♡」

翔鶴の不穏な発言はともかく、指揮官がこれ以上になく力の抜けた表情に仕上がってるのは事実だった。服越しても分かる柔乳の気持ちよさに理性を融かされている。それこそだらけきって、ズボンのベルトが緩んでしまうほどにだ。

「せっかくだし、瑞鶴がおズボン脱がしてあげたら？ これ以上ズボンの中でおちんちん硬くしたら、折れちゃうかもしれないわ」

「さ、さすがにそれはないと思うけど……うん、そろそろズボンは脱がしてあげないと辛いよね。指揮官、ちよつと腰上げてもらえる？」

運転席の角度も上手く使い、指揮官のお尻の下に手を通した瑞鶴。

そのままするとズボンを脱がすと、限界まで膨れ上がったボクサーパンツが現れた。

少しの間、その迫力に思わず言葉を失う瑞鶴。

それとは対照的に「あらあら……」と目を光らせ、上唇を舐める翔鶴。

車内に満ちた熱気がむわつと強くなった。

「あ、す……♡ こんなパンパンになるくらい、おつきいんだ……」

瑞鶴はおずおずと手を伸ばし、親指と人差し指で摘まむようにして

パンツの屹立に触れる。

興奮で脈打つイチモツは布越しでも分かるほど熱を帯びており、瑞鶴の指が優しく撫でるだけで暴発してしまいそうなくらい、いきり立っていた。

「下着越しでも気持ちいいのかな？　って、そうだよ。ズボンの上からでも反応していたんだから、パンツ一枚だともっと気持ちいいのは当たり前か♡」

既に臨戦態勢に入った肉棒が、瑞鶴の手のひらに覆われた。

とぐろを巻いた蛇のようにじっと動かないまま、解放の時を今か今かと待ち構える。

しかし瑞鶴は、ボクサーパンツ特有の肌触りと竿の熱が混じり合った独特の感覚に夢中になっていた。

パンツのもっこりを五指でなぞり、手のひら全体で浮かび上がった竿をゆっくりしごいていく。翔鶴の耳舐めやキスで身体が昂っていたこともあって、すでに先走り汁がじんわりとにじみ出ている。

ボクサーパンツのナイロン素材に汁が染み出したため、翔鶴にも指揮官の興奮がバレてしまう。

「まあ、指揮官ったら。もうパンツをぐっしよりにして……よほど気持ちいいんですね」

「もう脱がしてほしい？　ごめん指揮官、なんか癖になっちゃって……もうちよっとだけ、もうちよっとだけ」

「それなら瑞鶴、パンツの中に手を入れてあげたらどうかしら。指揮官は焦らされるのがお好きなようだし、うふふ」

「そ、そっか。そのほうがずっと気持ちいいもんね。さすが翔鶴姉」
股関節の三角状のくぼみから手を潜らせ、肉棒の根本へと触れる。

そのまま人差し指から薬指までの三本を付け根に這わせながら、親指をパンツの外にはみ出したままにしている。

「残った親指で、タマタマをぐりぐり……わあ、すごい触り心地。ぷにぷにだけど芯は固いし、パンツのすべすべで滑らかだし……なんか、ずっと弄りたくなっちゃうな♡」

「あらあら、瑞鶴ったらすっかり乗り気になっちゃって。これは後が

大変ですね、指揮官♡」

翔鶴の言うとおおり、瑞鶴は最初の恥ずかしぶりが嘘のように積極的になっていく。

『祭華の鶴』——お祭り衣装のときに一瞬だけ見せた、舌をぺろりと出した勝気な表情。

それはまるで「年下の男の子にちよつかいをかける近所のお姉ちゃん」のようで、指揮官は思わずどきりとした記憶がある。

今の瑞鶴の表情は、まさにそれだ。

恥じらうどころか、獲物を前に舌なめずりをする様は肉食獣そのものである。

「今度は両手ぜんぶをパンツに潜らせて、揉み揉み……はあ、すごいおっきい……♡ ちよつと舐めてみようかな……あむ、ちよつ」

瑞鶴は、パンツの膨らみに口づけをした。

潜らせた手を竿の根本に這わせたまま、うるおいのある唇で何度もパンツの上からついばむ。

予想外の刺激に高い声をあげてしまう指揮官。その反応を気に入ったのか、瑞鶴は舌も使つて湿りを加えながらパンツへのバードキスを続行する。

「ちよつ、ちよつ……どんどん新しい汗が出てくる。れろれろれろ……きもちいいんだ、これ……♡」

舌の動きを変えるたびに、上目遣いで反応をうかがってくる瑞鶴。我慢汁による染みを上書きするようにパンツへキスを重ねていく。

「ここまで大胆になるなんて、お姉ちゃんもびつくりですけど……指揮官？ 瑞鶴ばかりに気を取られてはいけませんよ。ほら、油断したお口に甘々べろちよー攻撃♡ はあむ、ぢゆるるるう〜」

妹の奮闘に刺激を受けたのか、翔鶴も指揮官へのキス攻めを再開する。

さきほどよりもわざとらしく音を立てて、口の中だけでなく、これを聞いた耳まで支配してしまおうという算段らしい。事実、それは指揮官の被虐心を大いにくすぐった。

キスをしたまま、翔鶴の細い白指が髭の剃り跡が目立つあごを撫でる。

フェザータッチのこそばゆさに悶える指揮官。そのまま輪郭をそつと撫でていき、最後は両頬へと行きついた。すると、

「ぶぶぶぢゅつつ〜ぢゅつつ〜、ぢゅぶぶぢゅる〜…んっ…れるれるれる、じゅぱっじゅぱっ、ぶじゅるるるっ」

ほっぺたを翔鶴の両手に押さえられ、快樂の逃げ場を封じられる。

口内へと際限なく注がれる甘美な刺激に、意識をドロドロにされていく。

そうして頭の中が気持ちよさだけでいっぱいになると、ますます下半身のじれったい責めが効き目を増してくる。

溜めに溜め込んだ欲求を、早く出してしまいたい。今ある気持ちいい感情を全部精液に溶け込ませて、放出したい。そうしなければ狂ってしまう——指揮官は必死に身体を震わせて懇願した。

「ちろちろちろちろ、ちゅっ、ちゅっ…もう、限界なのかな。さっきからパンツの中でおちんちん、ビクンビクンって跳ねたがってるし。それじゃあ指揮官、このままパンツの中に出す？」

瑞鶴の言葉に、指揮官は激しく唸り声を上げた。

本当はしっかりと拒絶の言葉を告げたが、翔鶴のキスで口を塞がれてるため叶わない。

ここまで焦らされて、パンツの中にお漏らしするという惨めな射精は嫌だった。

「ふーん、つまり…ちゅっ…出したいところがあるんだ。どこなのかな？ 一番最初に興奮してたのは太ももだから、膝裏でぎゅつと挟まれて出したいのかな」

想像する。

瑞鶴のパンパンに筋肉が詰まったむちむちの太もも。

昼間の展示会での撮影のときから目が離せなかった。

瑞鶴にそのときと同じ寝姿のポーズを取らせ、少しでも太ももの間を空けてもらう。

そこに肉棒を差し込んで、むぎゆむぎゆと挟まれたらどんなに気持ち

ちいいだろう。

後部座席を使えば、瑞鶴の膝裏に挟まれたまま、尻を撫で回すことだってできる。

太ももサンドを味わいながら胸を揉みしだき、キスの続きをしてもいい。

最後には足を組んで太ももを閉じてもらい、ビンビンにたぎった肉竿をきつく締められるのだ。

その状態で闇雲に腰を振って精子を吐き出す——そのイメージだけで達してしまいそうなほど官能的である。

「それとも、このままお口に入れたいのかな。私のお口、すっかり熱くなってるから……指揮官のこれ、啜えただけで溶けちゃうかも」

再び想像する。

瑞鶴のしつとりした唇に、熱を帯びた舌。

ぱっくりと根本まで啜えられ、熱々の口腔粘膜に肉棒全体を包まれたら、きつと耐え切れずに白濁を漏らしてしまうに違いない。

少しせつかな瑞鶴のことだから、最中には車の外に聞こえてしまいうぐらい大きな音を立て、早く射精させようと夢中で舐めしやぶってくれることだろう。

サイドテールを激しく揺らしながらも、両手を恋人のように絡め、ぎゅつと握りしめたままフェラチオをしてくれる——妄想だけでパンツが弾け飛んでしまいそうな威力である。

「あつ、もつと大きくなった……こんなに準備万端だと、いきなり……いきなり、とかいつちやつてもいいのかな。一応、私の方もじゅ、準備は万端だし」

みたび想像する。

このドスケベレースクイーン衣装を堪能するのなら、やはり瑞鶴にまたがってもらうのが良いだろう。

ガーターベルトを着けたまま、下着だけをずらしてずっぷりと挿入。

衣装の構造上、股間の布がちょうど暖簾のように覆い被さるため、騎乗位だと結合部がちょうど見えなくなる格好となる。

車ごと揺らす勢いで腰を下ろし、ずぶつ、ぶちゆつと密汗を鳴らし
て交じり合つても、肉竿にがつつく秘裂は隠されたままという、まさ
に見えないエロス。

負けず嫌いで活発な瑞鶴から可愛らしい喘ぎ声が漏れれば、ますま
す肉棒の硬さが増し、もつと声を出させようと欲望のまま突き上げて
しまっただろう。

あるいは、その勝気な態度を崩さぬまま、乱暴に腰を下ろされて屈
服の射精を決めてもいい。

瑞鶴はとことん役割を求めて自分を追い込むタイプなので、お願い
すればDSに成りきってくれるはずである。

車内の醍醐味ともいえるカーセックス——いよいよ指揮官の妄想
も極まり、ボクサーパンツが伸びてしまっぐらいに勃起が際立ってい
く。

だが、これらの妄想も結局は本命の前座に過ぎなかつたと指揮官は
思い知らされる。

——にゅむう、すりすりすり。

その感触を味わった瞬間、今まで一番大きく逸物が跳ねた。

瑞鶴がパンツの中に手を入れ、内側から肉棒を掴むと、そのままふ
くよかな胸へと寄せてこすり当てたのだ。

乳の重みを乗せるように押し付けられ、そのまま谷間のくぼみへむ
にゅりと招かれる。

ズボンのときよりもはつきりと知覚できる、瑞鶴の胸の柔らかさ。
もっこりした膨らみごと挟みこまれてしまう大きさ。

その全てが、性欲にまみれた思考をより狂わせていく。

「あー、やっぱりこれかあ……♡ 本当に好きだね指揮官。そっかあ、
太ももよりも、お口よりも、セックスよりも……おっぱいがいいん
だあ♡」

——にゅつ、にゅりにゅりにゅり、にゅむむつ。

パンツのこすれる音がするたびに、股間の膨らみが乳肉へと当た
り、ぶるぶると乳を弾ませる。

心臓の鼓動が激しすぎて、胸が苦しい。

指揮官は今までにない興奮で、頭がどうにかなりそうだった。

「ぢゅっつっく……っは、やっぱり指揮官はおっぱいを選んじゃうんですね♡ 瑞鶴の次はわ・た・し・も挟んであげましょうか？ 大きさは私の方が上ですから、指揮官の大きなおちんちんも見えなくなっちゃうかも♡」

唇から離れた翔鶴が、とどめと言わんばかりに淫らな囁きをした。今味わっている瑞鶴よりも更に大きい、などと言われては、先走りがあふれるのを止められるはずもない。指揮官のパンツは瑞鶴の唾液と我慢汁で染みだらけになっており、鼻を突く淫臭にまみれていた。

「もう、その切ない表情は何かな、指揮官♡ 可愛くなっちゃって……大丈夫、もう焦らしたりしないから。言っただしよ、指揮官のして欲しいことなら何だとしてあげるって。だから、私に命令して♡ いつも指揮してるみたいに、ね♡」

我慢の糸が、完全に切れた。

指揮官はもう細かいことを考える余裕もなく、がむしやらに履いていたパンツをおろす。

猛々しく上を向く肉棒は汁で濡れそぼっており、それを瑞鶴の胸の上にぺちんと乗せてただ一言、「挿乳いれされて」と呟いた。

「りょーかい♡」

——ずぶつ、ずぶぶつ、にゅぶぶつ。

瑞鶴が両手で圧をかけることで、ぴったりと閉じられた谷間。

いくなれば、レースクイーン衣装で着飾った乳ホール。

そのいやらしい淫肉の境目にいま、指揮官の強直が水音とともに差し込まれていく。

車内の熱気に加え、行為に盛り上がって体温が上がったためか、瑞鶴の谷間もしつとりと汗ばんで蒸れている。

そこに肉棒のぬめりも加わって、予想よりもなめらかに乳内へと入った。

背もたれが倒れ、すっかりベッドと化した運転席。

そこに寝そべる指揮官と、マットに膝立ちで座ったまま乳肉を抱える瑞鶴。

やや変則的ではあるが、立派な膝立ちパイズリである。

「うふふ、下唇を必死に噛んで我慢してますね指揮官。おっぱいに入っただけで出ちやいそうだったんですか？　すぐに出したらもつたいたないから我慢した？　およよ、残念です。暴発したらすぐお姉ちゃんの番になったのに♡」

「そ、それが狙いで焦らすように勧めたの!？」

「だってえ、さつきから瑞鶴ばかりあそこを独占してずるいもの。それに指揮官も早く、翔鶴の胸に溺れたいですよね♡　ねっ♡」

「むむむ、さすが翔鶴姉。油断も隙も無い……あ、ごめん指揮官。動かさないままだと辛いよね？」

むしろ助かったと指揮官は思った。

あのまま間髪入れず動かされたら、たちまちのうちに濃いタンパク質をぶちまけていただろう。

せっかく念願叶って挟まれてるのだから、少しでも長く味わっていたい。

しかし、五航戦の鶴姉妹は手心を加えるつもりがないようだ。

「私に気を遣って我慢しなくても大丈夫よ。だって……ここからは指揮官の好きなものだけ、どこでも出していいんだから♡　はやくいつちやったならその分、たくさん出せばいいんだよ♡」

「それなら、回転を早めるためにもお姉ちゃんから潤滑油のサービスです♡　はい、とろとろとろとろ♡」

どこから取り出したのか、翔鶴は肉球のアイコンが目立つボトルのふたを開け、中に入っていた粘質の液体を瑞鶴の谷間へと注いだ。

乳肉の境目から、にちやにちやとねばっこの音が聞こえてくる。

汗と、我慢汁と、潤滑油のローション。

三つの液が混ざった淫液により、精液を搾り取る乳壺が出来上がってしまう。

これを動かされたらどうなってしまうのか。

膨らむ期待と少しの不安からぴくりと肉棒が震えたのを、瑞鶴は胸で感じ取ったのだろう。

気が付けばまたあの顔——舌をぺろりと出した挑発的な表情で指揮官を見ていた。

「それじゃ、いざ尋常に——なんてね♡」

——たばあん。

たったの一往復。上下に扱かれただけで、指揮官は喘ぎ声を抑えられなかった。

バキバキに脈打つほど固くなった肉棒を余すことなく捕まえ、みっちり包んで離さない乳肉。

十分に濡れた乳肌が吸い付いて、根本から先端まで愛撫される。

そして規則的に乳が弾むたび、中の潤滑液がねばついて水音が絶えることはない。

——ぐりゆぶ、しゅぶしゅぶ、ずぶずぶつ、ばんばんばん。

骨盤にぶつかる音が生々しい。騎乗位で腰をぶつけられるよりもソフトなはずなのに、乳の質量が大きすぎるからか、激しい音が車内に鳴り響いてる。

それだけ苛烈に動かされても、乳房の柔らかさによって甘やかされてる気分になってしまう。

指揮官は少しだけ、胸に孕んでほしいと思う気持ち理解了きた。

母性は原初のエロスならば、大きな胸はまさに母性の象徴。

そこに己の分身を挟まれる快感は、抱きしめられて甘やかされる幸福感に通じるものがある。

いや、むしろその両方を兼ねているからこそ、病みつきになってしまふのだ。

「はあっ……すっごく熱い……♡　　どうか、指揮官……んっ……ちやんと気持ちよくなれてる？」

返事はできなかった。

完全に瑞鶴の胸に分身を委ね、深い谷間のむっちりしごきに酔いしれている。

その様子に手ごたえを感じたのか、上機嫌になった瑞鶴はパイズリ

の動きを変えてみることにした。

リズムカルな上下の動きから、互い違いに乳をこすり合わせるように扱いて、刺激を変化させる。

竿肌を片方ずつ柔乳で撫でられ、我慢汁がだだもれになっってしまう。

「こういうパイズリも好き、なのかな♡ はっ、はっ、だんだんコツが分かってきた気がする」

胸を揉み動かし、亀頭を重点的に圧迫されると、指揮官は一段と大きな声で喘ぎ出した。

上官としての威厳を持たせるため、意識して低くしている執務中とはかけ離れた高い声が漏れる。

ただ寝そべってるのですら辛く思えるほどの快感に、身を焼かれていく。

瑞鶴はそれでもパイズリの手を緩めない。

特徴的な構造をしたレースクイーン衣装は、首からぶら下げたひもが切れさえしなければ着衣を保てるというメリットがある。それゆえ、瑞鶴は服にしわが寄るほど両側から乳に圧をかけたまま、パイズリをスムーズに続けることができるのだ。

「あらあら、指揮官はそういう挟み方に弱いんですね。安心してください指揮官、翔鶴お姉ちゃんのとくも、ばっちり再現してあげますので……♡ それにしても、ただ待ってるだけというのも寂しいですね。ちよつといたずらしちやおうかしら。瑞鶴、少しか指揮官を起こすわね」

しばらく静観していた翔鶴が、意地悪な笑みを浮かべて指揮官を抱き起した。

腕力のあまり、翔鶴を背もたれにして倒れ込む指揮官。それが軽率だったと気づくまで、そう時間は要らなかった。

「ふふふ、いらっしやい♡ 翔鶴も精いっぱい努めさせていただきませぬ、指揮官へのお・も・て・な・し♡」

彼女の白指がそつと腰に巻き付き、大きく円を描くように腹部を撫で始めた。

そのまま胸へと這い上がりながら、ぷち、ぷち、とひとつずつYシャツのボタンを外していく。

シャツが完全にはできると、すかさずインナーをめくりあげ、指揮官のほどよく締まった肉体を外気にさらす。

「指揮を執る立場にあつても鍛錬を怠らない姿勢、素敵です。それでは、この翔鶴が指揮官の頑張りを労って差し上げますね。こうして、さすさす、すりすり♡」

まるで豎琴を奏でるように、翔鶴は指揮官の胸の上で指を滑らせる。

乳輪のまわりをゆっくりさすられ、ピクリと身体が跳ねると、それに連動して下半身を突き上げてしまう。そうなれば、瑞鶴の乳房を能動的に味わう形となり、ますますパイズリが気持ちよくなる。

もちろんわざと狙っているのだろう。翔鶴は指先をくるくると回して快感の疼きを胸に溜め込ませ、頃合いを見て乳首をぴんと弾いた。

喉奥から絞り出すような声を上げて、指揮官の背が反り返る。

同時に肉棒を深く乳穴に挿入したため、乳圧による締めまりを一層強く感じる格好となった。

「あつ、もう、そんなに突き上げたらおっぱいから外れちゃうでしょ♡
こうなったら暴れてもいいように、もつときつくパイズリしてあげようじゃないか♡ それ、うりうり♡」

「そーれ、かりかり♡ かりかり♡ うふふ、お口半開きでよだれが垂れてますよ指揮官♡ そんなに気に入ってもらえたなんて、お姉ちゃん嬉しいです♡」

爪先を小刻みに往復して、甘い痺れを与えてくる翔鶴。

豊満な胸をびたつと合わせて圧をかけ、淫靡な音を鳴らして何度も打ち付けてくる瑞鶴。

上と下の両方を犯されている状況の中、どちらがどう気持ちいいのかも曖昧になっていく。

それまでの前戯により快楽を受け入れやすい身体に仕上げてから、五航戦のコンビネーションで絶頂へと追いやる様は、ある意味「漸減

作戦」と言えなくもない。

指揮官は何度もストツプと叫ぼうとしたが、呂律の回らない口からはただみつともなく喘ぐ声が漏れるばかりで、むしろ快樂を喜んでいのように映る。

「なんだかまるで、指揮官を使って演奏している気分です。耳を舐めたときよりずっと可愛い反応してくれますし♡ うふふ、そんな捨てられた子犬みたいな目をしなくても分かっています。固くなった乳首を摘まんで、コリコリされたいんですね♡」

「なら翔鶴姉、タイミングを合わせるのはどう？ 私の方も一緒にぎゅゅっっておっぱい抱きしめたら、もっと気持ちよくなれるんじゃないかな」

「いい考えよ瑞鶴。指揮官もそれでいいですよね？ ……うん、いいお返事です♡」

返事かどうかも曖昧なあえぎ声を勝手に了承の意として、二人は呼吸を合わせ始めた。

股間にのしかかる胸の重みが、乳首をまさぐる指の動きが、まるで同じ人間が分身してやっているのかと疑うほど、ぴったりの間隔で増していく。

「よーし、それじゃいくよ。ぎゅっ、ぎゅむう、ぎゅうう♡」

「はーい、これでトドメです。コリコリ、きゅっ、はあむ♡」

瑞鶴が前腕を使って思いつきり谷間を絞めるのと、翔鶴が両乳首を摘まんだまま、耳を甘噛みするのは全くの同時であった。

瞬く間に精液が噴き出る。

たくさん我慢した後の射精は、ある意味で絶頂ではない。

どんなに優れたエンジンでも、冷却が足りなければオーバーヒートしてしまう。

だから瑞鶴の乳内におびただし量の白濁を放出するのは、いわば放熱に近い行為。

溜まり過ぎた快樂で壊れてしまう前に、精液という形で外に逃がしているのだ。

「わっ、すごっ♡ こんなに熱いなんて……わわっ、ちゃんとおっぱい

で押さえてるのに、勢いが凄すぎて飛んできちやってる♡」
びゆく、びゆるるるっ、どぴゅっどぴゅっ。

尿道の圧で勢いのついた白濁お漏らしは、瑞鶴がすっかり谷間を窄めて肉棒を包んでいるにも関わらず、その合間をこじ開けて外へと飛び出していく。乳肌をたつぷり白色で染め、レーススカーン衣装にもかかって英字のロゴをにじませていく。しまいには瑞鶴の顔にも飛び、彼女のあごを思いきり打ち付けてしまった。

ある程度勢いが弱まったタイミングを見計らい、瑞鶴はたぶん、たぷんと鈍重な動きで摩擦をかけ、最後の一滴まで谷間に吐き出すのを促す。

翔鶴の方も乳首を引っ張るのをやめ、指の腹を使って優しく撫でまわしている。もちろん、耳への甘噛みを続けたままだ。

「はあ……♡ たった一回で、私のおっぱいが精液まみれになっちゃった♡ それだけパイズリが気持ちよかったということではないのかな？ それともやっぱり、援護してくれた翔鶴姉のおかげかな……」

これだけ胸で搾り取った後だというのにネガティブな面を見せる瑞鶴。

吐精直後で弱り果てた指揮官だったが、なんとかフォローをしようとふるふる震える腕を上げ、サムズアップを作って見せた。ぱあっと明るくなる彼女だったが、

「満足そうな顔をしていますけど、まだ始まったばかりですよ指揮官。ほら、おちんちんだって全然収まっていますし……お待ちかねのお姉ちゃんおっぱい、味わいたいですよね♡」

直後の翔鶴の言葉でピクリと肉棒が震えたのを見て、やっぱり気落ちしてしまうのだった。

「さあ、今度は翔鶴の番ですね。うふふ……」

「おお……翔鶴姉がいつになくやる気になってる。すごいことになっちゃうかもよ指揮官、ごくり」

三人は運転席を戻して、後部座席へと移動した。

今度の体勢はいわゆる膝上パイズリのだが、交代した瑞鶴が自身のひざを指揮官の頭に貸しているため、膝枕をされながらのパイズリという変則的な体位となっている。

「さきほどは思いつきり攻めてしまいましたから、少し趣向を変えてみようと思うんです。たくさんバリエーションがある方が、指揮官も退屈しないでしょう？」

銀髪を耳にかき上げ、熱のこもった視線で見下ろしてくる翔鶴。

ひとつひとつの仕草が妙に男心をざわつかせ、落ち着きを無くさせる。

そんな蠱惑的な魅力が彼女にはある。活動的な妹とは対照的な、心を惑わすオトナの女性の雰囲気だ。

最もそれを当人に告げたなら、きつとこう言うだろう。

「いえいえ、一航戦の先輩がたの魅力には遠く及びませんから。赤城先輩のほうがずっと素敵ですもの……ぷぷぷっ」

ただの当てつけである。

「それでは、少し腰を上げてもらっていいですか？ よいしょつと、はい、お姉ちゃんのおひざの上いらっしやい♡」

「むーっ……こつちだって指揮官の頭をひざに乗せてるんだけどなあ」

まだ拗ねた顔をしている瑞鶴だが、指揮官の方はそれどころではなく、再び心臓の鼓動が激しくなっていた。何せ、一度は射精の妄想までした瑞鶴の太ももである。

そこに頭を乗せているのだから、平静でいられるわけがない。

おまけに翔鶴がやった、腰を抱えてひざの上にお尻を持っていく動作。

これは膝上パイズリの期待を煽るお約束ともいえる儀式である。

射精してから幾分も時が経ってないというのに、肉棒は再びギンギンに反り立っていた。

「さあ、それでは翔鶴の奏でる胸の調べ、たっぷりご堪能下さいませ……えい♡」

——にゆ〜つ、ぐちゆう、ぱちゆん。

翔鶴はボトルに残っていた潤滑油をすべて乳房にぬりたくると、いきり立つ肉棒をとろとろの谷間へと招き入れた。ぬるぬるに濡れた柔肉の塊が、竿をすっぽりと覆って乳内に隠してしまう。

その挟まれ心地は、明らかに瑞鶴と異なるものだった。

ハリがあつて乳圧で扱かれる気持ちよさが抜群だった瑞鶴の胸と比べると、翔鶴の胸は軟体のようにぶるんと垂れ気味で、確かに「瑞鶴よりもつと大きくて柔らかい」胸である。

両手で抱えてもはみ出してしまふほどのサイズ感に、ぴったり肉棒の形に吸い付く柔軟さ。

彼女の口ぐせを借りるなら、乳肉に溺れてしまつていけると言うべきか。

深く沈み込んでそのまま融け合つてしまふほど、まろやかな肉感である。

恐らく翔鶴のバストサイズはJの更の上、Kカップはあると見ていだろうか。

どちらもメートル越えの爆乳には変わらないが。

「どうですか指揮官、がっかりさせては……いませんよね♡　こんなに熱くたぎっているのですから」

見えなくなつた肉棒がびくんと震えて返事をした。

姉妹でここまで挟まれ具合に差が出ることに驚きつつも、指揮官の関心のほとんどは次に与えられるパイズリの快感へと向いていた。

「うふふ。目ががつつきすぎですよ、指揮官？　たおやかな鶴の羽根には似つかない、このどつぷり柔らかかお乳をおむつにしてえ……ぴゅっぴゅ、どびゅどびゅ……じわ〜つと染み出すようなお漏らし射精、させてあげますからね♡」

翔鶴はそう言うと、重たい乳にゆつくりと圧をかけ、ふんわりとした乳の質感を肉棒に伝え始めた。

たぶ、たぶと地球の重力に任せて乳房をおろし、再び緩く圧をかけて持ち上げる。

ぐいぐい挟んできた瑞鶴とは対照的な、緩慢でより乳の重みが分か

るしごき方である。

「ぱふ、ぱふ、ぎゅっ、ぎゅっ。ゆっくりゆっくり、おっぱいに包まれる幸せを感じながら、昂っていきましよう。翔鶴のこと以外考えられなくなるように、どっぶり浸からせてあげます♡」

「し、指揮官の顔が見たことないくらい崩れちゃってる……同じパイズリなのにそんなに違うんだ」

ストレートに興奮を煽られ、急速に昇りつめた一発目とは正反対の乳技に、指揮官だけでなく瑞鶴も見入っていた。

最初のように激しく乳を動かして、性感帯を一気に攻めるやり方は確かに快楽が倍増するものの、疲れがひどく、少なからず辛い気分も残ってしまう。それを見抜いた翔鶴はあえてアメを与えているのだ。

甘々に、ゆるやかに、赤子をあやすように、たぶんだぶんと肉竿を包んで理性をとろかすパイズリ。姉としての包容力を生かして、妹には真似できないやり方を披露する抜け目のなさも翔鶴らしい。

「私だって指揮官を甘やかせると思うけど、翔鶴姉の真似は出来ないし……そうだ、まだこの手があった、うん」

対抗心を燃やした瑞鶴は何かを決心すると、いきなり指揮官の顔の上に胸を乗せ、押しつぶすように重みを預けながら言った。

「ほら、さっきまで指揮官のを挟んでたおっぱいだよ♡ 翔鶴姉のおっぱいだけじゃなくて、こつちも気になるよね。せつかくお口が開いてるんだから……味わわないと損、じゃないかな」

ぼやけていた意識が一気に戻るほどの衝撃。

つまり瑞鶴は、胸を好きに食べていい、と言っているのだ。

突然目の前にぶら下げられた極上の果実に吸い付かない手はない。指揮官はぐわつと首を上げると、ためらうことなく乳房を口に含んだ。

ハリのある乳肌は多少強く吸っても形が崩れず、たぶたぶの肉感は甘い充足をもたらしてくれる。

「あっ♡ やっ♡ もう、そんなにがつつかなくても逃げないって♡

そのままだと首を痛くしちゃうよ」

瑞鶴は首の後ろに手を回し、指揮官に乳を吸わせたまま、身体を前

に傾けていく。

再び太ももの上に頭を戻し、寝たままの体勢でも授乳ができるようにした。

後頭部に広がる膝枕の心地よさに、口の中に広がる熱を帯びた乳肉の柔らかさ、そして下半身を委ねるたわわな乳おむつ。どこを取っても幸福でしかない。

夢中で乳首を舌で転がすうちに硬さが増していき、瑞鶴も感じているのだと分かると、多幸福感で我慢汁が止まらなくなる。徐々であるが、股間の奥底から射精特有のむずむずが上がってくるのを感じた。

「あら、ぴゅっぴゅが近いのですか指揮官。ええ、もちろん分かりですよ。指揮官のふにやふにやな顔だけでなく、おっぱいの様子でも♡

さつきから谷間の滑りが良くなってえ……ゆっくり動かしてるのに、たぱん、たぱんってリズムカルに音がなってます。うふふ、しちやってますね、あ・ま・だ・し♡」

甘出し、という表現に背筋がゾクリとする指揮官。

カウパー液、先に漏れ出たザーメン、それらの熱を帯びた体液が柔乳の中にどろりと溜まっていき、肉棒と谷間の境目を曖昧にしてしまいうぐらい、ねっとり絡みついているのだ。

不意に翔鶴の乳しごきが止み、両手で抱きかかえたままゆつくりと乳の圧力をかけ始めた。

ある程度の乳圧に達すると、そのままぴたりと止まってしまう。

「どうして止まるのか、不思議ですか指揮官。これじゃ生殺しだ、なんて思っています？ 言ったじゃないですか、精液がじんわり染み出すようなお漏らしをさせるって♡ このまま瑞鶴のおっぱいをちゅーちゅー吸って……私の柔らかく胸を圧力をいっぱいに感じたまま……勢いのないお射精を長く、ながく続けさせてあげます♡」

背中ゾクゾクが、一層激しくなった。

翔鶴が溺れさせると言ったのは冗談でも、比喻でもない。

文字通り胸の中に沈没させて、快樂の海に果てさせるつもりなの

だ。

「そ、そんなに激しく吸われると、何か出ちやいそうな気分になるよ♡

これが、人間でいうところの授乳なのかな♡ はあ、ふう、一生懸命で可愛いなあ♡」

乱暴に吸い付きだした指揮官に対し、瑞鶴は爆乳を更に顔へと押し付ける。

母乳が出ずとも仄かに甘ったるい味がして、頭がとろけていく。

無意識のうちに、指揮官の手が吸ってない方の乳へと伸びていた。

思いきり掴んでも指が弾むほどのハリの良さ。手のひら全体で揉みしだき、弾力を味わう。

「さあ、出してしまいましょ指揮官♡ 頭も、お手手も、お尻も、お

ちんちんも♡ 全身で私たちの柔っこい身体を味わいながら、甘々おっぱいお漏らししましょう♡ 幸せな気持ちを全部精液に変えて、お姉ちゃんだいすきくって素直なびゅっぴゅしましょ♡」

その言葉がとどめになったのか、指揮官は瑞鶴の胸にしゃぶりついたらまま、短い痙攣を何度も繰り返す。

はじめの乳内射精のような、谷間をこじ開けるほどの勢いは全くない。

みっちり閉じた谷間のIラインに沿うように、じんわり染み出した精液が乳内を満たしていく。

量だけは変わらず大量で、下乳からちろちろと漏れ出た精液が薄く広がり、水たまりのようになっていた。

「ああ……♡ 指揮官の濃密な精液、胸の中いっぱい……溶け合っってしまうぐらいにぬくぬくで……全然収まりません♡ このまま孕ませてしまうつもりですか、翔鶴の胸を♡」

艦船が妊娠するかも、と聞けばか細い仮説程度には思えるかもしれないが、胸が妊娠すると聞けば大抵の人間は即座に否定するだろう。しかし、こと情事においてそんな常識はどうでもよくなる。

パイズリセックスで孕んでほしいと思ったなら、それはもう交尾に他ならない。

種付けでなくお漏らしであっても、そう言われれば殿方が喜ぶこと

を翔鶴は熟知していた。

「下はおっぱいのおむつで、上はおっぱいをちゅーちゅーときたら、指揮官も立派な赤ちゃんってことになるのかな♡ あっ、こちら♡ 思いつきり吸っちゃダメだつてば♡ もう♡」

「ぎゅーっ、ぎゅーっ……全部おっぱいに出せたいですね、指揮官♡ でも、お楽しみはまだ残っていますよ……五航戦の鶴姉妹、大きな胸での乳比べ♡ せっかく両翼が揃ってるんですもの、試さず終わるなんてもつたないこと、しませんよね？」

二度の乳内射精を経たにも関わらず、指揮官の情欲は収まるところを知らなかった。

車内はすっかり三人分の性臭にまみれている。

指揮官は後部座席に翔鶴と瑞鶴を座らせると、自身は腰をやや落として立ち、乳肉をかき分ける縦での挿乳を交互に楽しみ始めた。

「すごい勢いではんぱんしていますね。そんなにこれがお気に召しましたか？ 両手でもがっしり掴んで……たゆんたゆんに揺れるおっぱいを固定して……好き勝手に腰を振っちゃって♡ 翔鶴のおっぱい、たぶたぶに波打ってます♡」

抜き差しするたび、肉棒の形に合わせて絡みつく軟乳。

谷間の深さを実感しながら、レースクイーン衣装ごと胸を鷲掴みにし、自分の好きなように乳圧をかけてはんぱんと打ち付ける。

V字に開いたスリットのおかげで、いつでも肉棒を挟めてしまう。そんな性的興奮を催すだけの衣装を最大限活用する、能動的な着衣パイズリ。

好き放題犯せるといふ事実には、勃起が止まらない。

「指揮官ったら、私たちのおっぱいに好き勝手当たり散らしちゃつてさあ……♡ 最初に煽つたのはこっただけど、ここまで執念深いとは思わなかったなあ。こうやって、ぎゅーちゅーちゅーにおっぱい絞めて、奥まで届かないくらい乳圧かけてるのにさ……歯を食いしばってでも腰使ってるし♡ このままもう一度、種付け射精しちゃうのかな♡」

翔鶴の胸から引き抜き、瑞鶴の胸にもずっぷり挿乳。

自慢のハリを生かして絞めつけてくる乳肉に負けじと、胸板まで届くほど勇ましい腰使いでピストン運動を繰り返す。

まるで指揮官が優位に立ったように見えるが、そうではない。

膣挿入ではなく、わざわざ好き好んで谷間に無駄打ちをしている時点で、乳袋との交わりに負けているのだから。

しかし、乱暴に腰を打ち付けて乳内射精に至ろうとした瞬間、

「で・も♡ このままだと、どっちかのおっぱいにしか種付けできませんよ？ それじゃダメですよ♡ どちらかを選ぶのではなく、両方が翼だと言ったのですから♡ それに、姉妹おっぱいをまとめてドロドロにしちゃう体験、したいと思いませんか？」

と、乳比べをそそのかした翔鶴からまさかの物言いがつけられた。そうは言っても、両方の谷間に同時に精液を注ぐ方法があるのだろうか。

彼の頭をよぎった疑問は、まもなく解消されることになる。

「そうそう、私たちの間に座って……両手をシートに広げてだらくつとしてください。そうしたら、よいしょつと」

「えつと、こうでいいのかな？ 後部座席に寝転がるようにして、よつと」

姉妹の間に座るように促された指揮官は、目の前の光景に思わず目を見開いた。

翔鶴と瑞鶴がそれぞれ脇の席から乗り出すようにして、互いの乳房を鏡合わせにしながら肉棒を挟んだのだ。

四つの巨大な乳塊が、肉竿を中心に置いてせめぎ合っている。

一夫多妻の世界であっても簡単には押めない、爆乳同士のダブルパイズリである。

「翔鶴姉、これってちゃんとできてる？ 今までのように、おっぱいの奥では挟めなそうだけど」

「大丈夫よ瑞鶴、私たちのコンビネーションはいつだって息ぴったりでしょう。それに指揮官の顔をご覧ください。すっかり目が血走って、夢中になってます♡」

瑞鶴が口にしたように、たとえ十分なサイズがあつたとしても、二人がかりで挟むというのは難しい。

傍目から見ても、単独で行うパイズリよりホールドが甘くなりがちな印象を受ける。

しかし、ここにいるのは以心伝心など朝飯前な五航戦である。

柔らかな肉を押し付け合いつつ、息を合わせて上下にしごくなど造作もないのだ。

加えて、絵面の暴力がすさまじい。

ただでさえ、顔を埋めたら視界が完全に塞がってしまうほどの爆乳が倍である。

心臓の鼓動が限界を超えて、呼吸をするのでさえ苦しくなるほどの興奮が指揮官を襲う。

——にゆぶにゆぶにゆぶにゆぶ、ぱんぱんぱんぱん。

両手ですくい上げるように乳房を持ち上げ、乳首同士がこすれるほど寄せ合いながら、小刻みな上下しごきが始まった。

別々にやっているとは思えないぐらい、ぴったりのタイミングで肉竿が撫でられる。

そのリズムは非常に早く、自分でしごいていると錯覚してしまうほどだ。

「あつ……♡ これ、指揮官のおちんちんだけじゃなくて、翔鶴姉のおっぱいともこすれて……♡ 早くすればするほど、乳首に熱が集まって……♡ 挟んでるこっちまでやばいかも」

「うふふ、あん♡ 本当ね、瑞鶴のかたあーい乳首がこされるから……お姉ちゃんまで気持ちよくなっちゃう♡ 指揮官もまた、すぐくだしらない顔に戻っちゃいましたね♡ カリ首から亀頭まで重点的に挟まれて、まるで肉の首輪でもはめられたみたいでしょう♡」

快樂の秘訣はそこにあつた。

竿肌を片面ずつ爆乳に押し付けられ、そのまま挟まれて上下運動される。

谷間の中では柔肉に全体を包み込まれるような感触であつたが、これは両側からスタンプのように圧迫されるため、一部を重点的に攻め

やすいのである。

乳肉同士がぶつかる音と、これまでの乳内射精やらローションやらでぐちゅぐちゅと鳴り止まない水音、四つの乳房になぶられる真っ赤な亀頭。

たまらず指揮官は、シートに伸ばしていた腕を二人の肩へと回した。

それは射精への合図に他ならない。翔鶴と瑞鶴はにやりとした顔を向け、ますます胸を激しくしごき合っていく。

「ははーん、指揮官もうダメなんだあ♡ 手でしごくみたいに激しくおっぱいでこすられて、辛抱できなくなっちゃったんだ♡ 頭の中おっぱいスケベでいっぱいなのかな♡ いいよ、出しちゃえ♡ 両側から挟まれたお返ししちゃえ♡ 翔鶴姉と私におっぱい妊娠の役割押し付けちゃえ♡」

「どうです指揮官♡ 何もおっぱいに交互に挿乳して、奥にびゅーびゅー種付けするだけが乳比べじゃないんですよ♡ 一気に両方のおっぱいを味わってえ……柔らかさやハリの違いを堪能しながらあ……自分のカッコつけこじらせた発言の責任取って、鶴姉妹のおっぱい孕ませ射精♡ チャレンジしましょう♡ 一番こつてりした精液を浴びせてください♡ ほら、どうぞ♡」

三度目の限界は、イクの一言とともにおとずれた。

亀頭の表面を流れ落ちていくように、精液が次から次へと溢れてくる。

ぬるぬるに汚されながらも、ふたりは乳でのしごきを止めず、最後まで出し切るよう促した。

「あっ♡ 出た出た♡」と嬉しそうに呟く翔鶴と、「うわあ、三回目でもどろっどろ♡」と精液の変わらぬ濃さに呆れる瑞鶴。

二人そろって、精液の熱い迸りを胸で浴びるのがクセになったのだろうか。

目にハートを浮かべながら、こつてりとこびりついた白濁汁を互いの胸でこすり合わせ、にちゃにちゃとねばつく音を車内に響かせた。

指揮官はというと、さすがに三回の乳内射精で腰に力が入らなく

なったのか、息を切らしてシートに寄りかかっている。

続いていた興奮が途切れて、急に眠気がやってきたせいか、マーキングで白く染まった爆乳が霞んで見える。このまま眠りに落ちてしまえば、さぞ気分がいいことだろう。

だが、それを許さない者がふたり、この閉鎖された空間にいる。

「し・き・か・ん？ ご満足いただけただけなのは何よりですけど、終わったのは“おっぱいの時間”だけです♡ まさか胸だけに種付けして限界だなんて言いませんよね？」

「最初に私がしたいのかなって聞いたこと、まだ三つも残ってるんだよ？ 全部終わるまで付き合っただけから、遠慮しないでぶつかっておいで！ 今日の瑞鶴は最強なんだから♡」

哀れ指揮官、車に夜明けの光が差し込むのは、まだまだ先のことである。

丑乳檜野との新婚旅行く水着選びに悶々とした後日、
混浴露天風呂でUカップズリ抜きされる話く（前）

「えっ、温泉ですか？」

両肩に大きな荷物に乗せたまま、重桜所属の給兵艦・檜野は思わず顔を綻ばせた。

神前式で取り交わした指輪がきらりと光を反射し、資料室の埃を照らしている。

キツネやイヌ、ネコなど動物の部位が目立つ重桜の中でも、とりわけ珍しい「ウシ」の特徴を持つ彼女。

先日晴れてケツコン関係となった指揮官からの申し出に、尾っぽが思わず上がってしまう。

「お互い次の非番が近いし、まだちゃんとした旅行もできてなかったでしょ？　せっかくだし、檜野の好きな温泉でもどうかなくって思っただけど……いい？」

その誘いを聞くや否や、檜野は抱えていた荷物を棚の上へとぶん投げ、

「えへへ、もちろんですよ。二人きりでの温泉旅行に誘ってもらえるなんて、贅沢すぎますよお」

その代わりと言わんばかりに指揮官を持ち上げて、自身の喜びをアピールした。

「はは、喜んでもらえたのは何よりだけど、とりあえず降ろしてくれないかな……」

「あつ、ごめんなさい。駆逐艦の子と遊ぶ時のクセで、つい」

「ちびっ子と同じ扱い……一応僕って、170センチ台の成人男性なんだよ？　やっぱり力持ちだなあ檜野は」

「お姫様だっこも試してみますっ」

「え、あ……興味がないといえは嘘になるけど、こう、僕の立場がなくなってしまうような」

フォークリフトより安定する持ち上げ方、と持て囃されるぐらいに

たくましい樫野の腕力。

単に牛がモチーフだから、というだけではない。

樫野はかつての大戦時、大和型戦艦の主砲砲身、主砲塔を運ぶ砲塔運搬艦だったのだ。

その活動記録がメンタルキューブに刻まれ、結果として規格外のパワーを有することになったと考えられる。

何せ主砲である46cm砲の重さはおよそ2800トン。

たった一基で金剛型戦艦の主砲全部の総重量にも匹敵するのだ。

二年という短い稼働期間ではあったものの、その主砲を三度も運んで超弩級戦艦「武蔵」の完成に貢献したという唯一無二の実績。それが樫野のパワーの源に違いない。

(参ったなあ。なだらかそうな肩してるのに、軽々とちびつ子に乗せちゃうんだもんなあ。僕だって水練の影響でそれなりに肩幅あるんだけど……)

内心落ち込む指揮官だったが、決して彼が貧相な身体つきなのではない。

日本人男性の平均身長は満たしているし、触れば分かる程度に筋肉もついている。

ただケツコンした相手が、力も目線も上だったという話だ。

「あの、指揮官……旅行に行く前にお願ひしたいことが」

「お？ 樫野からのお願いなんて珍しいね。もちろん、出来ることから何でもするよ」

やや伏し目がちで、耳を垂らしたまま、もじもじとする樫野。

言いづらそうな雰囲気、何か粗相をしてしまったかと身構える指揮官だが、

「わ……私の水着選びを、て、手伝っていただけないでしょうか」

「へ？ 水着？」

「はい、せっかくなので混浴を楽しみたいなって思ったんですけど……ご迷惑でしたか？」

「い、いやいや迷惑なんてそんな訳……そ、そっか、慰安だけじゃなくて新婚旅行も兼ねてるもん、こ、混浴ぐらい普通にするよな、は、は

はっ」

温泉旅行を檣野にプレゼントしてあげたい、という気持ちからの提案だっただけに、混浴の誘いは予想外だった。当然、二人だけの旅行で何も起こらず……で済ますつもりはなく、むしろ指揮官の方からアクションを起こそうと思っていたので、先手を打たれたのは少し悲しくもある。

「み、水着は、その……指揮官に……一番好きなものを選んでほしくて」

「な、なるほど……」

檣野の一言に、指揮官はある一点を見つめたまま、思わず唾を飲み込んだ。

彼女はその力もさることながら、もう一つ規格外な身体的特徴を持っている。

それは——あの大鳳すらも上回るほど、たつぷり肉の詰まった爆乳である。

乳牛と呼んでも差し支えないサイズは、普段の軍服でも圧倒的な存在感を誇り、歩くだけで大きな山が揺れているのかと思えるほどだ。

上の羽織は前が締められず、代わりにひもをつないで固定しているのだが、そうなると余計に突き出た乳房のラインが目立ってしまう。

どうにか閉められた中シャツのボタンも、いつ弾けて飛んでいってもおかしくないという有り様。

おまけに、指揮官よりもやや背が高い都合上、いつでも顔からダイブできる位置で誘惑してくるのである。

男にとって、色々な意味で目を離せなくなる逸品だ。

（実をいうと、檣野に抱きかかえられるたびに当たってるんだよな、アレ……服の上からでもぶるんぶるんに揺れてるのに、脱いだらどうなるんだ……？）

背中や腰に感じた、柔らかな弾力を思い出す。

もし、水着なんて開放的な姿を目にしたら、果たして冷静さを保てるだろうか。

肩幅の件から考えると、檣野は着やせするタイプの可能性もある。

つまり服の上から受ける印象よりも、実際はもつと重たく、たゆんと揺れる大ききさだったとしたら……。

そこまで妄想して、指揮官は身体の芯が熱くなるのを感じた。秘めた欲望が湧き上がってくる前に、急いで言葉を発する。

「き、気持ち嬉しいけど、ちゃんと檣野の好みに合わせたのを二人で選びたいかなー、僕は……ん？ これってむしろ優柔不断だったりする？」

「とんでもございませぬ！ 指揮官が私のことを大切にしてください。てるのは、分かっていますから……えへへ、大好きですよ」

「ああ、良かったあ。僕も同じ気持ち」

「そうと決まれば仕事を早く片付けて、明石のところへ行きましょう！ 檣野、張り切って手伝いますよ」

「えっ、ちよ檣野、まだ話してる途中うおっ!? なにゆえ僕を抱きかかえてツ?!」

「この方が早いですからー!」

「公衆の面前でお姫様だっこはダメだつてえええ!!」

残念ながら、力で到底敵わない指揮官にふりほどく術はない。

重力で揺れる乳の重さとバランスを凶るよう、尻尾をしながら走る檣野に抱え上げられ、執務室へと戻るのであった。

その道すがら、他の艦船少女たちに指を差されたのは言うまでもない。

艦船には想像を絶するグラマーな体形が多いため、市販のモノでは服のサイズが合わないことがままある。

そんなとき頼りになるのが明石のショップだ。

もつとも、足元を見られて高値で売り付けられる、なんてことも日常茶飯事なのだ。

「明石め、『夫婦水入らずでゆつくりニヤ』つてずいぶん含んだ言い方されたけど……いくら新婚だからって、試着室でやらかす訳ない

でしようが……ないない、うん」

指揮官はイスに座って、檜野の着替えが終わるのを待っていた。購買部の奥にある衣装の展示室には、大人が二人入れる程度の広さの試着室も備わっている。

一緒に入ると思われたのか、明石はダボダボの袖で口元を隠しながら「ハメを外し過ぎるのはダメニヤ」と釘を刺してきた。

「言われなくても分かっているよ」と被せるように返事をした指揮官だが、実際は全く平常心ではない。

胸のソワソワが止まらないどころか、どんどん増している。

だから逐一口に出して否定することで、どうにか自分を保っているのだ。

「指揮官、最初の水着に着替えたので見て頂いてもよろしいでしょうか……」

「あつ、うん。どうぞ」

来た。

ドキドキしながら試着室をじっと見つめる。

間もなく、控えめにカーテンの開ける音がすると、普段のイメージとは異なるエレガントな水着姿の檜野が現れた。

紫のアジサイをあしらった頭飾りに、ブラックワントーンの三角ビキニ。

そしてフリル部分を淡い藤色で染めた薄暗いパレオ。

三つの要素が噛み合った結果、上品で落ち着いた雰囲気を出している。

「……おお……」

思わず言葉に詰まってしまう指揮官。

呆けた表情を見て不安になったのか、檜野は「に、似合っていないでしょうか」と自信なげに尋ねた。

「……あ、あぁー、ごめん。あんまりにも美人だから心臓止まっちゃって……」

「そ、そうですか!? 美人だなんて……あんまり言われ慣れてないの

で、ちよつとムズムズしちゃいます」

照れ隠しに耳をパタパタさせる榎野だが、まんざらでもないらしく、顔のにやけを隠し切れてない。

改めて見ても、艶やかな黒髪と紫の色合いがとても良く、非常にマッチした水着といえる。

普段の軍服も同じ色の取り合わせなこともあって、榎野らしさも感じられると指揮官は思った。

「でもこれ、少し上品すぎて混浴に着ていくのは……」

「海水浴ならばつちり合いそうだし、キープしておいたら？　すごく似合うからもつたいたいって」

「か、海水浴ですか？」

「あー、ほら、母港にあるビーチなら比較的行きやすいし、次の機会にどうかなーと」

「指揮官……」

榎野は指揮官の手を握ると、そのまま自分の胸元へと持っていく、そつと添えるように当てた。

「え、ヴえっ!？」

突然のことに奇声を上げてしまう指揮官だったが、榎野は構わず言葉をついでいく。

「分かりますか。私のここ、とつてもぽかぽかで、ドキドキもしているのが……」

「お、おう」

「指揮官の優しい気持ちの流れてくるみたいで、想像以上に素敵な気分になれるんです」

「か、榎野……」

（ごめん榎野。せつかくの良いムードなのに、それどころじゃなくなりそうなんですけど……!!）

指揮官の指は、文字通り埋まっていた。

人間の頭よりも大きい豊球へと押し付けられ、すっぽりと包まれていた。

それで気づいてしまう。

先ほどはギャップに感銘を受けて気にも留めてなかった、檜野の水着が抱える異常に。

明らかに乳房がはみ出しているのだ。

指揮官の記憶が正しければ、大鳳が母港に着任して以降、下着も水着も全般的にサイズの改良が施され、Rカップという爆乳の域すら超えた艦船少女でも、それぞれぴったりの衣装が生産されているはずである。

だが檜野はどうだ。

その自慢のビキニが胸元を押し上げて、乳房の丘が出来ているではないか。

今にもこぼれそうな谷間はすさまじいボリューム感で、少し指の関節を曲げただけでも至福の柔らかさを感じ取れる。実際に触れたことで、指揮官は自分の懸念がまさに当たってしまったと痛感した。

みちみちとひしめき合う乳房の重みも、たぶたぶ具合も、背中や腰に当てられたときは比較にならない。

爆乳ひしめく母港の中でもトップクラスのバストサイズ、という触れ込みが冗談でも何でもないと分からされる。

「あっ……指揮官の胸も、とつてもドキドキしてくださってますね。えへへ、嬉しいです」

いつの間にか距離を詰めてきた檜野の手が、指揮官の胸に置かれる。

破裂しそうなほど高鳴る心音。

恥ずかしすぎて気絶してしまいたいと指揮官は思った。

おっとりした性格の彼女がこんなにもグイグイ来るのが予想外なら、実際のバストサイズはいくつなのかという疑問もスケールが大きすぎて予想の範疇を超えている。

どこまで意識的にやっているのだろうか。天然な彼女のことだから、無意識のうちにやっている可能性もある。

どの道、頭がどうにかなりそうだ。

指揮官はこれ以上はいけないと離れようとしたが、前述の檜野パワーの前では全くの無力で、ピクリとも手が動かない。

「それで、まだいくつか着てみたい水着があるので……指揮官も中に入って手伝っていただけませんか？」

「え、あ、はい？」

完全に動転して気の抜けた返事をする指揮官。

今何て言った？ 手伝って欲しいって、どこで？

考えるまでもない。榎野ひとりで着替えるのはやはり手間取ってしまうのだ。

片方だけで二桁以上の重さはあるような爆乳と、複雑な衣装の取り合わせ。

補助が欲しいと思うのは自然なことだろう。

それなら明石を呼んでくればと思案したが、身長差の関係上いろいろな不都合がありそうだし、何より「うわあ、いくじなしだニヤ」と小馬鹿にしたネコガキ顔が目には浮かんでくる。

ハメを外すなど言ったのはそっちじゃんか、と空想の相手に毒を吐いてるうちも、榎野は一切手を離す気配がない。

ビキニにより両脇からぎゅうぎゅうに詰められ、盛り上がった乳肉に囚われたままである。

「で、でもほら、色々とまずいんじゃない？」

「んー、大丈夫ですよ。私たちは正式にケツコンをしている間柄なんですから……多少肌が触れ合っても、決して間違いじゃないんです……お互いに了承の上のお手伝いですから、ねっ」

ぐにゅん、と手のひらに柔らかさが跳ね返ってくる。

榎野は指揮官の手を押さえたまま、試着室へと徐々に後ずさりをしている。

つられて歩き出すと、ますます胸のことしか目に入らなくなり、理性が細切れていく。

「う……うん……そう、かも」

ついに流された。

決してビキニという薄布一枚がギチギチに悲鳴を上げるほど極上の豊乳と、常識外れの榎野の腕力に押されたわけではない。あくまで前に出来ることならなんでもする、といったことを嘘にしないためだ

——そんな言い訳で自分を納得させながら。

檜野につられて足が進み、とうとう試着室の中へと入ってしまった。

「う……あっ」

カーテンを閉められ、二人だけの空間となる。

そこに充満していたのは、檜野の匂いだった。

力仕事で汗をかいていたのだろう。当人だけでなく、壁にかけられた軍服からも甘いフェロモンが漂ってくる。いや、染み込んでいる分、衣服の方が発生源として正しいか。

まろやかな芳香に頭がクラクラする。手のひらに感じる乳肌の汗ひとつにまで意識が向いてしまう。

ふと目の前の鏡を見ると、耳まで真っ赤に染まった自分の顔が映っていた。

それが恥ずかしかったので、指揮官は鏡の正面に立たないよう横へとずれていった。

「では脱いじやうので、指揮官はそこに掛けてある水着を取っていただいてもいいでしょうか？」

ようやく手を離してくれた檜野は、早くも着替えを始めようとしている。

手にあつた幸福感が離れていくことを惜しむ間もなく、指揮官は慌てて逆を向いた。

「焦らなくても大丈夫ですよ。そんなに早く着替えられませんか」

「いやそういう問題じゃなくて。い、いくらケツコンしてるからってまじまじと見るのは」

「……見ちゃうんですか？」

「そ、そういうのは、温泉の後に取っておこうかな、なんて……あっ」
口が滑ったとはまさにこのことだが、檜野から返事はなかった。

代わりに牛の尾っぽが左右に振られ、べしべしと指揮官の足に当てられる。

どうやら変に意識させてしまったらしい。

それ以降会話は途切れ、二人そろって黙ってしまったため、しゆる

しゅると衣擦れの音だけが嫌に目立ってしまう。

「あの、次の水着をお願いします」

「ああ。ど、どうぞ」

唐突に口を開いた檜野に急かされ、顔を背けたまま新しい水着を渡すと、代わりにやや温もりの残った何かを渡される。

横目で確認すると、今まで着ていた黒の水着が腕に掛けられていた。

思わず心臓が飛び出そうになるのを抑え、それらをハンガーに戻そうと手に取る。

(うわ、でっかい……)

指揮官は改めて、ビキニの大きさに目を見張った。

顔ごと覆い隠せてしまいそうな布面積に、きつちりとした強度のヒモ。

乳児の体重よりも重い豊乳をハンモックのように下から支えている実物が、目の前にある。

顔を埋めて思いつきり息を吸いたい、濃厚なミルク臭で肺を満たしたい。

湧き上がる衝動をかき消すように、頭を横にブルブルと振った。

その拍子でビキニに付いていた新品タグがヒラリとめくり上がり

——19号、という数字が見えた。

バストで換算すれば、約120センチにも対応できる一品である。

では、それを以てしても余裕で溢れ出ていたあの乳肉は一体何カツプだというのか。

「すみません指揮官、ちよつと後ろを結んでいただけないでしょうか」

「う、うう後ろを？」

「はい、さっきのより複雑で手が回らなくて……指揮官？」

「な、何？」

「あの、声が震えますけど、お体の具合が悪いのでしたら」

「いや大丈夫、大丈夫。ちよつと腰がピリつときたというか」

大嘘だった。

隠すために必死なのだ。ズボンの上からでも分かるくらい膨らん

だ、興奮の証を。

内股のまま、恐る恐る振り返って檜野を見る指揮官。

既に下の着替えは終わっていたが、色白の背中が剥き出しになった姿にドキリとしてしまう。

おまけに背を向けているにもかかわらず、乳房が脇からはみ出して見えてしまっている。

120越えの裏乳が呼吸に合わせてたゆんと揺れるのは、間違いなく股間に毒だった。

「く、首はもう結んであるんだ。じゃ僕は背中のところすればいいから、ヒモをこうやって……檜野は、えと、前で押さえてもらって」

「はい、お願いしますね」

指揮官は脇から通されたヒモをつかむと、後ろで結ぶために少し強めに引っ張る。

しかし中々うまくいかない。正面の弾力が強すぎて跳ね返ってしまふのだ。

つまり、ヒモをきつく結ぼうとするほど、たぶたぶの豊球を締め付けないければならないので、なるほど大変である。下から支えるような着方になるのも納得だろう。

一方、指揮官にとっては別の意味でも大変だった。

乳肉に埋もれた指の感触を思い出してしまふし、あんまり力を入れると苦しいのか「んっ……」と檜野が声を漏らす。興奮状態にあるせいか、妙に色っぽく聞こえるのもいけない。

動悸が止まらないまま、どうにか震える手を励まして結び終わると、思わず安堵のため息が漏れた。

が、次の瞬間。ぷちん、とヒモの切れる音が試着室に響く。

「えっ、あっ、ひゃん!?!」

突然の出来事に驚いた檜野がバランスを崩し、前を押さえたまま指揮官の方へと倒れ込む。

反射的に肩を抱き止めるも、内股だったこともあってそのまま壁へともたれかかってしまう。

「いたたた……ごめんなさい、バランスを崩しちゃいま、した……っ」

事故は起こった。

乳に負けず劣らず、かなりの表面積を持つ檜野の巨尻は、硬く膨らんだズボンの熱棒を捉えてしまった。

ちようど良く割れ目に収まった上に、後ろは壁。

どんなに腰を引いたとしても押し付けざるを得ない。

さらに良くないことに、肩をつかむために突き出したひじが裏乳へと当たり、むにゆりと変形してしまっている。

「ご、ごめん檜野!! ちよつと催してきたから先出るわ! 待ってて!!」

「あ、し、指揮官く……」

これ以上は絶対に耐えられないという危機感が働いた。

火事場の馬鹿力か、檜野を立て直してすぐ試着室を飛び出してしまおう指揮官。

潰れそうなほど胸をつかんで、激しく息を切らしている。

あと数秒、出るのが遅ければ。

あるいは、少しでも目が合ってしまったら。

どちらの場合でも情欲を抑えるのは不可能だった。

間一髪、指揮官はフライングを免れたのだ。

「……やっぱり明石に頼んでみよう。僕はもう色々な意味でダメだ」

前かがみで歩きづらそうに進む。

ハプニングの連続で頭がいっぱいになったせいか、指揮官は後方から注がれる視線に気づかなかった。

試着室、カーテンの引かれた奥から覗くのは——淫猥な桃色に染まったケダモノの眼光。

温和な草食動物とは正反対の、獯猛な捕食者の目が離れていく指揮官の背をじつと見つめていた。

丑乳檜野との新婚旅行く水着選びに悶々とした後日、
混浴露天風呂でUカツプズリ抜きされる話く（後）

当日まではあつという間だった。

指揮官と檜野が行き着いた純和風の温泉宿には、男女別の大浴場、それに貸し出し用の混浴露天風呂も備わっている。

旅館の背後に広々と構える山々を眺めながら、天然のミネラル温泉に浸かって旅の疲れを癒す……というのがこの老舗のキャッチコピーだ。

もちろんその広告に偽りはない。

硫化水素が空気に触れることで形成された乳白色の湯は、湯けむりの香りとたまごの腐ったような独特の匂いを醸し出し、実に趣のある味わいである。雪化粧に身を包んだ自然を眺めながらというのも乙なものだ。

「良い場所だなあ、ここ……珍しく檜野も興奮していたし」

指揮官は腰にタオルを巻いたまま、冷えた腰掛けへと座ってかけ湯を済ませる。

貸し切りなので後から入ってくる檜野以外、ここを訪れる者はいない。

つまり大自然を前にした露天風呂という、普段とは全く違う環境を二人きりで楽しめるのだ。

「お待たせしました」

ガチャ、と入り口が開けられる音と同時に声が聞こえてくる。

ドキドキしながら振り返ると、純白の水着に身を包んだ檜野が姿を現した。

実はあの後、明石に交代したときに「罰として当日まで水着見るの禁止ニヤ」と言われてしまったため、今日が指揮官の前での初お披露目になったのだ。

「どうでしょう、なるべく温泉に浴うものを見繕ってもらったのですか……似合ってます？」

「……すげえ」

また良からぬことを口走ってしまいそうで、続く言葉を呑み込んだ。

そのぐらい檜野の水着は扇情的だった。

最初の黒と比較して、雪のように真っ白な生地の子キニはより乳牛としての側面を際立たせている。

また、大きく変化したのがパレオの着こなしで、以前が大人っぽく後ろに靡かせていたのに対し、今回は前にも結んで可憐さを強調している。その上自然と結び目に視線が誘導されるからか、骨格の割にくびれた腰つき、へそにまで覆いかぶさりそうな豊乳がよりダイレクトに情欲を煽ってくる。

ぴこぴこ動く両耳にはサクラの花飾りがあしらわれ、可愛さに拍車がかかっていた。

「お胸のところは緩めに結んだのですけど、んんーっ……やっぱり苦しいです」

恐らく19号サイズの子キニは、やはり胸全体を覆うことは出来ず、下からぐつと持ち上げる格好となっている。それでも上向きにならないのだから恐ろしい。

溢れた乳肉から見える谷間の線は異様に深く、底が無いのとは思えるほどだ。

(これは……想像以上に我慢が利かないかもしれない)

あの一件以来、悶々とした欲求を抱えたままだった指揮官は、異常なまでの昂りを自覚した。

律義に自慰をせず旅行を迎えたので、本当なら今すぐにも檜野を抱き締めてしまいたい。

しかしそれでは、風情ある露天風呂を楽しむ合間もなくなってしまおうだろう。

貸し切りとはいえ、時間は有限なのだ。そう言い聞かせて、どうか腰掛けに座ったまま耐え忍ぶ。

「まずは指揮官のお背中を洗いますね」

指揮官がそうこう悩んでるうちに、檜野は桶の中でボディソープを

泡立て、準備を整えていた。

ボディタオルを優しく背中当てて、円を描くようにゆつくりと泡を広げていく。

疲れた身体を労わるような洗い方に思わず力が抜けてしまう。

「男の人の背中って広いですよ。艦隊のみんなが見ているこの背中も、今だけは檜野専用です」

「これからもずっと檜野専用だよ。いつもおぶられてる側の僕が言うのも何だけど」

「……それなら、こうしてみてもいいですか」

むにいと重たい感触が背中に押し付けられる。

突然檜野が抱き付いてきたと気付くまで、ほんの少しの間があった。

「かつ、かか檜野!?!」

意外な行動に目を白黒にしてもる指揮官。

身長ではやや檜野の方が上のため、後ろから覆うような抱き締め方となる。

ボディソープで背中の中すべりが良くなったからか、呼吸で上下する双丘の動きまで分かってしまう。

それに反応して、タオルに隠れた肉棒が熱を持ち始めた。

「お、重いですよね……たまたまに足元が見えなくて、どうしてもふらついちやうときがあるんです」

「う、うん」

「そんなとき指揮官は、さりげなく私の手を取ってくれて」

「うん、当然のことだと思ってるけど」

「それだけじゃなくて、武器も碌に扱えないのにかっこいいって褒めてくれて」

「いや実際、あんな大きな刀を二本も取り回せる子はそうそういないよ? それに給兵艦としての働きは文句のつけようがないぐらい立派なもの」

最後まで言い切るのを待たず、檜野がぎゅうっと抱き締めてきた。手が前へと回され、より強く背中に豊満な塊が押し付けられる。

「だから……だから榎野も、少しでも指揮官にお返ししてあげたいんです……」

さわさわと、榎野の手が胸板を撫で始めた。

背中にしたように、ボディソープの泡を薄く広げて塗りたくっていく。

「あのときの指揮官……勃っていましたよね」

「……ホントにごめん」

「責めているわけではないんです。むしろ、謝らなければいけないのは榎野の方ですから」

「ど、どうして?」

会話を続けながらも、ゆっくり下へ這っていく榎野の手。

訓練で割れた指揮官の腹筋を愛おしげに撫で回していく。

それに合わせて、背中の豊球もぐにゆりと潰れ、なめらかに背中をマッサージしていく。

あの爆乳が背に置かれているという事実には、タオルの屹立がピンと高くなる。

「……私も同じ気持ちだったんです」

「え、あつ……」

「本当はあのとき、指揮官の望むようにしてあげられれば良かったのですが……伽に疎い私で大丈夫なのかと不安になって、かえって中途半端な結果になってしまいました。だから……」

ふうっ、と熱い吐息が耳にかかる。肩の上から覗くようにして顔を出してきた榎野。

その目には強い情愛が表れ、桃色の視線は盛り上がった局部へと注がれている。

「ここに着いたとき、良い温泉に巡り合えてよかったって気持ちと一緒に……やつと指揮官を楽にしてあげられるって思ってた。そうしたら、気持ちを抑えられなくて、呼吸も早くなって……背中に触れたら、我慢の糸が切れちゃいました。えへへ」

照れ隠しの笑いが、最後の引き金だった。

もはや自制心が吹き飛んでしまった指揮官は、横を向いて勢いのま

ま檜野の唇を奪った。

一切の抵抗なく、そうするのが自然とでも言うかのように、互いの舌が伸びていく。

温かい唾をまとった柔らかな感触が交じり合い、吐息までも交換し合う。

もつともつとと貪るうちに、二人は向き合う体勢へと移っていく。情欲の深さを表すような深い口づけは十秒以上続き、永遠に続くかと思えばぶはつと離された。

てらてらと光る唾液の糸が、深い曲線を描いて垂れ落ちていく。

「指揮官の好きな洗い方、檜野にお教え頂けませんか……?」

タオルの盛り上がりをすりすりとなでながら、甘えた声でねだる檜野。

受け身のようでいて、変わらず火照ったケダモノの目を向けてくる。

やはり彼女も重桜なのだと思いつつ、指揮官はビキニの中へ人差し指を引っかけて離し、

「じゃあ、今から言うようにしてくれる?」

ペチン、と柔乳を弾きながら欲望を口に出すのであった。

「み、水着はこのままでよろしいのでしょうか……」

脱いで胸元をはだけようとした檜野だが、ビキニの生地の中に潜り込んできたペニスの感触に首を縮める。

「うん、せっかくだし、着たままの檜野でもらいたいんだけど」

「その方が興奮するのですか?」

「率直に言えば、そういうこと」

「んー……殿方は裸になればよろしい、というわけではないんですね」
ぐいぐいと、亀頭の先がビキニに圧迫された乳肉を押し込もうとする。

興奮からすっかり硬くなった怒張でも、最大級の質量を持つ豊球の前では形無しらしく、弾力だけで跳ね返ってしまう。それでも指揮官は突くのを止めない。柔肉を突き刺している昂りと、鈴口に生まれる疼きが心地いいからだ。

「くすぐりたいですよお、指揮官」

「おお、ごめん。嬉しきの余りはしやぎ過ぎた……」

ビキニのように、下乳からぐにとペニスで押し返せるかを試すなど、丑乳を使った探検も一旦はそこまで。谷間の前で反り立ち、挟まれる瞬間を今か今かと待ち受けている。

「んしょ……それでは、指揮官のおちんちんにおっぱい失礼します」

檜野は持ち前の力を活かし、片方10kgは優に超えているであろう乳房をくぱと開いて見せつける。

改めてその長さと、蓄えたボリウムが規格外であることを分からされた。

仮に指揮官のペニスを物差しとし、乳肉をずっぷり割って平行に突き入れたとしても、奥の胸板まで測定することは出来ないだろう。決して短小だからではない、檜野の乳が深すぎるのだ。

そんな大きさの双丘に、今からギロチンのようにぱちゅんと挟まれ、ビキニによる締め付けを受けると思うと、想像だけで達しそうになる。

「檜野……おっぱいの大きさ、教えて欲しいな」

直前になって聞くことでもないと思ったが、指揮官の中で好奇心の方が勝った。

19号のビキニでも溢れてしまう、たぶたぶの柔乳。

男の手でも全く掴み切れずに沈んでしまう肉布団。

Rカップ想定 of ビキニで収まらないのだから、その上となると両手で数え切れる程度のサイズしかない。

「えと……明石に測ってもらったんですけど」

挟む位置を確かめるように、檜野は勃起した逸物を片乳ずつ内側でこすり付ける。

乳奥までの長さと勃起した肉棒を比べられているようで、目が離せ

なくなる。

目測がついたのか、檜野はぐいっと両乳を広げて前へと傾き、谷間の奥にペニスを迎え入れると――

「130センチの……Uカップだそうです。えいつ」

圧倒的胸囲を開示しながら、力いっぱい挟み込んで圧迫した。

「んんん、ちゃんと挟めました……指揮官？ 顔を見上げてどうしたんですか？ も、もしかして痛かったですか!？」

「……いや、その、別の意味で衝撃がすごくて……危うく出そうだった」

唇を思いつきり噛んで、ついでに鼻息も荒い指揮官。

一気に興奮を煽る情報が流れ込んできたため、思考回路がショート寸前だった。

まず、130センチのUカップ。今までの経験から納得はできるものの、あまりに現実離れたバストサイズに眩暈がしてくる。そんな爆乳の中に入ってしまったペニスは、文字通り完全に埋まって消えてしまっていた。先端すら全く見えない埋没っぷりである。

そして乳内の感触もまた、想像をはるかに超えている。

檜野の腕力によって押し込まれる形でペニスに張りつく乳肌は、ボディソープのぬめりだけでなく、湿気により蒸れて薄い膜が張られている。

しっとり吸い付いて、かつ全体を包みこむように柔らかい贅肉はあまりにも重く、普通の女性ならきちんとかかむ前に疲れてしまうだろう。

しかし、そこは艦船随一の力持ち。

Uカップをもものともせず乳圧をかけて、強い圧迫感を与えてくれる。まさに檜野にしかできない、天性のパイズリなのだ。

「あ……おちんちん……全部入っちゃったんですね……どんどん熱くなって、やけどしちゃうそうです」

やはり檜野の胸が大きすぎるからか、肉棒が乳内にあっても異物感をそれほど感じていないようだ。

それでもどんどん熱さを増す肉竿に興奮しているのか、じつと谷間

を見つめている。

「えと……軽く揺すってみますね。こう、でしうか」

拳を握り、下からすくい上げるように乳房を持ち上げると、檜野は軽く交互に揺さぶって刺激を与え始めた。むにゅんと揺れるUカップの中で、今にも飛び跳ねそうにペニスが震えている。もちろん、圧倒的ホルドの中でもがいても脱出はかなわないし、むしろ自分から豊乳の柔らかさを堪能してしまう形となる。

「指揮官、檜野はちゃんと洗えていますか？　なんだかおちんちんがヌルヌルしてきましたよ……？」

「それは、気持ちよくなると出ちゃうんだ……はあ、ムチムチでやばいっ………続けて………」

「わ、分かりました。それではちよつとずつ、力も入れていきますね。えい、えいっ」

檜野は乳房の持ち方を変える。

手を広げて圧迫しやすくと、そのまま両側を押し込みつつ、円を描いて両乳をこすり合わせていく。クッションと呼ぶには分厚すぎる肉感で両方からズリズリされ、快感からため息がこぼれた。

我慢してもつと楽しまなければと尻に力を込め、必死に射精をこらえる指揮官だったが、既に全身の力が抜け切っていた。檜野の手技に合わせてたぶたぶに揺れ、ぐにぐにと形を変える130センチおっぱいを眺めているだけで、尿道に精液が込み上げてくる。

「檜野の胸の中も、熱くなってきて……はあ………すべりも良くなつて………ちんこ溶けそう………」

「う、動かしてるうちに汗が出てきちゃったみたいで……おっぱいで洗ってるのに、汚しちゃってすみません」

「……汚れたら、綺麗になるまで洗ってくれる？」

「は、はい………！　檜野、いつでも指揮官のおちんちんをお洗いますね………」

張り切った檜野は、交互に動かすのではなく、爆乳を両手で持ち上げ、上下にしごき上げるパイズリへと移行した。Uカップの物量で行われるそれは、ごくごく標準的な動きですら必殺になり得る。

ぱん、ぱんと打ち下ろされるたびに骨盤を叩く音が露天風呂に反響し、泡立った谷間からは卑猥な水音が漏れ出ている。あまりの心地よさに、指揮官の腰が無意識に跳ねて檜野のパイズリに同調していく。「あっ……だんだんと指揮官の匂いが昇ってきて……これ、もつと嗅いでみたくなっちゃいます……」

「それなら、もつと激しくしごいて、ぐちやぐちやに絡めて……!」

「これくらい、ですか? はああ……ん、んっ」

「ああ……可愛いよ、檜野」

「も、もう。あんまりおだてられると、嬉しくなっちゃうからダメです……んしょ、んっ」

パイズリが激しくなったからか、鼻先の距離だからか。谷間から立ち昇るペニス独特の匂いは温泉の硫化水素臭すらも上書きして、檜野を昂らせる。

ぬりゆぬりゆと乱暴に揺れるUカップが射精を際限なく促してくるので、指揮官の我慢も限界に近かった。

「あっ……おちんちんのピクピクが、激しくなりました……これって、確か」

「うん、そうだよ……そろそろ、イっちゃいそう」

「な、何か特別なことが必要なのでしょうか?」

「ううん、ただっ、おっぱいぎゅって締めて、きつく狭めてくれれば、イけるからっ」

「は、はい、頑張りますね!」

献身的に気持ちよくさせようとする檜野は、より体重を前へと預け、Uカップの重みをペニスへと伝える。同時に指揮官の腰は固定され、自分から振ることも、引いて逃げることも出来なくなってしまう。粘り気と谷間の熱に包まれたペニスがいくら泣いても、乳内射精する以外に選択肢はないのだ。

それは指揮官にとっても願ったり叶ったりである。

「はあ、ふう……こんなに、おっぱいとおちんちんがぶつかって、こすれたら……痣になっちゃうかもですね」

「痣になったら、嫌?」

「とんでもありません、そうしたら……榎野のUカップおっぱいが指揮官だけのものだって、みんなに証明できますから」

「うっ、か、榎野ッ……!」

力一杯谷間を窄めて、ペニスに狭苦しい乳内を往復させる榎野。

これまでよりもずっと強烈な乳圧で、尿道にせり上がった精液を搾り取ろうとしてくる。

リズムカルに打ち下ろされる柔肉の塊は幸せの暴力と化しており、指揮官は恍惚に喘ぎながら榎野の頭に手を置いた。

「榎野お願い、顔、顔上げてッ」

「顔、ですか?」

「キス、キスしながら、乳内に……!」

「あ、はい、どうぞ……!」

前に乗り出していた榎野の顔をぐいっと上げ、必死に舌を伸ばす。さきほどそうしたように、互いの唇を貪りながら、絶頂に至ろうとする谷間の水音を耳で感じる。

全身で榎野の身体を味わいながら、指揮官はふっとお尻の力が抜け、パイズリの快樂に浸ったその時。

キスの衝撃からぎゅつと谷間を狭めた榎野と目が合った。

「ふあっあ、あっ、ん、んくくくくっ、ん、ちゆるっ、ぢゆるるるくくっ……ぷはっ、あっ、すごい……熱くてヌルヌル……おっぱいの中で何度も痙攣して、止まりませんね……」

大量射精をされているにもかかわらず、谷間から中々精液が漏れ出てこない。

ビクビクと震え続けるペニスが心配になったのか、榎野はふんわりと圧をかけて出し切るよう催促してくる。

「あっ、それ、イってる最中だから、やばい……ああ、溶ける」

指揮官の制止の声も耳に入っていないのか、構わず谷間を閉じて往復を続ける。

出したばかりの精液が内側へとこびりついて、それがまた潤滑油としての役割を果たしている。

Uカップというバストサイズを贅沢に使い、最後の一滴を出し終わ

るまでこね続けた。

「よいしょ……うわあ、この白くてドロドロしたのが精液、なんですね……不思議な匂いがします……」

谷間を開いた檜野は、自分のビキニと同じくらい真っ白に染まった痴態を見て顔を赤らめた。

出したザーメンがねつとり糸を引いて、白濁の橋が架かっている。しかし、それ以上に驚くべきことは、精液のほとんどが谷間の内側を汚すに留まって、本当の奥である胸板まで届いていないのだ。

扇情的な光景を前にして、またペニスへと血が集まっていく。

「あ……これだけ出したのに、まだお元気なんですね。すごいです」「だって、檜野がエッチだから」

「え、ええエッチですか!？」

「うん。だいぶエッチ」

「あわわわ……でも指揮官の前だったら、仕方ないかもですね……」

「ほら、檜野。今度は僕の方から洗うよ。さすがにそのままだと気分も良くないでしょ」

「えっ、そんなことないですよ？ むしろ指揮官の匂いが昇ってきて……なんだか心がぼわぼわしますから」

「うっ……またそういうこと言うんだから」

「でもせっかくだからお願いますね。よいしょ……ひゃん!？」

位置を変えようと檜野が立ち上がったその時だった。

行為にひと段落がついて油断していたのもあったのだろう、不意に足を滑らせてしまった。

「檜野!!」

慌てて支えようとした指揮官もろとも倒れ込んでしまう。

幸い頭を打たずに済んだものの、大きく尻もちを付いてしまった。

「いたたた……ごめんさい、うっかり転んでしまいました。お怪我はない、ですか……?」

「そっちこそ大丈夫、夫……?」

偶然ではあるが、指揮官が檜野の上へと跨り、まるで押し倒したような体勢へとなっていた。

慌てて退けようとする指揮官だったが、櫛野の様子がどこかおかしいことに気付く。

「か……櫛野？」

呼びかけてみても、返事がない。ただ情欲に潤んだ瞳で、じっと彼を見つめてくる。

どんなに腕っぷしの強い人間、それこそプロレスラーやボクシングのヘビー級チャンピオン、柔道の世界王者でさえ、櫛野にかかれれば片手ひとつで弾き飛ばせるほど力の差がある。

だというのに、彼女はいつまで経っても指揮官を退けようとはしない。

何かを期待する眼差しを向けながら、自分の胸へと手をかけ、むにゅんとたゆませる。

「……指揮官はウシさんの習性を知っていますか？」

「え？…習性？」

いきなり何の話をされているのか分からず聞き返す。

「発情期に入った動物は色々な仕草をしますけど……ウシさんにとってそれは相手にのしかかることじゃなくて許容……つまり相手を受け入れることなんです。皆さんはよく喚いたり、粘液が出ていることが発情の兆候だって思いがちなんですけどね。えへへ」

ドクン、と心臓が跳ね上がった。

図らずもお腹に押し付けていたペニスがぐんぐん大きさを増し、再び硬い怒張へと変化していく。

櫛野はぎゅつと胸元を抱え、むちむちのUカップを溢れさせたまま、じっと待っている。

「私は……駆逐艦の子と遊んで持ち上げたり、戦場で物資を運ぶために持ち上げたり……何かと、ウシさんのマウントに近い行動をすることは普段からありますけど……こうやって、エッチなことも受け入れちゃうのは……指揮官だけなんです……♡」

「ず……ずるいよ櫛野……そんな風に誘ってくるなんて」

「いいんです……さつきは櫛野が動いてお世話しましたから、今度は……指揮官の好きなように、このUカップおっぱいをお使いください

……♡ ぱんぱんでも、コリコリでも、何でもしていいですから……
また濃い精液を谷間に……浴びさせてくれませんか……♡」

「……後で温泉の時間が短くなっても知らないよ」

「はい、どうぞ……♡」

指揮官は前へとにじり寄り、大きな乳輪に龟头をこすり付けて互いのぬめりを交換し合う。

そうして準備を整えると、両手でがっしりと130センチの柔肉を鷲掴みにし、入口にペニスを宛がった。

「はあ……指揮官の熱いおちんちん……またおっぱいに入ってきてきます……♡」

いきり勃つ肉塊が、窮屈な乳肉を割って入っていく。

進めば進むほど谷間の圧迫感が強くなり、全体を抱き締められているような感覚に陥る。

腰を使って狭まった乳内へと無理やりねじ込み、根本までしっかりと呑み込まれた。

「うわッ……きゃつき出したのでヌルヌルだ……気持ちいい……」

汗ばんで熱を帯びた乳肌はまだ乾ききっておらず、一発目に出した精液やら先走り汁やらでトロトロの粘度を保ったままだった。

更にスムーズな抽送をするため、近くにあったボディソープを手にとる。

どうやら檜野が持参したものだったらしく、温感ローションを配合したぬめり気の強い品である。

それを谷間の中へと流し込んで、左右から乱暴に揉みしだく。

ペニスにこすれる感覚がなめらかになって、快感が一気に倍増した。

「そのまま……檜野のおっぱいの中、滅茶苦茶にかき混ぜてください

……♡」

「い、言われなくても、ぐうう！」

腰を思い切り振り立て、Uカップに全力で打ち付ける。

普通、馬乗りでするパイズリは勢いが激しかったり、肉棒の上反りがすごかったりするとホールドが外れがちなのだが、やはり檜野の爆

乳には無縁のようで、激しい腰振りも何のその。

汗ばんだ指揮官の手の上に添えるようにして自分の手を置き、指の間からむにゅと肉がはみ出るほど強く掴ませる。押し潰されたペニスがびくびく震えて喜ぶと、檜野はますます笑みを深めて猛る欲望を受け止めていく。

「もつと、もつと、檜野に甘えていいんですよ……」

ぐりぐりと身を振り、谷間の道行きを変えていく檜野。

下腹ごと乳房を叩くたび、僅かに加えられる変化が刺激となって、また精液が尿道を昇っていく。

もはや込み上げる衝動を自分でコントロールできなくなった指揮官は、次第に気持ちよく射精することしか考えられなくなってしまふ。

「あうう……二回目だけど、さつきより早く、限界来そう……」

自分でも信じられないほど急速に限界が近づく。

檜野主導だった一回目と違い、より肉棒が感じやすい挟み方を自ら実行している影響もあるのだろう。

それに、この状況自体が興奮を助長してくれる。

遙かに力が強く、背丈も高い檜野が、射精のためだけにUカップものの爆乳を貸し与えてくれているのだ。

独占欲や愛欲がない交ぜになって、睾丸の中で精液へと変換されていく。

「いつでも、いいですよ……射精してもぎゅっと包んだままにしますから……何も遠慮せず、たくさん出してください♡ もつと乱暴に腰を使ったっていいんです……♡ 檜野が指揮官だけの奥さんだつて証をびゅーびゅー出して……おっぱい孕ませてください……♡♡」

理性の糸が完全に切れた。

指揮官はなりふり構わず肉棒を突き入れ、柔肉の奥を叩こうとする。

当然そこに子宮はなく、妊娠機能も備わっていないのだが、だからこそ昂ってしまう。

ビキニから溢れる乳房を中央に集めて、隙間など感じられないほど

みっちり詰まった乳穴を犯すたび、本気で孕ませようという意志が伝わっていく。

「はあ、はあ、どうぞ、出してください♡ 指揮官の精液浴びてジンジンに熱くなっちゃう丑乳おっぱいに、恵んでください……♡ 全部出し切るまで、ずりずりしごいてあげますから……♡ 夢中になった可愛い顔で……榎野の胸にどっぴゅんしてくださいませ……♡♡」

始めに挟んだ時のように、両側からぎゅつと乳圧をかけられたのがトドメになった。

爆発的な快感に耐えかね、最後に思いつきり腰を押し付けると同時に、大量の精液がぶちまけられる。

Iラインがみっちり閉じた谷間の中が焼け尽きそうなほどの挟射だ。

脱力で腰も触れずに息を切らす指揮官に代わって、榎野が仰向けのまま乳房を交互に動かし始めた。

びくつ、びくつと痙攣を繰り返すたび、残った精液が乳内を汚していく。

指揮官は130センチの爆乳がもたらすパイズリの余韻に浸りながら、お腹を伝うように垂れていく白濁汁をじつと見つめていた。

「わあ……すごい量です。おっぱいの中で、水溜まりのようになって……♡ 仰向けだから、開いただけで垂れちゃいますね……♡ なんだか母乳みたいです……♡」

体勢の影響もあるのだろうが、今度はしつかりと胸板までべっとり精液が張り付いていた。

重々しく乳肌の上を流れていき、やがて白い糸になって床へとこぼれていく。

二回の乳内射精で落ち着いたのか、荒ぶっていた肉棒も元の大きさへと戻り、コテンとうつむいている。

榎野の胸を征服したつもりで、逆に搾り取られたのではないか——
——変わらず熱い視線を向けてくる彼女を見て、これは敵わないなど指揮官は思った。

「ふう〜……いいお湯ですね〜」

「うん……そうだね……だいぶハメを外し過ぎたけど」

気分が落ち着き、お互いの汚れを流し終えたので、二人はようやく本題の温泉へと浸かることにした。

やるだけ発散した後なので、硫黄泉の匂いが余計に身体に染みる。肩を並べて入浴する檜野に目を向けると、自慢の胸が浮力の影響か水面に浮いており、ぷかぷかと漂っている。二回も精液を搾り取られたことを思い出すとまた勃起してしまいそうなので、指揮官はすぐ目を逸らした。

「さわさわーとした風が、風鈴の音みたいでとっても心地いいです……」

「うん……それに冬の寒さと温泉の温かき、この対比が気持ちいいよねえ……」

ふうー、とお互いに深く息を吐き、じんわりと浸みる風情に身を委ねた。

「そういえば指揮官」

「ん、どうしたの」

「もしかして、普段から私の胸が当たっていたこと、気にしてましたか……う？」

「ぶほおあっ!？」

驚いた弾みで湯に沈みかける指揮官。

「え、なに、あれ無意識でやってたんじゃなかったの!？」

「無意識というか、どうしても当たってしまうので……恥ずかしくて言えなかったんです」

「あ、ああ……そんなどこまでシンクロしてるのね」

「え？」

「いやこつちの話だから……確かにいつも肩こり気にしてたし、意識してないわけがないか」

檜野は湯に浮かぶ乳房をぽよぽよ持ち上げながら答える。

「知つての通り、この重さですから時々肩が痛くなって……指揮官に揉んでもらつて楽にはなつてたんですけど」

「うん……」

「でも今日、指揮官ともっと深く繋がれて……一つ、解決策を思いついたんです」

ゆっくりとお湯をかき分けて、榎野が近づいてくる。

意図が分からず眺めていた指揮官は、予想外の刺激に跳ね上がりそうになった。

榎野がそのまま手を伸ばして、萎びた局部をさすってきたからだ。

「今度からは、指揮官のここ。榎野専用の乳置きにしちやってもいいですか……♡」

「ま、マジ……?」

「はい。今回は水着でしたし……いつもの隊服でも、癒してあげられたらなあつて。ダメ……ですか?」

「な、なんてことを想像させるんだ……」

恐ろしく爛れた提案。

今度はいつもの軍服で——つまり、あのパツパツに張ったシャツのボタンを開け、そのままずつぷり被せて着衣のまま致そうと言っているのだ。

出し尽くしたと思っていた肉棒は再び熱を取り戻し、榎野の手の中で臨戦態勢へと移っていく。

「まずはお風呂を上がって……牛乳を飲んだらゆっくりマッサージを受けて……それから続き、よろしくお願いしますね。榎野の旦那様……♡」

どうやらこの新婚旅行、まだまだ張り切る必要があるらしい。

指揮官はこれからの生活に期待を膨らませながら、榎野の肩を掴んで抱き寄せた。

アズレン春節ズリ祭 誰を尋ねる？（導入）

重桜の正月が終われば、次は節分——ではなく、またしても正月。除夜の鐘の響きの代わりに、東煌の伝統である爆竹こと「除夜のダイナミッククラッカー」が炸裂する旧正月、すなわち春節の始まりである。

別々の正月を連続で執り行うこの時期は手が不足しがちなものあつて、艦船達も総動員で母港の飾り付けや祭りの設営に取り組むのが通例となっていた。

「あれは……爆竹というより花火なのでは？」

執務室の模様替えをしている最中に外回りの業務を済ませるようグロスターに勧められ、準備に追われる各陣営の様子を伺いに向かった指揮官だが、視界に映った派手な爆発に思わず声が漏れる。

十中八九、撫順フジュンが発明した鞍山アンシャン云々という名前の爆竹によるものだろう。

当人曰く、念獣を追い払うためには格闘技の他により派手な爆竹が求められている、等と適当な理由を付けては年々威力を増している。念のため確認をしておくか、と爆竹の音がする方へ駆けつけてみれば、

「おお、指揮官も来たのだ」

「しゅきかーん！」

そこにいたのは重桜の雪風と睦月だった。

二人は肩を並べて、短い閃光が弾ける様を眺めている。先程見た火花に比べるとだいぶ大人しい。少し離れた後方には長チョウサン春が立っていて、羽目を外し過ぎないか見守っていた。いつもの装いとは違い、春節用の白虎の着ぐるみを被っている。

指揮官は軽く手を振って応じると、そのまま長春へと近づいて尋ねた。

「撫順の姿が見えないようだが」

「実はさつき、鞍山姉さんに見つかっちゃって」

「連行されたか……懲りない奴め」

「今頃、寧海と平海たちの餃子作りを手伝ってると思うよ」

「成程。ところで長春、君も確か爆竹の共同開発者だったな……これ以上にやばいやつを作ってたらしめない、よな？」

「そ、それは、えへへへ」

「……程々に頼む」

誤魔化すようにフードを深く被る長春。

これ以上問い詰めても主体である撫順が止まるわけではないので、指揮官は釘を刺す程度に留めておいた。

「長春も色々準備があるだろうし、二人の面倒は俺が引き継ごう。爆竹は使い切って構わないのか？」

「うん、失敗すると思って作ったスペアだから」

「分かった。パーティをよろしく頼むと他の皆にも伝えてくれ」

長春は短く一礼を済ませると、猫を思わせる動きで足早に去って行った。

「しゆきかん、はい！」

「ん？ これは、余った爆竹か」

「ふふん、雪風様が気を利かせて取っておいたのだ。感謝するのだ！」

胸を張って偉そうな態度を取る雪風を尻目に、指揮官は睦月から手渡された爆竹『鞍山7号』を手の中で遊ばせてみる。自動車の発煙筒に近い大きさで、不思議と手に馴染む感触があった。

「別に俺もやりたかったわけではないが……折角だ。東煌の伝統を体験してみるのもアリだな」

導火線に火を付け、軽く手前に放り出す。

間もなくタツプダンスを奏できるように爆竹が弾け、軽快な音と共に火花をまき散らした。

「ハッハッハッ、念獣退散なのだー!!」

「たいさーん!!」

「……元気だなお前たち」

指揮官は呆れつつも、駆逐組の無邪気さが少し羨ましく見えた。

残りの爆竹も間もなく使い切り、二人を重桜の宿舎前まで送ることになったのだが、その際雪風が気になることを言い残す。

「そういえば、ここのところずっと大鳳が東煌の陣営に足を運んでいったのだ」

「た、大鳳が？」

やや引きつった表情で答えると、雪風が続けて言う。

「何か背中に見慣れない楽器を背負っていたのだ。べ、別に雪風様も弾いてみたいとか思ったわけではないのだぞ！」

「楽器、ねえ……そんな趣味があるとは聞いてなかったが」

あるいは東煌の出し物に一枚噛むつもりなのか。何にせよ、指揮官第一の彼女がやることで不利益を被る可能性は低いだろう。ひよつとしたらサプライズがあるかもしれない。

そんなことを考えながら、二人と別れた指揮官はその足でロイヤルの陣営にも顔を出すことにした。

昨年同様、蒼穹を思わせる色彩のチャイナドレスに身を包んだベルファストをはじめ、東煌の衣装に身を包んだ面々が忙しく動いている。

よく見るとユニオンの艦船も混じっており、両陣営で共同作業をしているのが分かった。

「お帰りなさい、ご主人様」

来訪に気づいたベルファストが駆け寄ってくる。

彼女は必ず、お帰りなさいという挨拶を入れてくれるメイドであった。

わざわざ作業を中断させてしまったことに申し訳なさを感じた指揮官は、

「ああ、悪い。仕事の邪魔になるならすぐにも立ち去るぞ」

と断りを入れようとしたものの、

「いいえ、主をそのままお返ししては、それこそメイドの名折れでございます」

結局ベルファストに押し切られ、そのまま応接室へと案内されてし

まった。

普段は上品で洗練されたデザインが目立つ洋風の装飾がされているのだが、やはり春節に合わせて殆どが東煌の装飾と入れ替わっている。

逆さ文字で「福」と書かれた張り紙や、吊るされた灯籠、七福神である恵比寿の恰好をさせられた饅頭いしものひょうたんなどを見て、今頃執務室もこういう模様替えがされているのかと指揮官は考えた。

「その様子ですと、ご主人様はグロスターさんに追い出されてしまったのですね」

「ぼれたか。部屋の装飾などはメイドの仕事、貴方は外に出て指揮官としての職能を果たして来なさいと言われてな。取り合えず陣営を見て回ったものの、特別な事は出来ず仕舞いだ。次に顔を合わせたら小言が飛んでくるかもしれん」

苦虫を噛み潰した表情で言うと、ベルファストはクスリと笑ってこう答えた。

「いいえ。ご主人様がきちんと顔を見せることで、皆安心して作業に取り組めるのです。するとしないのでは、皆様のモチベーションに大きな違いが生まれます。この母港の中心は、ご主人様なのですから」

「……そういうものなのか」

「はい、そういうものでございます」

「なら、ほんの少しは意味があったのかもな」

差し出された飲み物へと口を付ける。

ミルクや砂糖で味付けをするイギリス式の調飲法とは違う、紅茶の色と香りをストレートに味わう中国式紅茶の清飲法。細かいところでも相手の文化に寄り添う心持ちに、さすがはメイド長と舌を巻いた。

「さて、そろそろ執務室の作業も終わった頃か……」

「お戻りになりますか、ご主人様」

「ああ、その前に明石のところへ寄るつもりだ。今年の衣装の儲けはまだかと気を揉んでいるだろうしな、全員分きっちり清算してくる」

ふと指揮官は、まだ今年の衣装を見ていない艦船がいたことに気づいた。

執務室の様様替えを手伝ってくれた組である。

指揮官の知る限りでは、あの場に居合わせたのはグロスター、イラストリアス、スウィフトシユア、ブラックプリンス、シリアスの計五人。

どうやら着替えも一緒に執務室で済ませるつもりらしく、最後に顔を合わせたときはまだ普段と変わらない恰好だったと記憶している。指揮官が追い出されたのにはそういう事情もあった。

万が一覗かれないよう、鍵までかける周到ぶりには信用がないのかと傷ついたが。

(今頃、自分の部屋に戻ってるだろうか)

明日になればどの道拜めるとはいえ、一度気になると頭から離れないのも事実である。

グロスターは現在秘書艦も兼ねているので、恐らく執務室に残っているだろう。

当人から戻ってくる必要はないと言われたが、余った時間で書類を片付ける程度はできる。

残りのロイヤル組は、ここで探せば見つかるかもしれない。

何より目の前のベルファストに聞けばすぐに解決するはずだ。

或いは余計な寄り道をせず、明石の要件を済ませて自室に戻り、明日に備えるか。

指揮官の選択は――

シリアスを尋ねる

「春節おめでとうございませす、誇らしきご主人様。卑しきメイドであるシリアスのために足を運んで頂けるなど、これ以上に喜ばしいことは……」

シリアスの話す言葉が右耳から左耳へと抜けていく。

指揮官は今、上の空であった。

ベルファストから彼女が自室に戻ったと聞き、部屋の扉を叩くまでは至って正常であった。

しかし中へと招かれシリアスの恰好を見た途端、彼は一言も発することなくソファに腰を下ろし、ひたすら自身の頬をつねっては痛みがあることを確認した。

それ以降、まるで魂が抜けたかのようにぼんやりとしているのである。

「……前掛け」

ようやく絞り出した第一声は、単語として聞くと意味の分からないものだが——目の前のシリアスと掛け合わせれば、誰もが納得してしまうだろう。

結論から言えば、今回の春節衣装において最も服の役割から乖離しているのがシリアスのドレスであった。

白のストッキングにガーターベルト、銀のヒールとロイヤルメイドの意匠を残しつつも、深い藍色で統一されたチャイナドレスが細いウエストを際立たせている。

それと対比させるような、ウエディングドレスの材質に近い純白のストールがアルビノの肌に馴染み、薄幸の少女に映るほどの雰囲気を醸している。

しかし、それらの要素全てをひっくり返してしまうのが、奇抜な胸部のデザインだ。

通常チャイナドレスといえば、袖の布地を分けた洋服風か、あるいは一体の布地を裁断した旧式を思い浮かべる人が大半なのだが、シリアスのそれはどちらにも分類できない。

何故なら本来隠されるべき縦長の乳房が、ほぼ丸出しの状態だからだ。

正確にはチャイナドレスと同じ生地ของ布が一枚、暖簾のように覆い被せられている。

そのカバー範囲は水着より遥かに心許ない。下乳に至っては裸も同然である。

胸パッドと呼ぶには余りに先鋭的で、そもそも曲線ですらなかった。

垂れ布とでも呼んだ方がしつくりくるだろう。

「その衣装のデザイン、誰かに相談したのか」

「通りがけのチェイサー様が、こうすればご主人様がお喜びになると耳打ちを」

「あ、ああ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～ういえば似たような恰好をしていたな」

発祥の元を聞いて、指揮官はようやく納得がいった。

出身はユニオン、所属はロイヤル、かつて消息を絶った地が東煌にあたる台湾と、三陣営に関わる多文化艦船のチェイサーは独特なセンスを持っている。最初に生乳前掛けを実行したのも彼女だった。

例えば、ロイヤルの艦船の着せ替えが妙に文化同士の掛け合わせたデザインなのも、チェイサーによる入れ知恵かもしれない。

「ご主人様、もしやシリアスの恰好がお気に召しませんでしたか？」

やはり、卑しきメイドの分際でこのような晴れやかな衣装など」

「い、いや。一個人の感情としては、その、気に入ってる。とても、非常に」

一軍を預かる者としてあるまじき発言の自覚はあるが、男の性に嘘は付けない。

それに邪な部分を除いても、濃藍の色合いは白髪赤目のシリアスによく似合っていた。

少し気分を落ち着けようと、差し出されたお茶へ口を付ける。

やはり東煌に合わせた中国茶だったが、ベルファストの淹れたそれに比べると数段劣る風味だった。

シリアスの家事見習いは未だ継続中らしい。

「それより、ここに戻ってきたのなら執務室の模様替えは済んだんだろう。手を貸してくれて助かった。おかげで陣営の皆に顔を出す時間も出来て……それで、グロスターには何か言われてないか」

ようやくまともな話題へと移れた指揮官だったが、聞いた途端あからさまに気落ちしたシリアスを見て、この後の流れが大方予想できた。

「グロスターさんには『灯笼を椅子に飾ろうとする発想が理解に苦しむ』とお叱りを受け……」

「ああ」

「こちらに戻った後は料理を手伝おうとしたのですが、『形の歪な中身抜きギョウザを混ぜるな』と班を外され……」

「うん」

「せめて普段通りの身辺警護をと女王陛下に近づけば不興を買ってしま……」

「見事に地雷踏んだな」

まさに踏んだり蹴ったりである。

胸部装甲という女王禁句ワードを堂々と犯したことに当人は気づいていない。

恐らく「その駄肉を見せつけるのは当てつけかしら、邪魔だわ！」とでも言われ、追り返されたのだろう。

「輝けるご主人様を曇らせる数々の失態……弁明の仕様もごさいません。せめて粗相を働いたこの卑しきシリアスに、誇らしきご主人様の手で罰を」

「分かった、分かったから脱ごうとする手を止めてくれ」

どうしてこのメイドは、何かを仕出かすたびに身体で払おうとするのか。

過去にまんまと乗ってしまった己が悪い——心の中でそう返される。

指揮官は自分自身に論破され、言葉に詰まってしまった。

「申し訳ございませんご主人様、着たままのご奉仕がご所望でしたとは……シリアスの浅慮をお許しください」

シリアスはシリアスで、完全に指揮官を置き去りにヒートアップしていく。

姉のダイドーも言えることだが、一度振り切るとこちらの話に中々耳を貸さない節がある。

(ああもう、なるようになってしまえ)

諦めに近い感情が、自制心を放棄させた。

それに応じるように股間の剣がいきり立つ。白くたわわな双球を眼前で揺らされ、こちらも我慢の限界を迎えたようだ。

指揮官は何も言わず、座ったまま足を大股に開いた。

するとシリアスがその間へと移動し、下に敷かれたカーペットへと膝を着く。

普段もそのぐらい察しが良ければ……と内心愚痴をこぼしたが、それより今は目の前にぶら下がった果実をどうするかが先決である。

「誇らしきご主人様、どうぞいつものようにシリアスの淫猥な胸で、御身の猛りをお鎮め下さい」

直ぐにでも逸物を挟まれない衝動が沸き上がるも、一旦それを抑え、指揮官はまず自身の好奇心を先に満たすことにした。

まずは小手調べにと、胸の垂れ布の内へと手を滑り込ませる。続いて、両側から押し上げるように圧を掛け、ゆっくりと揉みしだいてみる。

たつぷりと乳肉の詰まった重量感と瑞々しく張りのある肌の感触は、紛れもなく生乳であった。

手の動きに合わせてまったりと形を変え、ひしゃげる乳肉を堪能する。

そして屋台の暖簾をめくるように布を持ち上げると——ぷっくりとしたピンクの突起が現れた。

「……ッ、何も着けてないのか……」

触れた時点で分かり切っていたことではあったが、改めて口にするほど衝撃的なのも事実だ。

男なら誰もが二度も三度も見てしまうほどの爆乳が、たった薄布一枚で仕切られている。

もし強風が吹きでもしたら、間違いなく大衆の面前に乳肌だけできなく、乳首も晒されてしまうだろう。

桜の蕾とでも言って誤魔化そうか——そんな滑稽な考えが浮かび、指揮官は思わず乾いた笑みを浮かべた。

そうするしかないほどの、痴女っぷりであった。

「明日はせめて、ニップレスを付けような……」

「んっ、はあっ、ニップレスでございますか」

「そりゃ、万が一見えたら色々まずいじゃないか……もう既にまずいの域を超えてる気はするが」

「誇らしきご主人様は、シリアスの乳首がお気に召さないのでしょうか、んんっ」

「気に入らないとかじゃなくて、ああもうまどろっこしい」

両手で胸を寄せると、指揮官は迷わず谷間の合わせ目に吸い付いた。

コリコリと徐々に固さを増していく突起を二つ、まとめて口内へと頬張つてみせる。

口いっぱい広がる母性の柔肉に幸福感を覚えながら、舌を駆使して乳輪をなぞるように愛撫を始めた。

外から内へ、ゆっくりと輪を描く動きで舐め上げ、先端にたどり着くと舌先でそれらを弄ぶ。

すると、シリアスの方からも甘い喘ぎが漏れ出し、ますます情欲が高まっていく。

「あ……誇らしきご主人様……こんな激しくっ、シリアスの胸を求めて、下さるのですね。またしても早とちりをしてしまった蒙昧なメイドの乳を……もっとお吸いになってくださいませ」

弾力に満ちた乳肉は吸う力にも負けず、きれいな球形を保っている。

もつとその形を歪ませてやろうと、指揮官は一度口を離し、今度は片方ずつに狙いを定めた。

左右の乳首へと交互に吸い付き、まろやかな肌触りを味わいながら、先端の固い突起を唇で啜えて舐め回す。

がつつりと乳房をむさぼる様は、母乳の味を覚えたばかりの赤ん坊のようであった。

「はあ、んふう……誇らしきご主人様、シリアスの胸のお味は、いかがでしょうか。心ゆくまでお吸いください……んっ」

シリアスは無意識のうちに、指揮官の頭へと手を添えていた。

甘える幼子に対するような、優しい手つきで髪を撫でていく。

不器用な手榴であるが、脳筋な彼女にも母性本能があるのかと思うと、それすら興奮の材料になった。

やがて満足した指揮官が口を離すと、血の集まりによって赤みを増した乳首が二つ出来上がっていた。

「裸の乳首を吸うよりも断然興奮した……おかげで俺も辛抱堪らん」

チャカチャカとベルトの外れる音がする。

間もなく姿を見せた指揮官の強直は限界まで膨張しており、早く欲望を吐き出したいと急かすようにビクビクと跳ねていた。

「……いつものように、ご主人様が動かれますか」

「いや、今日はシリアスの方から頼む。受け身になりたい気分だ」

「はい、誇らしきご主人様のお望みのままに」

「下準備を忘れずにな」

シリアスが引き出しからボトルを取り出す。

ラベルには明石印の肉球が押印されていた。

蓋を開けてチューブを絞ると、どろりとした粘性の液がシリアスの谷間へと垂れていく。

元々、明石が自身の所有する工場の機器類に使用するための潤滑剤だったが、指揮官の入れ知恵によって用途別に組成を変えたものが作られたのだ。

今シリアスが胸に塗り込んでいるのは、グリセリンを配合して保湿性を高めたものであり、より乾きにくい性質を持っている。

加えてグリセリンと水の化学反応による発熱性が、じんわりとした温もりをもたらしてくれる。

要するに——パイズリに適したローション、というわけだ。

「ん、しょ……それでは、本日のご奉仕に入らせていただきます」

乳を揉み込み、丹念に潤滑剤を馴染ませたシリアスが、いよいよ剥き出しの下乳を肉棒の先端へと押し当てた。

ぐにゆりとした質感が、猛々しいペニスを迎え入れていく。

亀頭が吞まれ、竿が進んでいくほど、むっちりとした柔らかな肉が絡みつき、押し潰すようにして包み込んでくる。

やがて肉房全体がすっぽりと乳内に収まり、完全に外から見えなくなった。

チャイナドレスの垂れ布が暖簾に見えるのもあって、あたかも豊満な乳中に入店してしまった気分である。

「おあ……温い……」

感嘆の溜息が指揮官から洩れる。

ふくよかな巨乳に挟み込まれた肉竿は、温感ローションのぬめりにより痛みを感じることもなく、まろやかな快感に覆われている。

指揮官が挿乳の感慨に耽る一方で、シリアスもまた猛る肉棒の熱を谷間で受け止め、しばらく恍惚に浸っていた。

（ああ、本日もこの卑しきシリアスの駄乳が慰めのお役に立てると思うと、メイド冥利に尽きますね）

このように奉仕への嫌悪は一切なく、むしろ積極的に指揮官を悦ばせたい一心なのである。

その忠誠心と献身はメイド隊の中でも傑出しているが……それら全てが頓珍漢な方向に発揮されるのはご愛嬌というべきか。

「シリアス……そのままでも気持ちいいが、そろそろ動かしてくれないか」

「……はっ、も、申し訳ございません。シリアス、直ちに胸を動かして……胸を……」

指揮官に声をかけられ、ようやく正気に戻ったシリアス。

慌てて左右の胸を掴み上げ、動かそうとしたものの再び手が止まってしまう。

「ど、どうした?」

「誇らしきご主人様……お恥ずかしながらこのシリアス、ご主人様に胸を委ねるばかりで、自身の不得手を失念しておりました」

「え、あ……」

指揮官も失念していたことだが、シリアスに胸でもらう時は主に彼の方から腰を打ち付ける縦ズリの割合が多く、彼女から能動的に動いてもらうケースは少なかった。

原因を挙げるとするならば、あの水着衣装のせいだろう。

真夏のセイリオスと名付けられたそれは、あからさまに乳内へと誘惑するための罠——ぱっくりと空いたズリ穴が備わっている。

乳恋しい指揮官棒が抗えるはずもなく、酷いときには一日中、岩陰でシリアスの乳丘を犯していたこともあったほどだ。

当然それでは、シリアスの奉仕術が向上するはずもない。

「そう気負わなくても大丈夫だ……俺の言う通りに動かしてみてくれ」

「なるほど、誇らしきご主人様自らが先導を」

そんな大仰な事でもないんだが、と思いつつも、自分好みの動きを仕込ませる良い機会である。

やる気に満ちた肉棒が更に固さを増し、乳内でピンと反り返っていた。

「まずは上下にたぶんと揺らすイメージで、ゆっくりと……」

出されたオーダーを復唱すると、シリアスが掴んだ乳房をずり下ろし、そそり立つ逸物を扱っていく。

一往復がゆっくりなためか、弾力のある巨乳がぐにゆりと歪み、再び元の形に戻る様をじっくりと眺めることができる。

同時に、中の肉棒が潤滑油で滑りの良くなった乳肌に擦られると、得も言われぬ快感が全身を伝播していく。

手肌とも膣内とも異なる、乳特有の柔肉で包む心地良さはまさに母性の象徴であった。

「今度は付け根辺りにおっぱいを固定して、小刻みに……こう、でしよるか」

先程までの乳全体を骨盤に打ち付ける扱き方から、自分の手で揉み上げてたぶたぶ揺らす扱き方へと変化する。

前者が竿全体をねちっこく責めていたのに対し、後者はカリ首周辺

を揉み扱き、手淫のリズムに近い快樂をもたらしてくれる。

「左右交互に擦り上げる……明石様から頂いたろーしよんがなければ、こども滑らかに動かせなかつたでしょう」

互い違いに乳房を動かすと、例の乳布がぺろんと浮き上がり、熱心に吸った乳首がちらりと顔見せする。

口に含んだ柔らかさを思い出し、指揮官は余計に股間が熱くなつていく。

「くっ……はあ……」

最初は熱心に指示を出していた指揮官も、次第にシリアスの乳戯に溺れ、喘ぎ声を漏らすだけとなっていた。

やはり技術的は上手いと言えないが、持って生まれた素材が反則的なのだ。

GやIでさえ、シリアスの胸の前では貧乳と言わざるを得ないだろう。

その桁違いの爆乳は次第に激しく、肉棒をなぶっていく。

柔乳で抱き締めるようにして逸物を圧迫すれば、程よい乳圧が精液を搾り出そうと催促してくる。

このまま腰を突き上げて滅茶苦茶に乳内を犯したい——そんな衝動に駆られ、指揮官は歯を食いしばった。

今日ばかりは攻めに転じるのを禁じ、ただ与えられる快樂によって絶頂を迎えたいのだ。

「くお……やばい、腰が浮く……」

限界は近かった。

射精を求めて先走りがとめどなく溢れ、谷間に絡みついていく。それもまた、パイズリ奉仕の熱を加速する一因となっている。

汗と汁と潤滑油が混ざり合った乳内は、じゅぶりじゅぶり吸い付くような水音で満たされ、ひたすらに淫靡であった。

「シリアス、もう、ダメだ」

辛うじて口に出した言葉はまさに切羽詰まっております、堪えるのも精一杯な様子だ。

「はい、どうぞ誇らしきご主人様、シリアスの胸に熱い精液をお恵み下

さい。春節を迎えて初めてのお射精を、シリアスの、胸でっ」

せり上がる強烈な射精感のまま、指揮官はありったけの精を乳内へとぶちまけた。

最後ばかりは我慢が効かず、腰を思いきり打ち上げてしまう。

しかし辛抱強く堪え、溜めに溜めた分を込めた一突きであったため、神経が焼き切れるほどの絶頂感もたらされた。

噴射した精液の多くは乳内射精として中に納まり、僅かに飛び出たものが乳に掛けられたドレス布を汚していく。

東煌の新年における初射精、それを特別な衣装のシリアスおっぱいで迎えたことに充足感を感じていた。

「誇らしきご主人様、ご満足頂けましたでしょうか」

「ふう、ふう……言うことないぐらい、良かった」

谷間から精液を垂らしたまま、シリアスはこの日一番の明るい表情に満ちていた。

しかし、この催しがたった一度の狭射で終わるはずもない。

この後完全にブレーキの壊れた指揮官により、抜かすの馬乗り五連発を決められる未来が彼女を待ち受けていた。

無論、衣装が一着ダメになったのは言うまでもない。

イラストリアスを尋ねる

「イラストリアス様、でございますか」

「ああ、戻って来てるか気になってな」

指揮官はイラストリアスの所在を確かめることにした。

闇夜を照らすロイヤルの暁星^{あかほし}であり、サディアの伊達女であるリツトリオをして、自らよりも輝かしい艦船と認めさせる実力者。

一たび戦場に出れば、前衛を守護する固い装甲と高い制空能力により、艦隊を光り輝く凱旋へと導いてくれるだろう。

そんな彼女であるが、普段は非常におっとりとした性格と優雅な立ち振る舞いで、上品なお嬢様を思わせる清楚ぶりである。今までの着せ替え衣装も、イラストリアスのイメージを尊重した清純なものが多い。

ただし——男の目を惹いてしまう、ある一点の破壊力も共通しているが。

ベルファストによれば、イラストリアスは既に自室へと帰っているらしい。

当人はまだまだ手伝いたそうな雰囲気であったが、ロイヤルネイビーの中でも上位に属する彼女の手を煩わせてはメイド隊の立つ瀬がない。

恐らく指揮官がそうであったように、イラストリアスもベルファスト辺りの強情さに押し切られてしまったのだろう。

「イラストリアス、ちよつといいか？」

中指の第二関節で軽く三回。

なるべく驚かさないうよう、彼女の部屋のドアをノックする。

程なくして扉が開かれると、慈愛に満ちた優しい声音と共に麗しい銀髪が姿を現した。

「まあ指揮官さま、ご機嫌よう」

海よりも深い紺碧の瞳に見つめられ、ドキリとさせられる指揮官。

溢れ出る母性があるまま空気となつて満ちていると錯覚するほど、イラストリアスの部屋からは優しい香りが漂ってくる。

彼女の恰好は、やはり東煌の伝統に倣ったチャイナドレスであった。

しかしその下には、普段と同じ純白のガーターベルトとストッキングを着用しており、大胆に開いたスリットから瑞々しい臀部が露になっっている。

艶やかな太ももの肌を目で追っていくと、必然的に行き着くのはあまりに主張の激しい爆乳。

装甲空母の重心の高さを再現せんとするヒトの思念が生み出した、アンバランスなほどに豊満なモノは艦船達どころか、時より現れる別世界の訪問者をも唸らせるほどだ。

歩くだけでぽよんぽよんと弾む音が聞こえてきそうである。

「もう……指揮官さま？　じつと見つめられるのは嬉しいですけど、お部屋の前で棒立ちのままでは不審がられますわよ」

「え、ああ、すまない」

誘われるまま足を踏み入れる指揮官。

鼻先で感じていた甘く濃厚な強い芳香が全身を覆っていく。

寒さで固まった身体がほぐされていくようだ。

「良い香りがするな」

「アイリスの花ですわ。アヤメと呼ぶ方が分かりやすいでしょうか」

「馴染みがあるのはそれだな。で、あっちの白い花はユリか」

「はい。折角ですから、この衣装に合わせたお花も飾ってみたくて」

アイリスの花は鮮やかな紫色で、花びらの付け根にある目のような模様が印象的である。

そして部屋の隅に置かれた白磁の花瓶には、ユリの花が数輪ほど咲いている。

部屋に充満する優しい香りには、これらによるアロマテラピーの側面もあるらしい。

気づけばイラストリアスの手が腰へと回され、指揮官はベッドの隅まで誘導されていた。

隣に座った彼女の胸元がたゆんと揺れて、今にも服からこぼれ落ちそうである。

「それで、指揮官さまはどのようなご用件でいらつしやったのですか」
「ああ、それはだな……それは……」

ふああ、と気の抜けた声が発せられる。

指揮官の欠伸に思わず笑ってしまったのか、イラストリアスは手に持った扇子を開いて口元を隠していた。

「つと、すまない。寝る時間にはまだ早いというのに……」

「きつと身体が疲れているからですわ。この部屋のリラックス効果が効いている証拠ですもの」

「リラックス効果ね……感受性の高い方ではないと思っていたが、案外そうでもなかったらしい」

「よろしければ、少しお休みになられてはいかがですか」

「ここでか？」

「はい、イラストリアスもご一緒しますよ」

柔らかな笑みを浮かべて両手を広げるイラストリアス。

胸の中に飛び込んでおいで、と言わんばかりの受け入れ態勢である。

「えつと、ご一緒するというのはつまり」

「ふふつ……せつかくの祝日ですもの。指揮官さまが今思い浮かべていることで、甘えさせてあげてもいいですわ」

からかわれているのか、と一瞬疑った指揮官だが、イラストリアスはあまり冗談を言う娘ではない。思わせぶりの発言こそ多いものの、線引きはきちんとしているタイプである。

つまりこれは、特別なお誘いに他ならない。

年に一度の祝日で、部屋に二人きりという状況だからこそ成立するひと時。

「なら……少しお言葉に甘えようかな」

眠気に誘われた指揮官が要求したのは――

「もう……膝枕してほしいなんて、子供みたいな指揮官さま。はい」
♡

つるつるとした生地に覆われた膝へと頭を乗せる。

滑らかな絹に程よく肉の付いた太ももが合わさり、後頭部に心地よ

い柔らかさがもたらされる。

鼻孔をくすぐる花の香に、木漏れ日のような優しい声音。

イラストリアスの膝枕は森林浴に勝るとも劣らない、安らぎと温もりを与えてくれる。

「何だか悪いな……ふああ……模様替えのお礼を言いに来たつもりが、余計に世話になってしまった」

「いいですよ。あれはほとんど、グロスターのおかげですから。それに指揮官さまも、ただお礼を言いに来たわけじゃないですよね？」
「はは、バレたか。どうしても一目、着替えた姿を見たくてな。はやる気持ちを抑えられずこの通りだ」

「ふふっ……本当に子供みたいです」

豎琴を奏でるように流れる指が、ごわついた髪を撫でていく。

慈しみのこもった指使いは、さざ波に揺られるような心地よさをもたらしてくれる。

微睡みにより視界がぼやける中、指揮官はもう一度イラストリアスを眺めてみた。

英国の洋風衣装とは正反対の恰好だが、少しも優雅さが損なわれることはない。

むしろチャイナドレスで引き立つボデイラインの美しさが、一層彼女を魅力的に仕立てている。

そこに対比して際立つ胸の大きさもまた、視線を向けずにはいられないほど蠱惑的だ。

また下乳に位置する服の結び目——ひし形の穴から覗く谷間は、柔肉同士がきつく密着して魅惑のゾーンと化している。

思わず視線が吸い込まれてしまいそうだ。

「またじつくりとお見つめになって……改めて感想を伺う必要はなさそうですわね」

イラストリアスに指摘され、指揮官はまたしても見惚れていたことに気づいた。

「すまん、あんまりにも様になってるから、つい」

「見て頂いていいのですよ。こうして他の陣営の衣装を頂けるのも、

指揮官さまのおかげなのですから」

「はは……それこそ商魂逞しい明石や、衣装作りに精通したヴィクトリアスたちがいるおかげ……んんっ……」

「眠たくなってきましたか？ このままイラストリアスの膝の上でくつろいで下さい」

「すまん……三十、いや十五分経ったら起こしてくれ……そんなに長居する、わけにも……」

睡魔に意識を奪われ、重い瞼を閉じる。

間もなく指揮官は深い眠りへと落ち、静かな寝息が聞こえ始めた。

「おやすみなさい、指揮官さま……おそばにいられることが、イラストリアスにとって何よりの幸せです……」

……

……

……まあ、こんなにも遅しく……

イラストリアスが……差し上げますわ……

甘い蜜に浸るかのような幸福感が下半身を支配している。

ぼんやりと眠りから覚めた指揮官は、寝起きの肌感覚がやけに敏感なのを察した。

血流が増し、いきり立つ分身を宥められてる。

しなやかに這う五つの感触——まるで意思を持った生き物のようだが、これは人間の指だ。

それで竿肌をソフトになぞられ、快感の震えが指揮官の背中を走る。

ゾクゾクと駆け上がる感覚は不快ではなく、むしろ身体が喜んでしまふ。

そんな反応を察してか、今度は竿全体が包まれる感触へと変わっ

た。

柔らかい手のひらに掌握され、ぴくりと震える肉棒を上下にゆつたりと扱かれる。

単調なりズムのようで、手首を捻って変化を付けてみたり、カリ首の周辺を集中的に扱いたり、刺激に飽きさせないテクニックを披露され、堪らずうめき声があがった。

「あら、お目覚めになりましたか指揮官さま」

イラストリアスの声がぼやけて聞こえる。

変わらぬ膝の温もりに加え、頭に手を添えて優しく撫でてくれる。

その反対の手は指揮官の下部へと伸び、断続的な快楽を与えているというのだから驚いてしまう。

性の喜びと精神の安らぎ、その二面性を以って労りの居場所を与えているのだ。

「……まあ、な。そんな風に弄られたら寝てもいられない」

「うふふ、ピクピク震えて可愛かったですよ」

「意地悪なことを……」

「いやですわ、イラストリアスは指揮官さまに癒しを与えたいだけですよ」

そう答えながら、イラストリアスはいつの間にか手元に置いてある小瓶を取り、中の液体を左手に塗していく。

薄い黄色の光沢が目立つ、とろみのあるオイルだ。

ほんのりと甘いアーモンドの香りが漂う。

「マッサージ用のオイルですわ。指揮官さまのお肌に合うものを選んでるので、安心して身を任せてくださいね」

「オイル？ いやまさか」

「はい、そのまさかです♡ じつとして、リラックスくださいませ」

再び股下へと手を伸ばすイラストリアス。

鼠径部の三角状の窪みから手を滑らせていき、睾丸の下へ。

お尻の穴に差し掛かる部分も優しく、丁寧に。

リンパの流れに沿ってじっくりとほぐしながら、オイルを満遍なく塗りたくっていく。

繊細な指先が往復するたび、じれったい刺激に耐えかね肉棒がびくびくと震えてしまう。

「気持ちいいですか、指揮官さま。歯を食いしばったりしてはいけませんよ。素直に身を委ねてください」

決して力み過ぎず、軽く擦る程度の摩擦で睾丸を揉む。

普段軍服によってぴしゃりと締められ、血流が溜まりやすくなっている箇所。

そこを丹念にほぐされ、股間周りの血行が促進していく。

コブ状の突出部が柔らかくなったところにオイルをたっぷり塗り、皮を伸ばすようにしてマッサージ。

当然ペニスに流れる血液の巡りも良くなるため、今や逸物は天井に向かつてピンと反り返っている。

自身のマッサージの効果を実感したのか、イラストリアスは緩んだ顔で指揮官のへそ回りにも指を這わせた。

ちりちりと這い回る感触にややたるんだお腹がぴくりと反応している。

「あんまり撫でられると、その、くすぐったいのだが」

「ふふふつ、本当にそれだけですか？」

「……焦らすのを楽しんでないか、イラストリアス」

「催促するならきちんとおねだりしなきゃダメですよ？」

「うっ」

「冗談です、可愛い指揮官さま」

「やっぱり楽しんでるじゃないか」

一方的に弄ばれる状況にやや拗ねた顔を見せる指揮官。

しかしその数秒後、指揮官は思わず息を？むことになる。

——ぶるん。

イラストリアスは胸元に指を引っ掛けると、そのまま下へずり降りした。

チャイナドレスの圧迫から解き放たれた双乳が豪快に弾む。

きつく締めていた分、解放された乳肉のボリューム感は圧巻の一言。

古代ギリシヤの杯には乳房をかたどったものがあるらしいが、恐らく当時存在したいかなるボウルでもこの柔乳を覆うのは不可能だろう。

艦船に成長はない、というのがこの世界での通説にも関わらず、その爆乳は年々大きさを増しているのではないかと専らの噂だ。

彼女の乳を「大きい、柔らかい、反則」と感じる多くの思念が、全てメンタルキューブへと流れ込んでいる説すら上がるほどである。

「うおおっ……」

話題の象徴を目の前にぶら下げられ、目が釘づけになる指揮官。

ほんの少し首を上げるだけで、口先が淡い桃色の乳首に当たってしまいそうなほどの近距離。

しかしそれだと折角の膝枕から頭を浮かせてしまう上、首を痛めてしまう可能性もある。

それを察してなのか、イラストリアスはそつと手を指揮官の額に乗せ、寝たままの体勢でいることを促すと、少し背中を傾けて前傾姿勢へと移った。

「はい、どうぞぞ♡」

——ふにゅん。

顔全体を覆う、もっちりとした柔乳の感触。

K点越えのサイズだからこそ、前のめりになるだけで容易に顔パツクを可能とってしまう。

ふくよかな質感とハリを兼ね備えた乳肌は上質な布にも勝り、ほのかな温もりが身体の強張りを解きほぐしていく。

窒息しないよう配慮したのか、最初の抱擁は数秒足らずの時間であつたものの、魅了されるには十分だった。

「これで機嫌は直りましたか、指揮官さま」

こんなサービスを受けてしまつては、もう押し黙るしかない。指揮官は拗ねていた自分が恥ずかしくなった。

しかし身体というのは正直なもので、とある一か所はますます元気にいきり立っている。

当然、触れている彼女に気づかれないはずがない。

「まあ、お疲れマラがすっかり元気になってしまいましたね♡」

「は、恥ずかしながら……」

「いいんですよ。最初に言った通り、指揮官さまを癒してあげるためですもの。身体のカミが抜けるに従って、生理的現象を催すのは自然なことですわ」

オイルに濡れた親指で、竿の裏筋をくりくりと刺激する。

そのまま下へと伝っていき、だらしなく垂れ下がった玉袋を軽くノックすると、それに呼応して亀頭が小刻みに震えた。もう辛抱堪らんといった様子で、鈴口から我慢汁をちろちろと漏らしている。

「イラストリアス、その」

「はい？……ふふふ、分かっていますわ。指揮官さまの心の声がお顔に出ていますもの。こちらでもたっぷり、甘えさせてあげましょう」

再びイラストリアスの身体が前へと傾く。

今度は片方の手を指揮官の後頭部へと回し、首を痛めないよう支えている。

そして重力に従い、ぷるりと零れ落ちていく胸が指揮官の口元へ到達すると、彼は迷わずその豊満な果実を口へと含んだ。

瞬間、口内を柔らかな肉感が満たしていく。

甘い香気を同時に含んだからか、それとも彼女の母性に当てられたか。

仄かに熱を帯びた乳房から、ミルクの大海に全身が浸るような蕩ける味わいが広がる。

それは次第に肺から心臓へ、そして全身へと行き渡り、脳にさえも届いていく。

日常の煩雑さを忘れ、童心に返って乳を吸うというのは、特別な幸福感をもたらしてくれる。

唇を窄めて吸い付くと、乳輪まですっぽりと口内に含まれ、更に舌先を絡めて乳頭を圧迫するものだから、イラストリアスの方も思わず声が洩れてしまう。

「もう、えっちな吸い方する赤ちゃんですわ、ふふふ。いい子、いい子」

しかし彼女も、指揮官が乳吸いに夢中な様子を微笑ましく見ているだけではない。

柔乳を顔面に軟着陸させたまま、オイル塗れの左手を巧みに動かして肉棒を悦ばせていく。

丹念にオイルを塗り込んだ肉棒は、狭い手筒の中を滑らかに出し入れされ、根元から亀頭の先に至るまで長いストロークを繰り返される。

かと思えば、親指と中指で結んだ輪をカリ首にかけて、短い往復で射精感を促される。

肉竿の僅かな凹凸や血流の脈動に巻き付くように絡む手指。

執拗に、ねつとりと逸物を扱かれる。

やがて手筒が上部へと集中していき、亀頭を激しく弄られる。

それに対抗して、たぶんたぶんに揺れる胸へとむしやぶりつき、迫る快感をどうにか誤魔化していく。

指揮官の鼻息はもう、射精への切迫感で相当荒くなっていた。

「イ、イラストリアス」

ちゅぽん、と唇を胸から離して切なげな声を上げる。

上り詰めた快樂が限界に近く、そろそろ射精させてほしいとねだっているのだ。

赤子のように潤んだ目をした彼に母性本能をくすぐられたのか、イラストリアスもますます慈愛の感情が深くなっていく。

「心配いりませんわ。焦らすつもりはありませんもの。ただ……もつと喜んでいただきたいので、ちよつと失礼しますね」

指揮官の頭が、膝の上から外される。

何を思ったのか、イラストリアスは授乳手コキを中断し、露出した胸も再びチャイナドレスへとしまつて立ち上がったのだ。

思わぬ寸止めと彼女の温もりが頭から離れてしまったことへの寂寥感から、一瞬表情を曇らせる指揮官。

だが程なくして、彼はその意図を理解する。

「少し腰を持ち上げて、よいしょつと……お身体は苦しくありませんか?」

イラストリアスは仰向けの指揮官の腰へと手を回し、自身の膝の上へと誘導していく。

先ほどまで頭を乗せていた太ももの上にお尻が乗ると、いよいよどういう行為に移ろうとしているのか察しがついてしまう。

「そんなに期待の籠った目を向けられると、イラストリアスも照れちやいます」

そう言いながら、ドレスの中でパツパツに盛り上がった両乳を持ち上げて、天に向かって伸びた肉棒の先端へと宛がう。

最初に膝枕されたときに熱視線を浴びた、くぱっと開いた下乳のひし形穴。

そこに、オイルでドロドロにコーティングされた肉棒がゆっくり呑み込まれていく。

服にきつく締められているだけあって、押さえつけていないにも関わらず圧迫されるほどの乳圧である。

まるでたわわな餅の中に指を突っ込むかのように、侵入した肉棒は密集した乳肉に取り込まれ、完全に乳内に収まる頃には全く外から見えなくなってしまうた。

「まあ、先ほどまで手の中で感じていた指揮官さまの熱が、胸の中でじんわりと広がっていきますわ。このまま融けて一つになってしまいたい……♡」

愛おしげに両手で胸を抱きしめるイラストリアス。

当人からすれば、暖かな陽光の中で抱擁している感覚なのだろう。

しかし指揮官からすれば、それは多少収まっていた射精感を一気に引き戻すほどの快感をもたらす行為だ。

着衣できつきの谷間に捕らえられ、暴れる肉棒の抵抗も虚しく圧倒的な乳壺の肉感に取り押さえられてしまう。

わざわざ胸元がキツイと訴えるドレスの中に胸を戻した狙いは、見事的中したといえる。

「ドレスの造形をこのようにして正解でしたわ。だって、指揮官さまのお元気になったマラをすぐに挿乳できるんですもの♡」

そういう意図で結び目を調整していたと知り、ますます肉棒の熱が

高まっていく。

指揮官の胸好きは周知の事実であるとはいえ、わざわざそのフェチズムに寄り添ってくれるのだから、感慨の我慢汁が垂れてしまう。

——ぬぷっ、とぷっ、ずぶぷっ。

イラストリアスが胸を持ち上げ、勢いよくずり降ろす。

その一動作が滑らかなのは、やはり丁寧に塗り込んだオイルの賜物か。

もっちりとした谷間から、次第にアーモンドやユリの香りとは異なるいやらしい匂いが漏れ始める。

それは紛れもなく、肉棒から発せられる雄のニオイ。

がちりちりと乳肉に押さえ込まれても、その香ばしい香りがイラストリアスの鼻孔に漂うのを防ぐことはできない。

だが、彼女は嫌がるどころかむしろ恍惚に満ちた表情で、そのニオイを掻き出そうとリズムよく両乳を動かし、骨盤へと叩きつける。

——ぱちゅん、ぱちゅん、たぱんたぱん。

重力に倣って落下するだけでも十分な乳圧があるというのに、その上更に乳肉を歪ませて谷間を窄めるものだから、ズリ穴の締めりはどんな名器にも勝るほど仕上がっていた。

しかもこの乳肉は、次第に逸物の形を覚え、より快楽を与えようとぴっちり密着してくる。

まるで谷間が大きな生き物の口で、肉棒を余すことなく咀嚼しているかのようだ。

「だらしなく緩んだお顔、とつても可愛いですわ♡ もっと、もっと、イラストリアスの胸に溺れて下さい♡」

更に胸を抱き寄せて、パイズリの締め付けを増していくイラストリアス。

着衣越しでも大胆に弾み、乳肉をたゆませる淫靡な光景により、視覚からも責め立てられる。

「ああ、おっぱいで扱ったたびに指揮官さまのいやらしい匂いが広がって、ドキドキが止まりませんわ。イラストリアス、どうにかなっちゃいそうです……♡」

玉袋がキュツと持ち上がり、グツグツに煮えた欲望の塊が尿道へと充填されていく。

はじめはゆっくりだったパイズリのストロークも、指揮官の臨界点が近づくとつれてより激しいズリコキに変化している。

——ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ、ぱんっ。

オイルでたっぷり濡れた竿肌を滑るように扱き上げる乳の重さが、より指揮官の興奮を煽る。

加えて、知らぬ間に浮き上がった腰がより乳穴との結合を密接なものにしていった。

何度も何度も、粘ついた音を立てて乳内へと出し入れされる。

血流は今や肉棒の中を駆け巡り、限界まで膨張した海綿体が欲望の飽和を訴えていた。

そして、絶頂が近づくほど深い谷間の中を反射的に突き上げそうになる。

「気持ちいいんですね、指揮官さま♡ 最後は快感のまま、腰を突き出してください♡ イラストリアスのきつきつに締まった着衣おっぱいの中、溜まった精液でドロドロに満たしていいんですよ♡ 下ろしたてのチャイナドレスにこっそりマーキングしちゃいましょう♡ はい、ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゅっ♡♡」

イラストリアスの合図に従って腰が跳ね、荒ぶる脈動が始まった。睾丸をたっぷりと解され、たぶたぶに溜まっていた精液が駆け上り、乳内へと注がれていく。

誰もが羨む爆乳の谷間、そのラインが白く染まっていくのは視覚的なスパイスとして最上級であった。最後の一滴まで搾って欲しいと言わんばかりに、指揮官は必死に腰を押し上げ乳壺を精臭で満たそうとする。

ようやく射精が収まったのは、始まってから二十秒以上経過してからだだった。

「やっと止まりましたわね……ここのところ忙しかったですから、溜まっているのも無理ありませんわ。ほら、こんなにおっぱいの中いっぱいにして……♡」

また胸部の布をずり下げ、生乳をぶるりと解放すると、中に注がれた精液がべっとりへばりついていていた。未だ粘性を保った一部が、そのまま指揮官の骨盤へと垂れていく。

粘り気のあるザーメンブリッジは、一気に部屋の匂いを性のニオイで上書きしていった。

「お見事ですわ、指揮官さま。でも……まだまだお元気な様子ですね。どうしますか？ もっとイラストリアスの部屋で「休憩」していきませんか……今度はもっと熱い場所で、なんちやって♡」

どれだけ明日が早かろうと、この誘いを跳ねのける男はいない。

結局翌日の春節祭りでは、万が一の場合に備えて用意していた予備のドレスを着る羽目になったのであった。

オマケの続き

酔いどれプリンツに絡まれて……

絡み酒というのは厄介な酒癖である。

アルコールによる自己の解放——普段感情を抑えている人ほどその傾向が強い、などと言われている。

「ばああくん、えはふふふつ、たくだういまく指揮官」

派手に部屋の扉が破られた。

鉄血のミスティアス美女・プリンツ・オイゲン——普段の物憂げな性格の欠片すら残っていない酒乱ぶりである。

「うわっ!? え、プリンツ? ……明らかに酔ってるね。酒が入ったときの煩さだ……」

そういえば重桜の面々で宴会を行うのが今日だったな、と小耳に挟んでいたことを思い出す指揮官。

どうも、この酔っ払いはそこに混じってきたらしい。

というのも、現在の彼女の衣装が、重桜の面々が正月に着るという振袖なのだ。

記憶が正しければ、今年の正月で初めてお披露目したものである。

恐らく周囲に合わせる衣装がこれしかなかったので、再び引っぱり出してきたのだろう。

鶴の羽根を思わせる白と、忍び装束を想起させる黒。

左右で対照的な色合いの上に、金や赤で彩られた絢爛な模様が非常に映えており、煌びやかな藍色の牡丹や、亀の甲羅に似せた亀甲紋と呼ばれる、幾何学的な文様がプリンツの妖艶さをより際立たせていた。

それに加え、着崩れにより肉付きの良い太腿と脇乳が丸見えであり、特に右胸の黒子を見せつけるように晒しているの、非常に目のやり場に困る格好となっていた。

「やっだあく指揮官つてばつめたあくい、んくふふふふ」

「ちよ、近づくと前に服を正して、つてくつさあ………どんだけ飲んでるの

この子」

「だつてえ、重桜のお酒は本当に美味しいのよお。だからあ、沢山持つて帰ってきちやった〜」

一升瓶を勢いよく小机に並べる。

ラベルには「恋の記憶」やら、「仁王」やら、個性に溢れた酒名が記されていた。

「……え、まさかと思うけど、今から飲み直そうとしてない?」

「んもお、当然でしょう。私まだまだ飲み足りないもの……ほおら、指揮官も早く注ぎなさいよ〜」

「いや僕は別に要らな、つてもう盃に注いでる上に何かサイズがデカっがぶぶつぶぶぶ」

「ばあ〜ん♪ ほらほおら、もう一杯♪ もう二杯♪ じゃんじゃん 飲んじゃえ〜」

「……げほつ、げほつ、そんな急に飲めるわけわがぼぼぼつぼぼ」

悪酔いしたプリンツはどうやつても止まらない。

鬱陶しいだけでなく、強引さまで普段の三倍増なのだ。

一方的なさし飲みに持ち込まれ、矢継ぎ早に酒を浴びせられた指揮

官は——完全に伸びた。

「あつははは、た〜のしい〜。ねえ指揮官、もっと飲もうよ〜」

「……さすがに、ちよつと、間を置かせて。明日仕事に出れなく」

「ぎっばあ〜ん」

「……」

豪快なこぼし方であった。

机に突つ伏した指揮官の頭目掛けて、無情にも酒が降り注ぐ。

盃がぼぼ並々の状態だったこともあり、衣服までも濡らして染み込むほどの被害を被る。

全身がアルコールの臭気で満たされていた。

頭皮までべとつく不快感に、さすがの指揮官も我慢の限界が来たのか、

「……プリンツつうう〜」

掴みかかろうとしたものの、酔いで頭がぐらつき手がおぼつか

い。

辛うじて襟を掠めただけに留まる。

しかしその際、プリンツの着崩れが余計に激しくなり、胸部の露出がとうとう人様の前に出れない領域にまで入ってしまう。

「あら〜……ひつく、指揮官のお、け・だ・も・の〜♪」

「え、ちが、これただの手の弾み……うえっぷ」

何かを勘違いしてスイッチが入ってしまったプリンツと、肝臓の働きが追いつかず吐き気に苦しむ指揮官。かなり温度差が激しいのだが、それでもプリンツはお構いなしだ。

「もう……私を酔わせて、何をするつもりなのかしら」

「最初に入ってきた時から酔ってたでしょ、っあ、まさぐらないですよ、ああっ」

「えっははっはははは〜ん」

「いや何で下を脱がしにかかって、っああ駄目だ艦船の力に勝てない上に気分が、うえっ」

抵抗虚しく露出された下半身の武器は、当人の萎えを主張するように、普段と変わらぬ様相であった。

「ほら〜縮こまってないで、はやくおつきくしなさいよ〜」

指先で突いて催促するプリンツだが、べろべろに酔わされた指揮官にそれは叶わない。

多量のアルコールにより抑制された中枢神経では、興奮しようにも海綿体に流れる血流量が足りないのだ。

「……あのお、いい加減離れてくれないかなあ」

「えっふふ、指揮官からお酒の臭いがする〜」

「自分でぶっかけたこともう忘れたのか……ってそんなに寄りかかったら倒れ」

四肢に力が入らない指揮官は、プリンツの身体を支えきれず、そのまま畳の上へと押し倒されてしまう。

とろんと垂れた目で見つめてくるプリンツ。

両手でがつつり指揮官を捕らえており、脱出は不可能であると悟った。

「指揮官ったら、こんなところにお酒を隠してたのねえっふふふふ」
もたれ掛かるプリンツの和服は、乱れているところの騒ぎではな
かった。

肩をはだけた上に、腰の帯が緩んで紐状の下着が露わになってい
る。

太腿を股の間に差し込み、挟んで上下に擦りながらも、指揮官を弄
る手は止まらない。

衣服の擦れる音が生々しさに拍車をかけていた。

「いただきまあす、れうつぢゆつぷぷぷ……っはあ〜」

「ツ……首筋舐めないで、っは」

「駄目よお〜全部ちゃんど飲まなきや〜……んじゆば、ぢゆるるるる」
「だからっ、僕の身体に付いた汚いのじゃなくて、もっかい注げば、
あっ」

「ん〜っ……ここにもたくさんあるじゃなあい……ずずずっ、くっ
ひひひひ」

肌に染み付いた酒を吸いだすように、プリンツの舌が首筋から鎖骨
へと踵っていく。

弱点の責め方が沁みついているのか、酔いどれの状態でも的確に神
経の集まった部分を舐め上げ、強烈に唇の跡を付けてくる。

鈍った神経系を再び呼び覚ます、情熱的な愛撫。

酒の味を堪能するに足らず、あまりに刺激的な舌技である。

「んっふふふ、えっひひひ、やっど反応してきたわねえ〜」

「ううっ……」

されるがままで数分経ち、感覚が鋭敏になる頃には、海綿体も弛緩
のさせ方を思い出してきたらしい。硬くなりつつある逸物の気配を
腿で感じたプリンツは、ぐりぐりと押し付けて血流が多くなるよう促
し出す。押し返す感触に満足したのか、一度身体を起こすと机の上に
余っていた瓶を掴んで、乱暴に蓋を開け始めた。

「つれなあ〜い指揮官様はあ、こっとう飲ませ方が好みなんでしよ
うほらあ〜」

肩を揺らして、肘の辺りまで振袖を下ろしていく。

すると、ただでさえ半分見えていた乳房が、弾け出るように露出され、指揮官は思わず息をのんだ。以前の経験から、すっかりプリンツの胸に対する耐性が無くなっている上に、完全には脱がさないフェチズムが働いて、極上のカンフル剤と化していた。

プリンツはそのまま指揮官の頭の方へにじり寄ると、自身のはだけた胸元へお酒を注ぎだした。片方の手で両乳を抱きかかえているため、谷間から抜けきらず、三角状の酒の水溜りが形成される。

「はやく顔を上げないと、全部こぼれちゃうわよお。飲みたいでしょうくえっひひひっ」

「……ちくしょう、言わせておけば」

なけなしの意志が彼を突き動かした。

ふらふらと頭を上げた指揮官は、そのままプリンツの谷間へ顔を打ち付ける。

飛沫が跳ねるのにも構わず、拙い舌遣いで谷間酒を飲み干そうとする。

乳房が揺れて不安定なのが煩わしくなったのか、気付けば両手でプリンツの双丘を鷲掴みにしていた。指が乳房へと沈み込み、振袖の皴がより險しくなるほど強い力で掴みながら、一心不乱に吸い上げる。

しかし、プリンツが間髪を入れず酒を継ぎ足していくので、一向に枯れる気配が無い。

「もう……飲めない……限界」

やがて耳まで朱色に染まった指揮官は、力尽きてそのまま乳のクツションへと顔が埋もれた。顎が丁度谷間へと収まり、身を預けると最上の柔らかさで顔面を癒してくれる——鼻先まで酒の水位が上がついていなければの話だが。

よく顔を谷間で挟まれる行為を乳に溺れる、などと言うが、実際に谷間で溺死する危険に晒されるとは指揮官も思っていなかっただろう。

「あらごめんなさあい〜」と言ったプリンツが注ぐのを止めなければ、本当にそうなっていたかもしれない。

「ひっく、えっふふ、こんなに腫らしちゃってえ〜、っはははは、そりゃ

限界よねえ」

「そつちじゃないって……」

訂正しよう、彼女は身を案じて中断したのではなかったらしい。

小馬鹿にした口調で意識を下半身へと向けている。

火照った手を伸ばすと、それ以上に熱く滾った肉棒を摩り始めた。

裏筋に沿って指を這わせていき、カリ首をなぞって登頂する。

酒ですっかり粘ついた掌が亀頭へと絡みつき、大きさを確かめるように擦っていく。

やはり酔いの影響が強いのか、普段の硬さには及ばないものの、勃起し切らない状態で甘く弄られるのはかえって心地良い快感を覚えさせた。

「ほらあちやつちやと寝転がりなさいよ、だああくん」

かと思えば、プリンツの突き飛ばしによって指揮官は壁に激突し、そのままたれ掛かる姿勢へと移る。

猫の手を作り、股の間へとすり寄って来るプリンツ。

ぶつかつた痛みを訴えようとする指揮官だが、弛んだ胸を抱えて交互に揺らす様を見せつけられては、次の言葉が出てこない。

「あらあら〜目が怖いわよお指揮官」

「……今のは思いつきり誘導してる。卑怯でしょ」

「んふふふ、それじゃあくこのびんびんに立ってるおつかなあ〜いモノ、没収しちやおうかしらあ」

「えっ、そんないきなり」

「だあくめ、待ってなんかあげないわ」

重力に逆らい、跳ね上がる肉棒の上から覆い被さるようにして、乳房が包み込んでいく。

まだ乾いていない酒のせいか、ねっとり粘つく乳肉から押し返してくる圧がとても強い。

プリンツはやや前傾姿勢となり、深い谷間に逸物が全部隠れるように動かす。

腰を膝の上に乗せる体位とは違い、プリンツ自身がうつ伏せの体勢のまま足の間に滑り込んでるので、前後に引き抜く動作が多くな

る。

べつとりとした胸が竿へと吸い付きながら離れ、近づくとふんわり押し付けるように包まれる。その繰り返しは堪らなく気持ち良い。

「んっふふっやっぱりこれが好きなのねえ、すっかり拗らせちゃってえ」

「……僕の、せいじゃない。プリンツがそうやって、毎回胸で搾ってくるから、あっ、癖になっつて」

「でもちよつと動かしづら〜い、んっっ……れるあ」

「いつ!?!」

前触れもなく、舌先から唾液を垂らして胸の中に注いでいく。

飲酒の影響か、ひんやりした口内で分泌された粘液はやや冷たい。

しかしそれも直に、乳と交わる熱によって煮えたぎっていくだろう。

そうして前に体重をかけると、ぐっしより濡れた谷間が滑りよく肉棒を抜き上げ、指揮官は悶絶の声を漏らす。

「あははっ、だらしない顔になっつてるわよ〜指揮官。やっぱり好きなんじゃない〜」

「うっ、こんな、酔っぱらつたまま責められて、んっ」

「もお、無駄な抵抗しないでさっさと射精しなさいよ〜それとも締め付けが足りない〜?」

——むぎゆうううう。

上から押さえ付けていた両手の圧が高まり、より乳肉の密着が激しくなった。

先端から根元まで隙間なく圧迫され、乳房全体の重みをひしひしと感じる。

普段ぶら下げている脂肪の塊はこんなにも重いのだと、身を以って味わわされる。

それを奉仕のために使わせている事実が、何よりも射精欲を煽つた。

「ぱん、ぱん、ぱん♡　　どんどん硬くなっているわよ〜そんなにおっぱい射精したいのかな〜ふふふ」

酔ったプリンツはいつになく饒舌だった。

悶える指揮官の顔をもっと引き出そうと、乳の動きに合わせて変化する水音を、わざわざ言葉にして告げてくる。

「それ、ぐりぐり♡」

「ああっ、あっ、それだめっ」

「ふうん、それってなあに？　こうやってぎゅっど寄って、ずつぶんと落とされるのがだめえ？」

「分かっているならやる、なあ……！」

「えっははっ、腰浮いちやってるくかっわいい♡」

否が応でも身体を反らしてしまう指揮官。

小刻みに打ち付け、波打つ乳房の動きに耐えかねたのか、肉棒がぶるりと震え出す。

尿道を昇る精液が放出寸前だと訴えかけている証だった。

「ふうん、もう限界なのねえ。何も言わなくても分かるのよ指揮官。あれから何回私にこれ……パイズリさせたのか覚えてるかしら？」

「……」

「そうよねえ、思わず口を閉じちゃうくらいはやってあげてるわね」

互い違いに擦れる双丘が速さを増していく。

「うっふふっ……まで言ったら、もう気付いてるでしょう？　最後に

はあ、何て言えばいいんだっけ？」

「……ああ」

「んっ？」

「……乳内射精なかだしさせて、くださいっ」

降参の言葉と同時に、根元から搾り取るように乳肉が締め上げられる。

その中へと、鉄砲水のような精液がたっぷりと放たれた。

射精の勢いで暴れる肉棒を、きつい乳圧が抑え込む。

脈動を繰り返すたび、つま先まで伸びきった足が痙攣を起こし、逃げ場のない快樂が身体中を駆け巡っていく。最後まで乳の中へと出し切れるよう、徐々に乳房を緩めて揺さぶると、残っていた白濁液もぶるりと噴き出した。

「相変わらず量が多いわねえ。ほら見なさい、こんなに糸引いてるわよ」

谷間に架かった精液の糸を、伸ばしたり縮めたりして弄ぶプリンツ。

あんまりやりすぎると振袖にまで垂れてしまうよ、と言いたかった指揮官だが、射精直後の動悸に加え、依然として続いている酔いの苦しみに耐えるのが精一杯だった。

その後、暫くぶっかけられた男汁で遊んでいたプリンツだが、突如何かを閃いた顔を見ると、胸から精液を掬い上げてそのまま口へと運んで行った。

そしてあろうことか、余っていた酒をそのまま喉にぶつける勢いで飲みだしたのだ。

「……ぶっはあく、ちよつとく肴にしては塩気が足りないわね」

「いや……そういう問題じゃないと思う」

「ん？ あんたも飲んでみれば分かるわよ」

「は？ え、何で酒を含んだまま顔近づけて、いや、やだやだやだ、なんで自分の出したもので飲まなきゃいけないのさ、そもそもこれ以上の酒は本当にもどすからタンマ、やだあああつ」

翌日、執務室の机に強壯剤を並べて、げっそりとした顔の指揮官がいたそうなの。

ついでにプリンツはけろりとしていた。